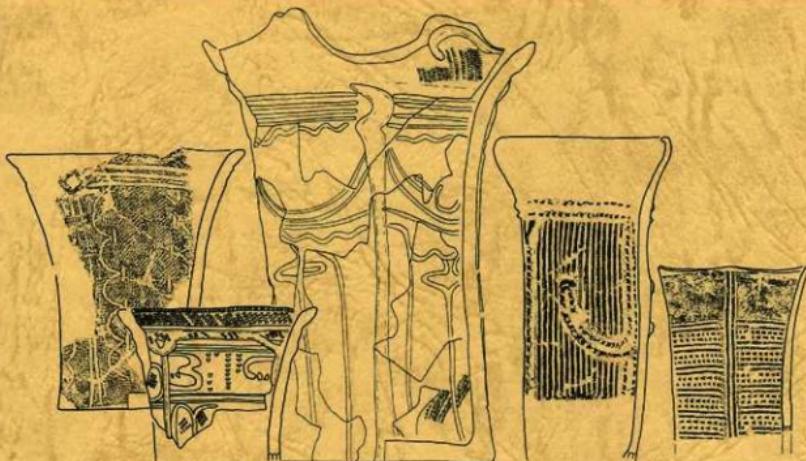


日影田遺跡

HIKAGEDA SITE

(第1・2次調査)

—県営高根南団地建設に伴う発掘調査報告書—



1995. 3

山梨県教育委員会

山梨県土木部

日影田遺跡

HIKAGEDA SITE

(第1・2次調査)

— 県営高根南団地建設に伴う発掘調査報告書 —

1995. 3

山梨県教育委員会

山梨県土木部

序

本書は、県営高根南団地建設工事に先立って1993・1994年度の両年にわたって行われた、八ヶ岳南麓の山梨県北巨摩郡高根町下黒沢に所在する日影田遺跡の発掘調査報告であります。

本遺跡が位置する八ヶ岳の南麓は、縄文時代以降の各時代にわたる遺跡が数多く存在する地域であります。その広大な地域の一角にある日影田遺跡の調査によって縄文時代から江戸時代にかけての遺構が明らかとなり、この地に、約五千年前から人が住んでいたことが証明されました。遺跡の存在する地は、太古の人々が安全かつ快適に生活を営んでいた証であり、これは現在においての住みよい指標と考えてもよいでしょう。この2カ年の調査で縄文時代の住居跡4軒、竪穴状遺構4基、焼土跡10基、貯蔵・墓・ゴミ穴等の用途が考えられる土坑113基、ピット群の他、平安時代の掘立柱建物遺構、室町時代の溝、江戸時代の墓と畝状遺構とそれらに伴う各時代の土器や石器などが発見されました。特に縄文時代の集落は、出土した土器から中期の初め頃と中頃に営まれたことが判りました。中期の初め頃の住居跡の形態は、はっきりせず規則性がないことや出土する遺物の量が少ないといった特徴があります。これらのことから生活の営みは定住を主とする長期的なものではなく、短期のキャンプサイト的な要素の強いものであり、周辺地域に存在する同時期の遺跡との関連性や定住する村から離れた時点での生活を探る上で大変興味深いものであります。

この調査によって、過去の分布調査等で明らかにできなかった、木々の密集する原野地帯での遺跡発見につながり、記録保存することができました。しかし、未だ日の目を見ないこうした所に立地する遺跡が調査もされずに破壊されてしまうこともあるかもしれませんので、今後もより一層の地道な調査が要求されることに気付かされます。今後の調査研究の進展により、本遺跡と周辺遺跡との関連性が少しでも解明されることに期待したいと思います。本書を学習や研究の資料としてご利用下さいますよう念じてやみません。

末筆ながら、調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係各位、並びに調査に従事された方々に厚くお礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

目 次

序

例言

凡例

目次

第Ⅰ章 発掘調査経過	1
第1節 調査日程	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査方法	2
第Ⅱ章 環 境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 遺構と遺物	5
第1節 住居跡	5
第2節 壑穴状遺構	17
第3節 焼土跡	19
第4節 土 坑	23
第5節 ピット群	35
第6節 集石遺構	46
第7節 据立柱建物跡	46
第8節 溝	48
第9節 墓 坑	50
第10節 畫状遺構	51
第11節 遺物集中区	52
第12節 試掘調査・包含層出土遺物	54
第Ⅳ章 考 察	74
第1節 繩文時代の遺構・遺物について	74
第2節 出土石器について	76
第3節 第1号住居跡の炉について	77
第Ⅴ章 まとめ	81
附 備	82
炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定	82
出土人骨について	84

例　　言

1. 本報告書は、県営高根南団地の建設工事に先立って、1993・1994年度に行った日影田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は山本茂樹・野代幸和が編集した。執筆分担は次により、原則として文末に明記したが、分析依頼・委託した部分については、文頭に記した。また、考察は調査関係者の協議を経て、執筆されたものである。
山本茂樹・澤登正仁・野代幸和・三田村美彦（調査研究課）
村松佳幸（山梨県埋蔵文化財センター調査員）
藤根 久（パレオ・ラボ）
森本岩太郎（聖マリアンナ医科大学）
3. 遺物の接合、復元、実測、トレースおよび図版作成にいたる過程において、下記の方々の協力を得た。
平 重蔵・長田てる美・齊藤律子・有賀ひろ子・中込星子・北村春美・鈴木由香・白川 翠・田代佐紀
4. 遺跡の写真は、それぞれの年度の発掘担当者が撮影し、遺物写真は山本茂樹・野代幸和がおこなった。
5. 炭化物およびその年代測定はパレオ・ラボに、人骨の鑑定は聖マリアンナ医科大学に依頼した。結果は附編の中に掲載した。
6. 調査の図面・写真・遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　　例

1. 掲載した図面の縮尺は、原則として、住居跡は60分の1、土坑は30分の1および60分の1、溝・ピット群などは120分の1、土器実測図・拓本は3分の1、石錐などの小型の石器類は3分の2、その他の石器は2分の1であるが、特殊な遺構および遺物はこの限りではない。
2. 拓本で両面を載せてあるものは、断面右側が表面、左側が内面である。
3. 石器の内、磨石などの磨面には  のスクリントーンがかけてある。
4. 遺構平面図のスクリントーンは次のとおりである。
粘土  ・ 焼土 
5. 遺構平面図のインレタは次のとおりである。
●土器・▲石器・△石・■炭化物
6. 遺構番号は命名した順番に1・2・3…と掲載したが、部分的に整理の段階で性格的に不明なものがあったため、これらを欠番とした。本文中でもそのまま欠番にしたため、掲載はしていない。

第Ⅰ章 発掘調査経過

第1節 調査日程

県営団地の建設予定地となっている日影田遺跡について、遺構および遺物の確認調査を行い、県建築住宅課との協議により、立ち木を残すなどの処置を施す部分以外で、工事によって直接影響を受ける部分の、記録保存を目的とした調査を2年間にわたり実施した。

試掘調査 1993年4月22日～4月30日

試掘調査では、まず団地建設予定地の約9,000m²について実施した。この結果この予定地部分に遺構および遺物が存在することが判明したため、本調査を行うべく協議を開始した。

第1次調査 1993年6月21日～10月8日

第1次調査では、団地建設予定地の南側部分の約5,000m²を調査し、住居跡のはか炉跡、土坑といった縄文時代中期の遺構のほか、畝状遺構や溝、墓など中・近世の遺構が発見された。

第2次調査 1994年4月27日～7月29日

第2次調査では、予定地の北側部分の約4,000m²を調査し、住居跡のはか炉跡、土坑、ピット群といった縄文時代と考えられる遺構を中心に発見できた。

(野代)

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター 所長 大塚 初重

次長 三科 英訓

埋蔵文化財

指導幹 森 和敏

調査研究課長 田代 孝

(第1次) 調査担当者 澤登正仁(主任文化財主事)

今福利恵(文化財主事)

作業員・整理員 八巻久子、八巻知子、小宮山きよ、日向たまの、田中恒子、井富保仁、窪田金博、小林文治、横山幸男、新海登子、半田初子、菊原幸男、菊原すえ子、菊原はつよ、清水貞子、酒巻正道、土屋辰江、古屋和喜子、澤谷滋子、小宮山進、小林昭子、久米裕子、松本茂枝、吉田多美子、清水よ志み

(第2次) 調査担当者 山本茂樹(主任文化財主事)

野代幸和(文化財主事)

作業員・整理員 八巻久子、八巻知子、小宮山きよ、日向たまの、田中恒子、井富保仁、窪田金博、小林文治、横山幸男、新海登子、半田初子、菊原幸男、菊原すえ子、菊原はつよ、酒巻正道、土屋辰江、浅川民子、浅川茂子、浅川保代、平嶋弘子、八巻栄、荻原光代、雨宮洋子、長谷川紀子、佐野由美子、北村春美、木之瀬浩美、深沢聰美、雨宮徹、小林健展、金杉玲子

協力者・機関 県建築住宅課、高根町教育委員会、雨宮正樹、須玉町教育委員会、山路恭之助、明野村教育委員会、佐野 隆、聖マリアンナ医科大学、森本岩太郎

(野代)

第3節 調査方法

高根町営住宅建設事業に先立ち、1993年に当センターによって遺跡確認調査が実施され、その結果、遺構・遺物が発見されたことにより本調査となった。確認調査は、建設予定地の全域に幅約1m、長さ10~20mの試掘溝を合計22本設定して行われた。調査区全体の面積は約9,000m²が対象となるため、第1次・第2次と2回に及んで調査が行われた。

第1次調査に至っては、1993年度工事分の調査面積約5,000m²内に5mのグリッドを設定し、東から西へA・B・Cへのアルファベットを、南から北へ1・2・3への算用数字を付した(第3図)。

第2次調査は、残りの約4,000m²に第1次調査で設定した5mグリッドを延長して行われた。表土から確認面までは第1次調査と同様重機による排土作業を行い、その後作業員による遺構確認を行った。特に建設予定地の北側では、谷部と考えられるような地形を呈していることから、遺構が極めて薄いと思われ試掘坑で確認調査を行った。その結果、表土から黄褐色土まで削平されていることが明らかとなった。

(山本)

第Ⅱ章 環 境

第1節 地理的環境

緩やかに傾斜した八ヶ岳南麓の裾野で、富士川と須玉川に解析された台地上に日影田遺跡は位置する。周辺は、八ヶ岳中腹辺りの湧水地から流れる甲川と油川にはさまれたやせ尾根状の地形となり、遺跡のすぐ東側を甲川が流れる。遺跡は、標高630m程の南に緩く傾斜したわずかな起伏をもつ尾根上に立地しており、森林を形成している。また周辺は畑地となっており、尾根を下りたところでは甲川を用水として稲作が行われている。

第2節 歴史的環境

山梨県が実施した昭和51年度分布調査において日影田遺跡は、「志合遺跡」として登録され、縄文時代早期、中期の遺物包蔵地として知られていた。また、昭和56年に文化庁より発行された『全国遺跡地図山梨県』では志合遺跡ではなく「下黒沢遺跡」として登録されている。しかし昭和61年に高根町教育委員会が発行した『山梨県高根町町内遺跡分布調査報告書』によると、この遺跡は範囲が縮小され、日影田遺跡周辺は含まれていない。名称は「大庭遺跡」とされ、日影田遺跡よりはるか南側にある遺跡とされている。この遺跡は縄文時代中期の藤内式、曾利IV式・V式、晚期の土器、そのほか中世末から近世の遺物が見つかっている。

1993年度の試掘調査において、遺物が確認されたことにより遺跡の存在の可能性が高まり、このような経緯によって小字名をとり『日影田遺跡』と名を付すこととなった。

日影田遺跡周辺には、同じ台地に存在する宮渡戸遺跡が、本遺跡の北側に位置し、縄文・古墳・中世の遺跡があり遺物も発見されている。かつて後原遺跡という名称で縄文時代の遺跡として知られている。

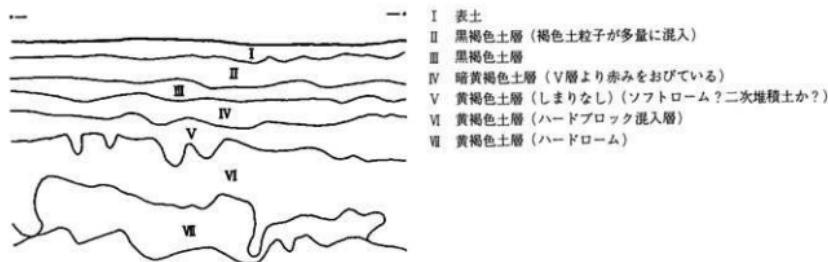
南側には打越遺跡が高根町教育委員会によって調査されており、縄文時代中期・平安・中世の遺跡であったことが知られている。かつては原山神社遺跡として、縄文・平安・江戸時代の遺跡とされていた。谷を隔てた東側には東入遺跡があり縄文・古墳時代、そして馬場遺跡は、縄文・平安・中世の遺跡となっており、かつて丸山遺跡として一つの遺跡として知られていた(第1図)。



遺跡一覧表

第1図 遺跡分布図

1. 日影田遺跡
2. 大塙遺跡
3. 打越遺跡
4. 湯沢遺跡
5. 板上遺跡
6. 馬場遺跡
7. 東入遺跡
8. 宮渡戸遺跡
9. 西ノ口遺跡
10. 新井A遺跡
11. 新井B遺跡
12. 大林原遺跡
13. 大林上遺跡
14. 海道前B遺跡
15. 大坪遺跡
16. 廉代A遺跡
17. 廉代B遺跡
18. 宮の前B遺跡
19. 西久保遺跡
20. 舟山遺跡
21. 長崎A遺跡
22. 長崎・後原遺跡
23. 長崎B遺跡
24. 中久保B遺跡
25. 宮尾模A遺跡
26. 宮尾模B遺跡
27. 宮尾模C遺跡
28. 沢田遺跡
29. 頭無A遺跡
30. 二木木遺跡
31. 東前田遺跡
32. 塚之越遺跡
33. 塚川の塚跡
34. 前村4遺跡
35. 前村5遺跡
36. 勝見遺跡
37. 前村2遺跡
38. 前村1遺跡
39. 東前田十三塚遺跡
40. 競馬場遺跡



第2図 基本土層

本遺跡を取り巻く周辺は、河川によって抉まれた台地上に遺跡が分布しており、大きく見渡すと台地の縁辺部にその存在が認められる。中央自動車道に沿って北へ、4から40-39-30-28と遺跡が延び、28から南へ下りてくるラインが見られる。それが、24-27-1-5のラインである。5から再び北へ11-10-19と延び、19-17-14と東へのラインが見られ、河川によって分断されている結果そのような見かけ上のラインが認められるのであろう。

(山本)



第3図 日影田遺跡全体図

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 住居跡

第1号住居跡（第4～10図）

位置 G・H-11・12グリッドに位置しており、主軸方位は、ほぼ南北にある。

形態・規模 ほぼ円形を呈するも、主柱穴との間を一辺とする多角形の可能性もある。炉を中心としてほぼ南北方向で6.25m、東西方向で6.30mを計測する。周溝は存在しない。確認面から床面までの高さは、27cmから40cmを測る。床面はほぼ平坦で、緩やかに南へ傾斜する。炉は、本住居跡の中央より北奥壁側に設置され、6個のほぼ人頭大の礫を長方形に配した石圓炉である。炉は、主軸に沿って長軸を有し、その規模は、93cm×80cmを測る。奥壁に近い炉石は、ほぼ垂直に設置され、他は平坦面を上に向けて構築され、この時期に共通する炉の形態を呈している。焼土は、炉の中央で厚く堆積が認められ、小礫が集中している。炉の掘り方は、炉石の設置方法により長方形に掘られ、130cm×100cmの規模を有する。また炉跡のすぐ南側の入り口部と考えられる方向には本住居跡に伴う地床炉が認められ、形態は皿状を呈し、焼土は炉の底に広がりを見せる。炉の規模は、110cm×80cmを計測し、深さは40cmを測る。本住居跡のように、一軒の住居に石圓炉と地床炉といったような炉跡が2箇所存在する住居は比較的珍しいものといえよう。これについては後述する。

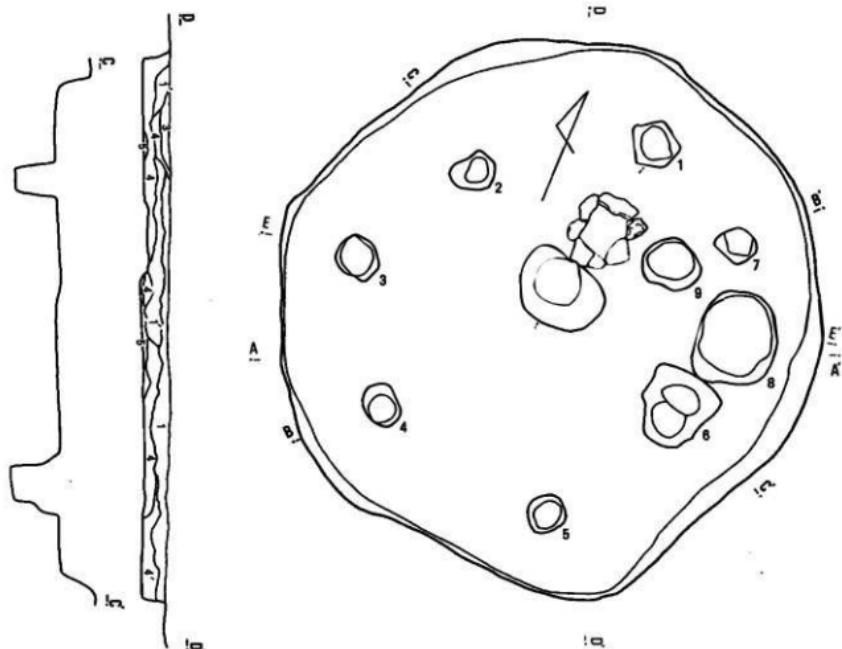
主柱穴は7本存在し、炉と奥壁の間に柱穴を有し、南側ではピット4とピット5の間隔が約2m開いていることから入り口部と考えられる。またピット8・9は、本住居跡に付随する施設と思われるが、その性格は不明である。それぞれのピットの形態と規模は、1ではほぼ五角形を呈し径60cm×55cm、深さ57cm、2は楕円形を呈し径55cm×43cm・深さは47cm、3は楕円形を呈し径50cm×46cm・深さは63cm、4は楕円形を呈し径50cm×40cm・深さは56cm、5は楕円形を呈し径45cm×42cm・深さは52cm、6は楕円形を呈し径90cm×80cm・深さは59cm、7は楕円形を呈し径50cm×44cm・深さは72cmを計測し、以上が主柱穴である。ピット8は楕円形を呈し径115cm×95cm・深さは55cm、9は楕円形を呈し径70cm×60cm・深さは53cmを測る。

本住居跡の覆土上面は、地山とはほぼ同色土のためプラン確認が困難な状況であったが、極小の炭化物の散布状況によって遺構の有無を確認せざるを得なかった。4層から覆土は黒色系統となり、土坑の存在を考慮して調査を行ったがさらにその下の5層では褐色土となり、この層の下面から炉が検出されたことから住居跡であることが判明した。堆積状況は、自然堆積を呈しているとは考えられず、埋め戻されたのか否かは判断しがたい。

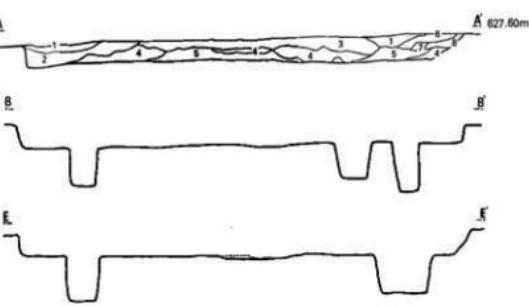
遺物の出土は、北壁側では少なく、住居中央付近から南側にかけて多く、確認面から床付近まで認められる。これは地山の形成が北から南へ傾斜しているために、このような状況となったものと考えられる。

遺物 1は半載竹管状の工具による沈線文が施され、その下部に粘土紐が貼り付けられる。2は沈線文とする。内面はくびれ、口唇部を欠損する。以上は、諸磯式期である。

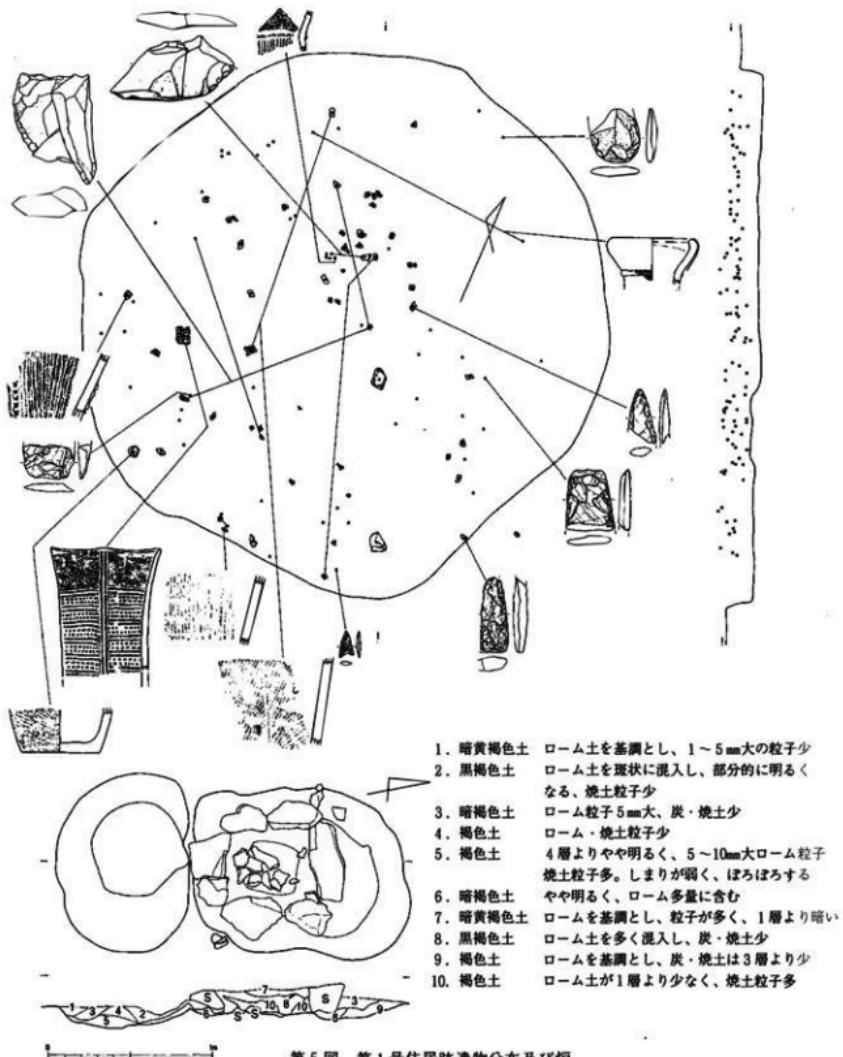
3は鶴頭状突起を有する破片である。繩文を地文とし、内面は三角状に浅く抉られる。4は口縁部の破片である。口縁部文様帯には繩文が施され、その下部には横走する沈線文によって口縁部と胴部に区画される。また口縁部の内面は「く」の字状に外反する。5は繩文を地文とし、横走する沈線文は口縁部と胴部を区画する。口唇部は、やや薄くくられ、半円状に抉れた部分は厚い。内面は、薄くくられた口唇部直下に横位に凹みが施される。内面は黒褐色を呈し、丁寧に磨かれている。6は口縁部の破片である。口縁部文様帯には繩文が施され、その下部には横走する2条の沈線文が認められる。口縁部の内面は「く」の字状に大きく外反する。7は口縁部の破片である。口縁部文様帯には繩文が施され、その後粘土紐が貼り付けられる。またその下部から横走する3条の沈線文によって口縁部と胴部に区画され、さらにその下部に半円状の沈線文が施される。胴部には、地文として繩文が施される。口縁部の内面は、「く」の字状に緩く外反する。8は口縁部の破片である。口唇部には繩文が施され、その下部には「V」字状の貼り付けがなされ、右脇に棒状工具による沈線が2条に引かれる。また「V」字状の下端には縦横の貼り付けが施される。口縁部の内面は緩やかに外反し、口縁部中央から胴部に



1. 褐色土 ローム粒 1mm大、炭化材少
- 1'. 褐色土 1層より炭化材少
2. 褐色土 1層よりやや暗い、炭化物 1~10mm大・ローム粒多
3. 暗褐色土 ローム粒 1mm大・炭化物少、斑状
ローム土混入
4. 黑褐色土 ローム粒 1~5mm大・炭化物 1~10mm大多、焼土 1~5mm大若干
- 4'. 黑褐色土 4層より明るく、炭化物が少ない。
ローム粒 1~5mm大多、焼土 1~5mm大多
5. 褐色土 部分的にやや暗い、炭化物 1~5mm大多、焼土 1~5mm大少
6. 褐色土 1・5・8層より明るい、ローム粒 1mm大・炭化物 1mm大少
7. 明褐色土 炭化物 1~5mm大少、ソフトローム状のものが混入
8. 褐色土 5・6層より暗い、炭化物 1mm大少

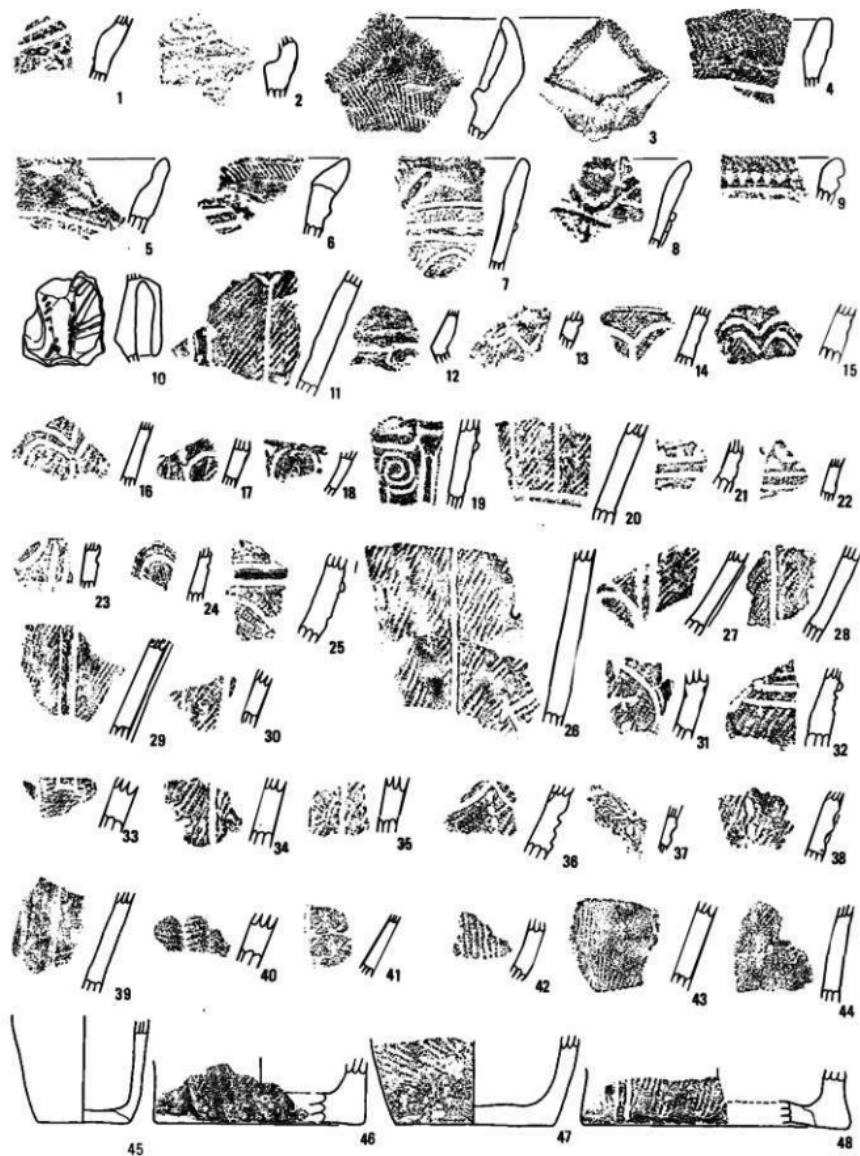


第4図 第1号住居跡

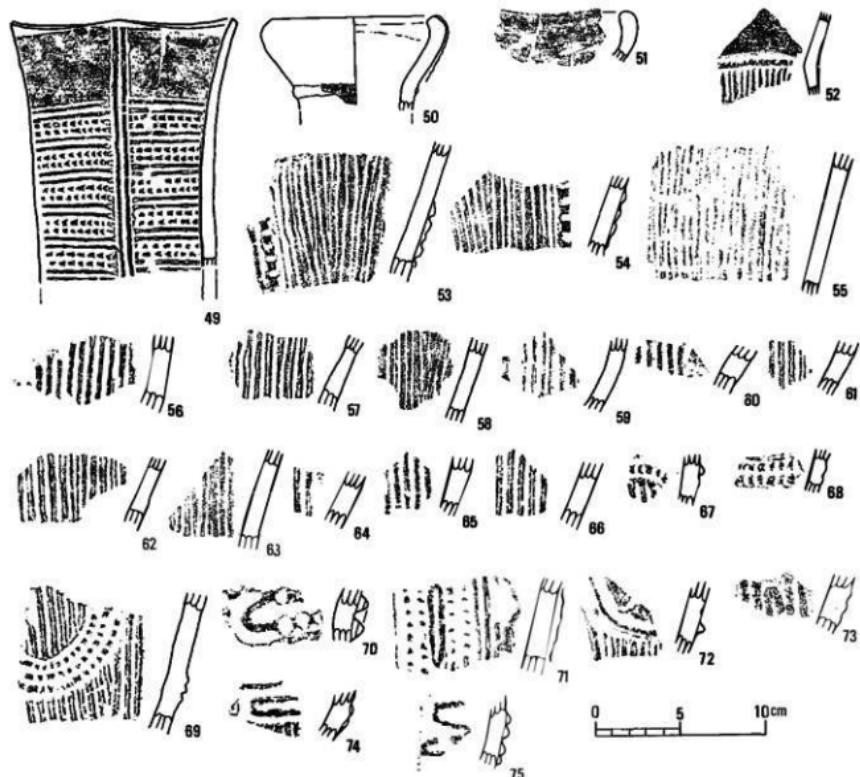


第5図 第1号住居跡遺物分布及び炉

かけてヘラ状工具による横方向への整形痕が認められる。色調は、口唇部の内外面では黒褐色を呈する。9は口唇部に縄文が施され、その下部には刺突文が横走する。口縁部と胴部を区画するかのように、刺突文の下部に1条の沈線文が横走する。10は器面に筒状の貼り付けがなされ、中空となっている。縄文を地文とし、棒状工具によって施文される。内面は、「く」の字状に外反する。11は縄文を地文とし、「Y」字状に沈線文が施され、左端に縦位に貼り付けされ、両脇に浅い沈線が施されている。12は「く」の字状にくびれた部分に沈線文が施される。13は縄文を地文とし横位に波状沈線文が施される。14は胴部の破片で、縄文が施された後に、上端に横位への沈



第6図 第1号住居跡出土土器(1)



第7図 第1号住居跡出土土器(2)

線文が施される。また横走する連続半円状沈線文が施され、連続する半円の谷間では縦位への沈線文が認められる。内面は赤褐色、外面は褐色を呈する。15は胴部の破片で縄文を地文とし、連続半円状沈線文を横走させる。16は縄文を地文とし連続半円状沈線文を2条に横走させ、縦位に1条の沈線文で区画される。17は縄文を地文として、半円状に沈線文がひかれる。18は半円状沈線文の両脇に三角印刻文が施され、横位に連続される。19は渦巻きと縦横に沈線文が施される。20は縄文が施された後に縦位の沈線で区画される。また下部には、横への沈線文が2条に引かれる。21は刺突文が施され、下端には沈線文が認められる。22・23・24は、沈線文が施されるものである。25は横位に貼り付けられた上下に沈線文を施し、下部には縄文が施文され、その後沈線による曲線が引かれる。26は3m離れた土器片と接合された資料である。縄文が施文された後、縦位に沈線文及び「く」の字状の沈線と「く」の字の角に短い沈線文の組合せられたものである。内外面ともに赤みがかった褐色を呈し、内面はヘラ状工具による整形痕が認められる。27は縄文が施された後、半隆起状の脇に沿って沈線文が縦位に施され、左脇には半円状沈線文が施される。28は縄文を地文とし、縦位に沈線文が引かれる。29は器面に縄文が施され、粘土紐による貼り付けがなされ、その両脇に沈線が縦位に引かれる。30・31・32は、縄文を地文とし、沈線で区画される。33は縄文が施された後に沈線によって半隆起状にし、その右端に沈線文が施される。34は縄文が施された後に縦位に沈線が引かれ、左端に横位の沈線が施される。内面は、ヘラ状工具による整形痕が認められる。35

は縄文を地文とし、その後縦位に沈線が2条引かれ、左上部にはトゲ状の沈線が引かれる。内面は、ヘラ状工具による整形痕が認められる。36は縄文を地文とし、波状に横位へ連続させ、波頂部下端に竹管状工具による刺突が縦位に施される。37・38は縄文を地文とし、棒状工具による刺突が施される。39は縦位に2条の浅い沈線によって区画される。40・41は縄文を地文とし、三角印刻文と細沈線文の組み合わせで施文される。42・43・44は、縄文を地文とするものである。45は、無文である。46・47・48は、底部の破片で、48は3条の沈線が縦位に施される。

以上の土器は、主に本住居の覆土の上層からの出土であり、3~48までは縄文時代中期初頭の五領ヶ台II式期に帰属するものである。

49は底部が欠損するものである。口縁部は4単位の波状口縁を呈し、口縁部文様帯は無文を基本とし、波頂部から半載竹管状工具による平行沈線が2本垂下され、4単位の縦区画が構成される。胴部文様帯は、横走する平行沈線文によって5段に区画され、区画内には半載竹管状工具による押し引きの爪形文が2段に施される。現存高は、波頂部から15.6cm、口径は13cmを計測する。50は胴上部から底部までが欠損し、口縁部はキャリバー状に内湾する。頭部には、紐状の貼り付けがされ、爪形の刻目が施される。一部残存している胴上部には縦位の沈線文で充填される。51は口縁部の破片で、内湾する口縁部はキャリバー状を呈する。52は、頭部の破片で、紐状の貼り付けが施され、その下部から縦位の沈線で充填される。53・54は、同一個体である。縦位に隆帯は貼り付けられ、刻目が施される。隆帯の両脇には、平行沈線文で充填される。55~66・73は、胴部の破片である。縦位に平行沈線文が施される。67・68・69は、爪形文が施され、69は「U」字状に半載竹管状工具による爪形文が3条に施され、縦位の平行沈線文は区分される。70は逆「コ」の字状に隆帯が施され、棒状工具による刻目が施文される。71は器面に粘土紐が貼り付けられ、2本1単位で半載竹管状工具による平行線文と爪形文を交互に施文される。72は「L」字状に隆帯を貼り付け、隆帯から下部は沈線で充填される。74は沈線によって半隆起に盛り上げられ、下端は縦位の沈線が施される。75は紐状の隆帯が貼り付けられる。

以上49~75は、主に覆土下層からで、特に49は床面上から出土である。縄文時代中期後半の曾利I式土器に位置付けられる。
(山本)

出土石器（第8~10図）

本住居出土の石器は22点を数える。その内訳は、石鎌2点(9.1%)、打製石斧6点(27.3%)、二次加工のある剥片4点(18.1%)、剥片10点(45.5%)、である。これは、遺跡出土石器総点数の18.5%を占める。

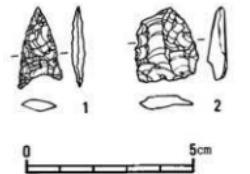
石鎌（第8図1・2） 1は完品で、無茎の凹基である。2は両側刃に細かな調整がみられ、未製品と思われる。先端部は欠損したと思われる。1・2とも黒曜石である。

打製石斧（第9図3~5・7~9） 3は基部・刃部・一側刃部が欠けている。側刃の形からおそらく短冊形と思われる。4は基部で、刃部の方に行くにつれて少しづつ広がっていく短冊形である。5は基部破片で、先が尖っている形である。6・8は刃部の破片である。9は刃部と基部が欠けた胴部破片で、短冊形であろう。石材は、3~5がホルンフェルス、8・9が頁岩、7が凝灰岩である。

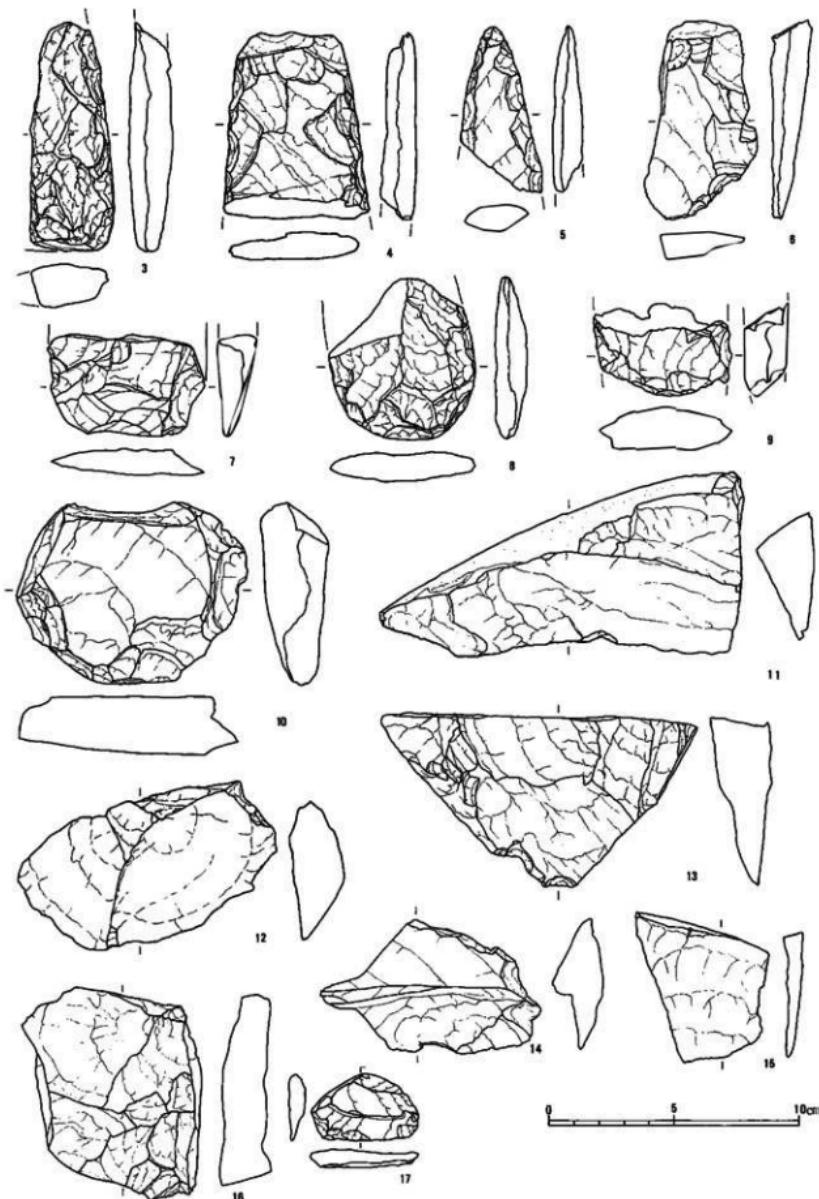
二次加工のある剥片（第9図10、第10図18・21・22） 10は一側刃部が粗く調整されている。18は19と20との接合資料だが、19・20が剥離された後に一側刃部が粗い調整を施される。19・20は二次加工されていない。21・22も接合資料だが、こちらは両側刃部を粗く調整した後、中央で折断したものである。18~22は凝灰岩で、全て同一母岩と思われる。

剥片（第9図6・11~17、第10図19・20） 10点出土している。11・12・14・19・20は凝灰岩で、二次加工のある剥片（10・18・21・22）と同じ母岩から剥離したものと思われる。6・13・17は砂岩、15・16は安山岩である。

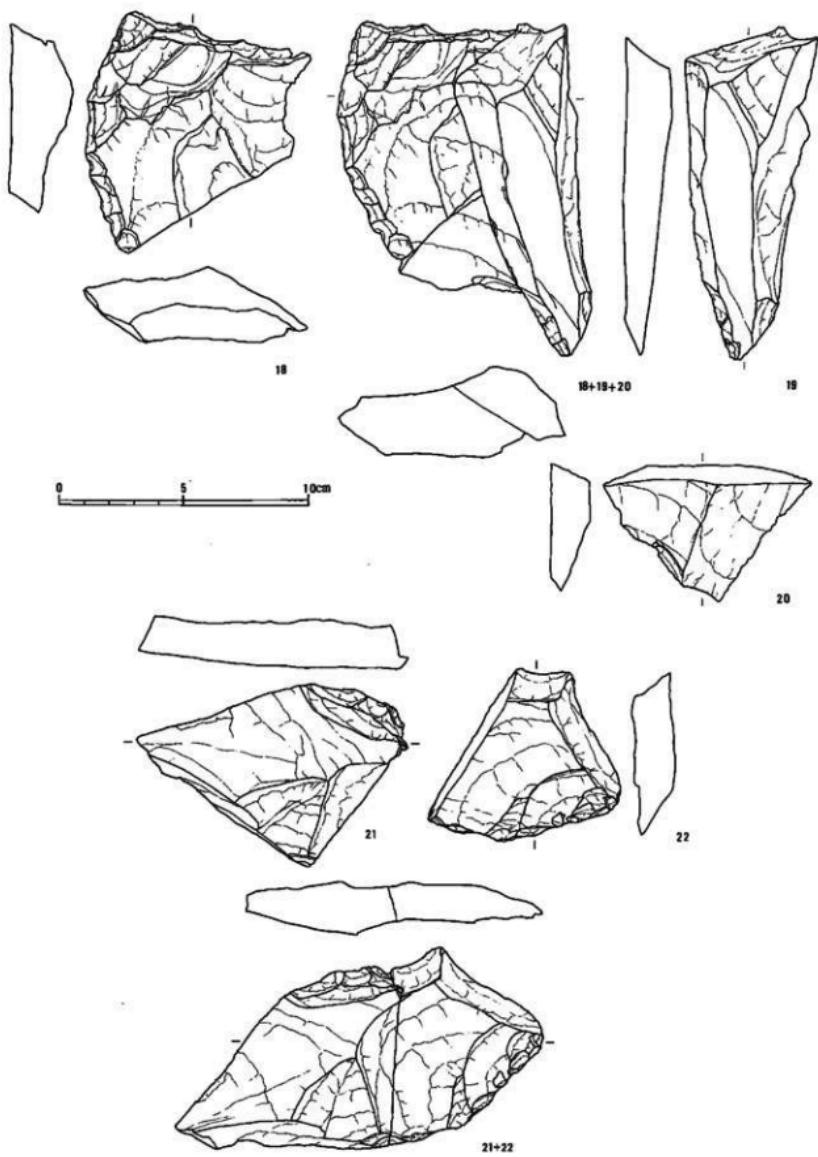
本住居内の遺物の分布状況を見ると、中央の炉の周辺と南側に土器・石器とも集中して出土しており（第5図）、炉の周辺には剥片類が多く出土し、住居の壁付近には石鎌や打製石斧といった製品が出土している。
(村松)



第8図 第1号住居跡出土石器(1)



第9図 第1号住居跡出土石器 (2)



第10図 第1号住居跡出土石器 (3)

第2号住居跡（第11・15図）

位置 遺跡の南東側に分布するもので、南側に緩やかに傾斜するE・F-5・6グリッドに位置している。

形態・規模 プラン確認が難しかったため、掘り込みは全く確認できなかった。はっきり柱穴と指摘できるものは無いが、貼床と考えられるものと、付属施設としての炉の可能性もある第5焼土跡としたものが、その北東部に隣接して存在していることが明らかにできたことにより、住居跡と見なしておきたい。貼床の規模は長径3.50m、短径2.80mを測り、隅丸の長方形に近い形をしているが、プランが不明朗なため、ここに示した規模に関する数値、および形態については確かなものではない。本住居跡の西側は第12号土坑に切られているが、直接住居跡に属すると考えられるピットは2基存在する。ピット1は径65×45cm、深さ30cm、ピット2は径55×40cm、深さ20cmを測る。炉と考えることもできる第5焼土跡についても一様記載しておくが、径98×87cm、深さ16cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっていいる。

覆土は分層することが困難であることから、埋没状況は不明である。遺物は覆土と考えられる部分から少量発見されているが、図に示せるものは少ない。よって住居跡の時代も明確にすることは困難なのであるが、縄文時代中期に位置づけられるのは確実であろう。

遺物 第15図に図示しているのは僅かに一点である。Iは深鉢形土器の口縁部破片であり、口唇部が肥厚する特徴を持っているが、土器の胎土の特徴が他のものと若干ことなるため不明な点もあるが、中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期にあたるものかもしれない。

第3号住居跡（第12・15図）

位置 遺跡の北東側に分布する住居跡群の一つで、北西側の緩やかな谷から登り詰めた平坦面のC・D-15・16グリッド位置している。

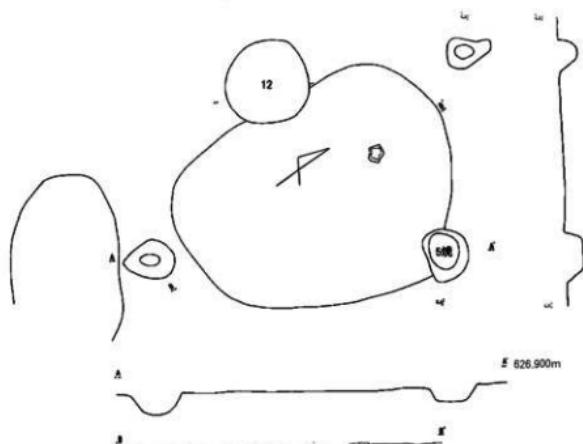
形態・規模 遺構は風成堆積による覆土のローム化が進んでおり、大変確認しづらい状況であったにもかかわらず、遺存状況についてはかなり良好な状態であった。住居跡は不整がかった隅丸方形を呈し、長径4.00m、短径3.90mを測る。住居跡の南側は、柄鏡形住居にみられるような張り出し状の構造がある。炉と考えられる施設を中心白色粘土を混入する貼床状のものが存在する。壁は北で15cm、西で15cm、東で25cm、南で10cmを測る。炉と考えられるものは地床炉で、住居のほぼ中心に位置し、覆土に若干の炭化物と焼土が混入しているのが確認できた。炉の長径は80cm、短径45cm、深さ25cmで、ピットが2つ並んだような状態を呈している。なお、住居の北側には屋外炉（第10号焼土跡）と考えられるものが隣接することも明記しておく。柱穴は壁沿いに11基存在するが、土層断面にも2基ほど浅いものが掛かっていることが確認できた。ピット1は径25×15cm、深さ19cm、ピット2は径24×23cm、深さ13cm、ピット3は径27×22cm、深さ20cm、ピット4は径30×22cm、深さ18cm、ピット5は径30×28cm、深さ24cm、ピット6は径37×32cm、深さ31cm、ピット7は径30×26cm、深さ33cm、ピット8は径24×23cm、深さ36cm、ピット9は径21×20cm、深さ33cm、ピット10は径27×26cm、深さ25cm、ピット11は径27×22cm、深さ11cmである。

覆土はレンズ状に堆積していることが窺えるが、前述のとおり下層においてピット状のものに切られている。これは、半埋没状況後再び住居として活用したことを見ているのかもしれない。遺物は主に上層付近において発見された。住居の年代は縄文時代中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式期に属するものである。

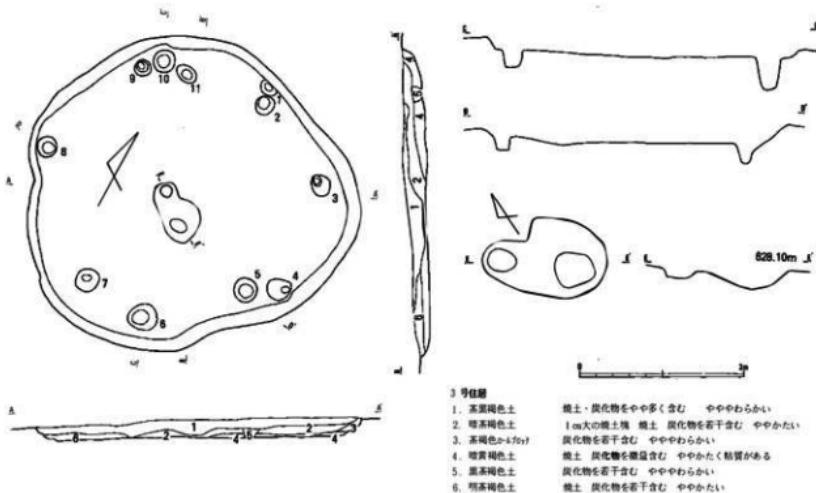
遺物 第15図の2～5がそれである。2は表面に逆「の」の字、裏面に「の」の字を施す口縁の突起で、この突起下に縄文が施されている。3・4は胴部破片で、縄文が施されている。5は縄文地に竹管による沈線が施されている。これらの破片には白色飴物が含まれている。

第4号住居跡（第13図）

位置 遺跡の北東側に分布する住居跡群の一つで、北西側の緩やかな谷から登り詰めた平坦面のD・E-17グリッドに位置している。

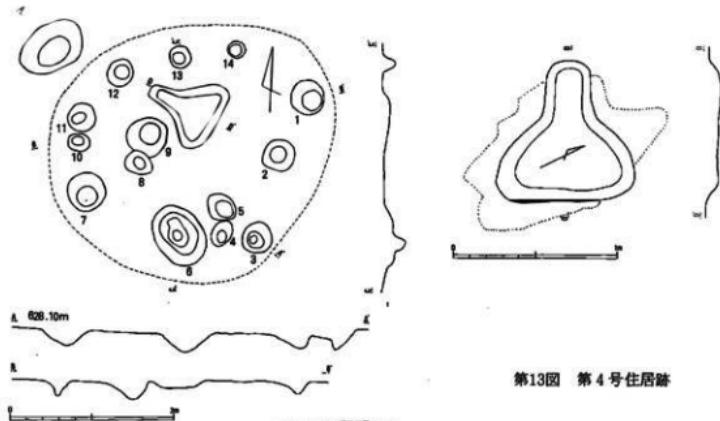


第11図 第2号住居跡

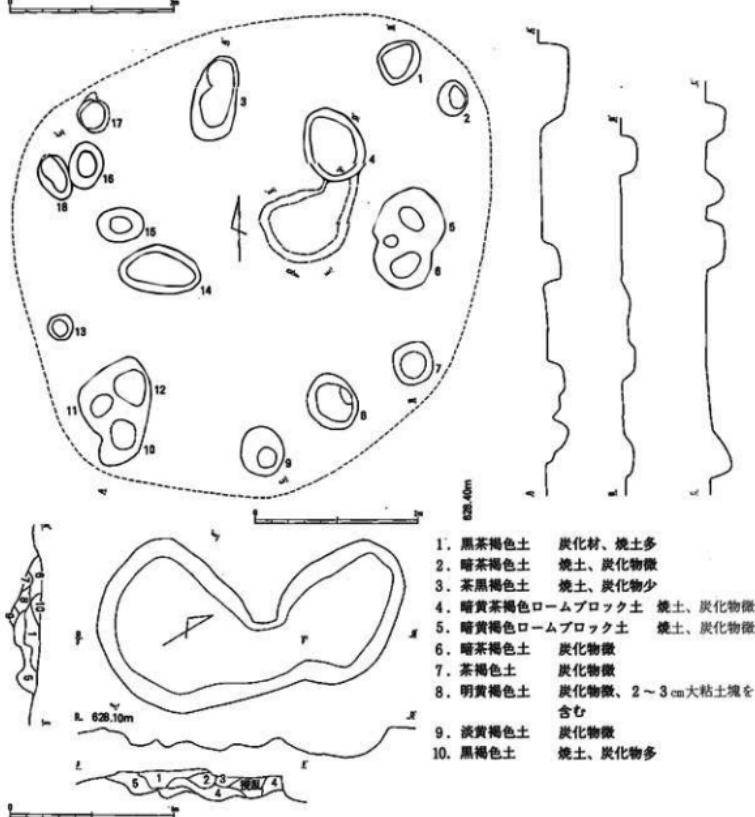


第12図 第3号住居跡

形態・規模 遺構は風成堆積による覆土のローム化が進んでおり、プランは全く確認できなかったが、焼土跡（第6号焼土跡として確認）を中心とし、ピット状の落ち込みが多數確認できたため住居跡とした。住居跡はピットの配列からほぼ円形を呈するものと考えられ、長径約3.80m、短径約3.50mを測るものと思われる。炉は地床炉で、T字状を呈し、長径92cm、短径87cm、深さ7cmを測る。この他の施設では土坑1基、柱穴14基を伴う。土坑は径81×57cm、深さ29cm、ピット1は径41×41cm、深さ14cm、ピット2は径43×38cm、深さ17cm、ピット3は径31×28cm、深さ12cm、ピット4は径33×23cm、深さ10cm、ピット5は径40×30cm、深さ16cm、ピット6は径77×60cm、深さ17cm、ピット7は径48×47cm、深さ17cm、ピット8は径36×28cm、深さ20cm、ピット9は径48×47cm、深さ20cm、ピット10は径31×22cm、深さ9cm、ピット11は径35×34cm、深さ10cm、ピット12は径34×31cm、深さ20cm。



第13図 第4号住居跡



第14図 第5号住居跡



第15図 第2・3・5号住居跡出土土器

cm、ピット13は径28×27cm、深さ14cm、ピット14は径22×21cm、深さ17cmを測る。覆土は存在せず、遺物も発見できなかった。しかし、ピットなどの覆土の状態から、この住居跡の年代は縄文時代と考えられる。

第5住居跡（第14・15図）

位置 遺跡の北東側に分布する住居跡群の一つで、北西側の緩やかな谷から登り詰めた平坦面のF・G-18・19グリッドに位置している。

形態、規模 遺構は風成堆積による覆土のローム化が進んでおり、プランは全く確認できなかったが、焼土跡（第11号焼土跡として確認）を中心に、ピット状の落ち込みが多数確認できたため住居跡とした。住居跡はピットの配列からはほぼ円形を呈するものと考えられ、長径約6.50m、短径約5.50mを測るものと思われる。炉は地床炉で隅丸方形がかった不整形を呈し、長径110cm、短径86cm、深さ10cmを測る。この炉と考えられるものを中心にピットが巡っているが、柱穴なのか土坑なのか用途が明確にできないため、ピットとして一括した。ピット1は径57×49cm、深さ20cm、ピット2は径92×36cm、深さ28cm、ピット3は径104×54cm、深さ36cm、ピット4は径92×71cm、深さ36cm、ピット5は径82×80cm、深さ11cm、ピット6は径52×48cm、深さ13cm、ピット7は径52×48cm、深さ13cm、ピット8は径72×69cm、深さ16cm、ピット9は径60×52cm、深さ28cm、ピット10は径82×64cm、深さ27cm、ピット11は径70×48cm、深さ21cm、ピット12は径75×50cm、深さ27cm、ピット13は径32×30cm、深さ4cm、ピット14は径100×58cm、深さ22cm、ピット15は径56×42cm、深さ21cm、ピット16は径56×41cm、深さ26cm、ピット17は径36×33cm、深さ54cm、ピット18は径55×37cm、深さ51cmを測る。掘り込みが確認できなかつたため、結果的に覆土も見られなかつた。よって遺物については、遺構の確認中に発見できたものしか図示できなかつた。住居跡の年代については五領ヶ台Ⅱ式期に属するものと考えられる。

遺物 第15図の6～8がそれである。6は無文地の口縁破片である。7は縦帯文を施す胴部破片である。8は沈線を横位に施す胴部破片で、縄文が施されている。これらの破片には全て白色飴物が含まれている。時期的には五領ヶ台Ⅱ式に含まれ、末期段階の大石式などと呼ばれているものもある。

（野代）

第2節 竪穴状遺構

本遺構から竪穴状遺構は4基確認されている。

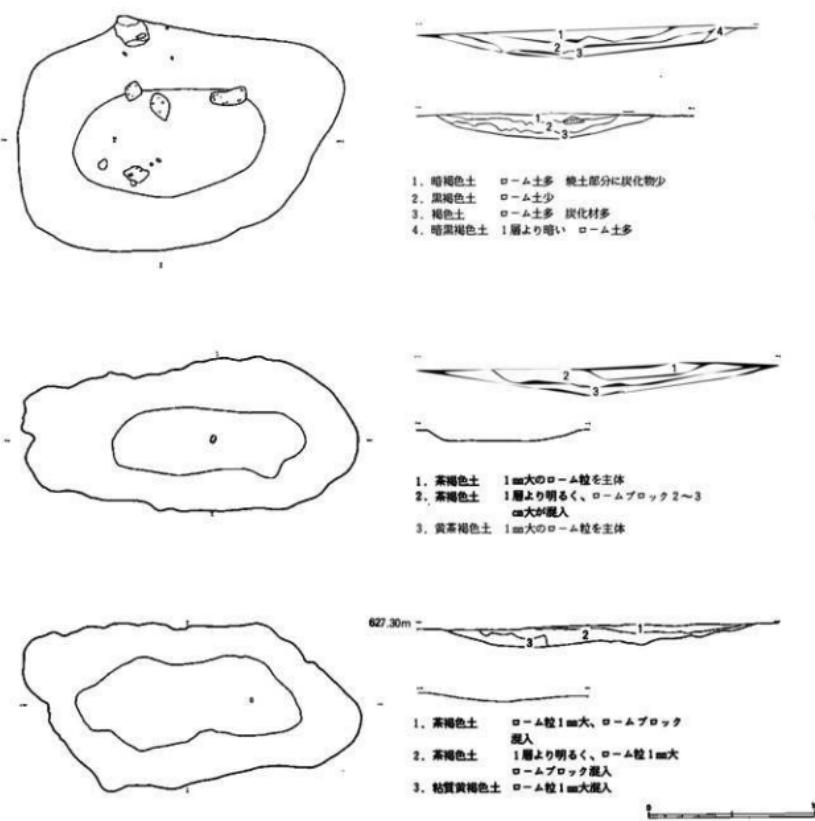
第1・2・3号竪穴状遺構（第16図）

位置 調査区中央やや南寄りの第1号住居跡と第2号溝に挟まれたH・I-9・10グリッドに位置する。第1号竪穴状遺構の北側約3mの所に第3号竪穴状遺構が、南東側約2mの所に第2号竪穴状遺構が第1号竪穴状遺構を中心心に「コ」の字状に位置している。

形態・規模 長軸×短軸×深さは、第1号竪穴状遺構が $4.13\text{m} \times 2.68\text{m} \times 0.32\text{m}$ 、第2号竪穴状遺構が $3.97\text{m} \times 1.84\text{m} \times 0.33\text{m}$ 、第3号竪穴状遺構が $4.15\text{m} \times 1.91\text{m} \times 0.24\text{m}$ であり、いづれも不整形な梢円形をしており、底部は皿状だが平坦面が少なく、立ち上がりは極めて緩やかである。

第4号竪穴状遺構（第17図）

位置 調査区北部のF-16・17グリッド、第5号住居跡の南東に位置している。第64・65号土坑を切っている。

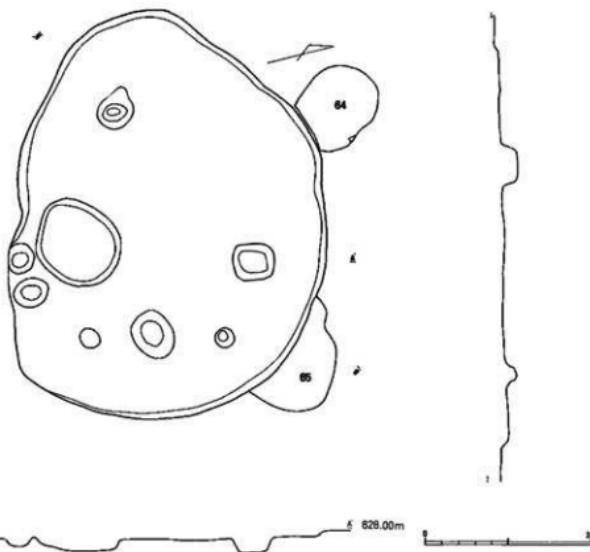


第16図 第1・2・3号竪穴状遺構

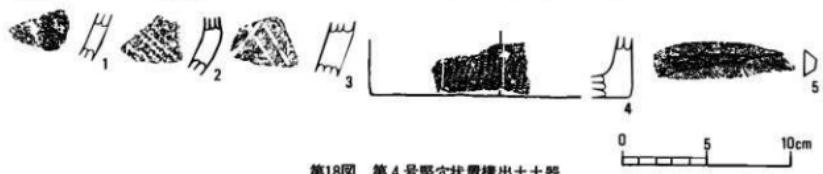
形態・規模 不整形な円形をしており、長軸4.89m、短軸3.86m、深さ0.15mである。1.10m×0.95mの大きいピットが遺構の南側に1箇所、径0.25~0.60mの小さいピットが7箇所ある。

遺物（第18図） 1~3は胴部破片で、1・2は地文に縄文が施されている。3は縄文地上に沈線が施されている。4は縄文地に、縦位に沈線が施されている底部破片である。5は隆帯破片である。これらは五領ヶ台II式に位置付けられ、本遺構の時期もそれに該当すると思われる。

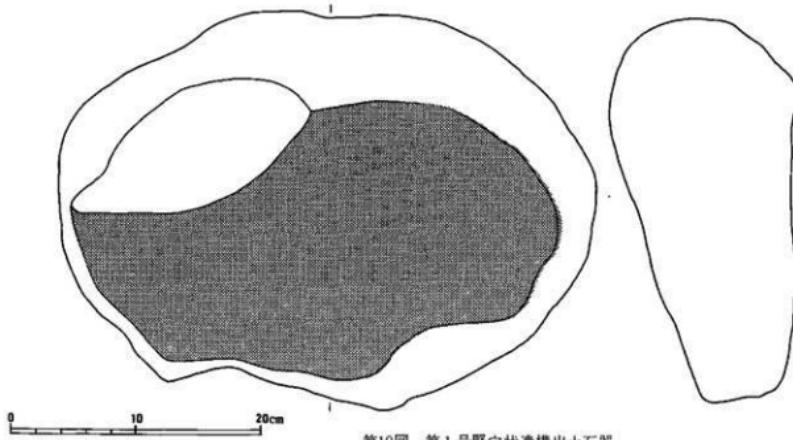
第19図は安山岩の台石である。（村松）



第17図 第4号竪穴状遺構



第18図 第4号竪穴状遺構出土土器



第19図 第1号竪穴状遺構出土石器

第3節 焼土跡

発見された焼土跡は、住居跡や土坑と区別したため、9基のみである。時期的にはすべて縄文時代中期初頭～後期に位置付けられるものである。

第1号焼土跡（第20・22図）

本焼土跡は、調査区の西側のL-9グリッドにおいて発見された。規模は長径0.85m、短径0.45m、深さは0.10mを測る。形態は不整形を呈している。底部の西側には、Pit状の落ち込みが見られる。壁は全体的に緩やかに立ち上がっている。本遺構上には集積遺構が存在していたことを記しておく。本遺構の時期は縄文時代中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期であろう。

遺物 第22図1～18がそれである。1～15は縄文地に沈線を施したもので、1～6、9のように胴上部破片には「Y」字状文が連続して施してある。16は無文である。13・17・18は縄文地に沈線と隆蒂文を施したものである。16以外はすべて同一個体の可能性がある。出土土器の総点数は33点である。

（野代）

第2号焼土跡（第20図）

確認面で焼土が認められ、アーバー状に広がりをもち、40×40cmの規模を有する。深さは10～20cmを計測し、掘り込みは50×60cmである。坑底は、緩やかな曲線を描き立ち上がる。

第3号焼土跡（第20図）

アーバー状に広がった焼土は、100×50cmで広がりをもち、全体の規模は110×80で梢円形を呈している。掘り込みは、皿状となる。深さは、確認面より20cmを計測する。坑底は、緩やかな曲線を描く。

第4号焼土跡（第20図）

形態は、梢円形を呈し65×50cmを計測する。立ち上がりは、緩やかで皿状となる。深さは、12cmを有する。

第5号焼土跡（第20図）

形態は、ほぼ円形を呈し80×72cm、深さは16cmを計測する。立ち上がりは、やや直に近く、タライ状を呈する。焼土は、不整円形状に広がる。

第7号焼土跡（第20図）

形態は、不整梢円形を呈し104×70cm、深さは16cmを計測する。立ち上がりは、東側では緩やかに、南側では直に近い。覆土は、ブロック状の堆積を呈し、中層で焼土が厚く堆積する。

第8号焼土跡（第21図）

本遺跡の焼土跡の中では、特異な形態及び規模を有するものである。形態は、ほぼ長方形を呈し305×94cm、深さはテラスの箇所で30cm、南の落ち込みで確認面より86cm、テラスから46cmを計測する。形態及び土層状態から、本遺構は、2基の重複が考えられる。長方形を呈する外周が新しく、南に存在する落ち込みが古いものと思われる。土層状態からは、4層の淡黄褐色土と7層の黄褐色土の色調は同程度であり、5層で新旧をわけることが可能であろう。また炭化物の混入度合いから、上層である1層から3層までに炭化物が非常に多く、焼土も認められることから、5層より7層までの遺構は、焼土跡とは異なる性格のものと想定される。

放射性炭素年代測定の結果より縄文時代後期に構築され、使用されたものと考えられる。

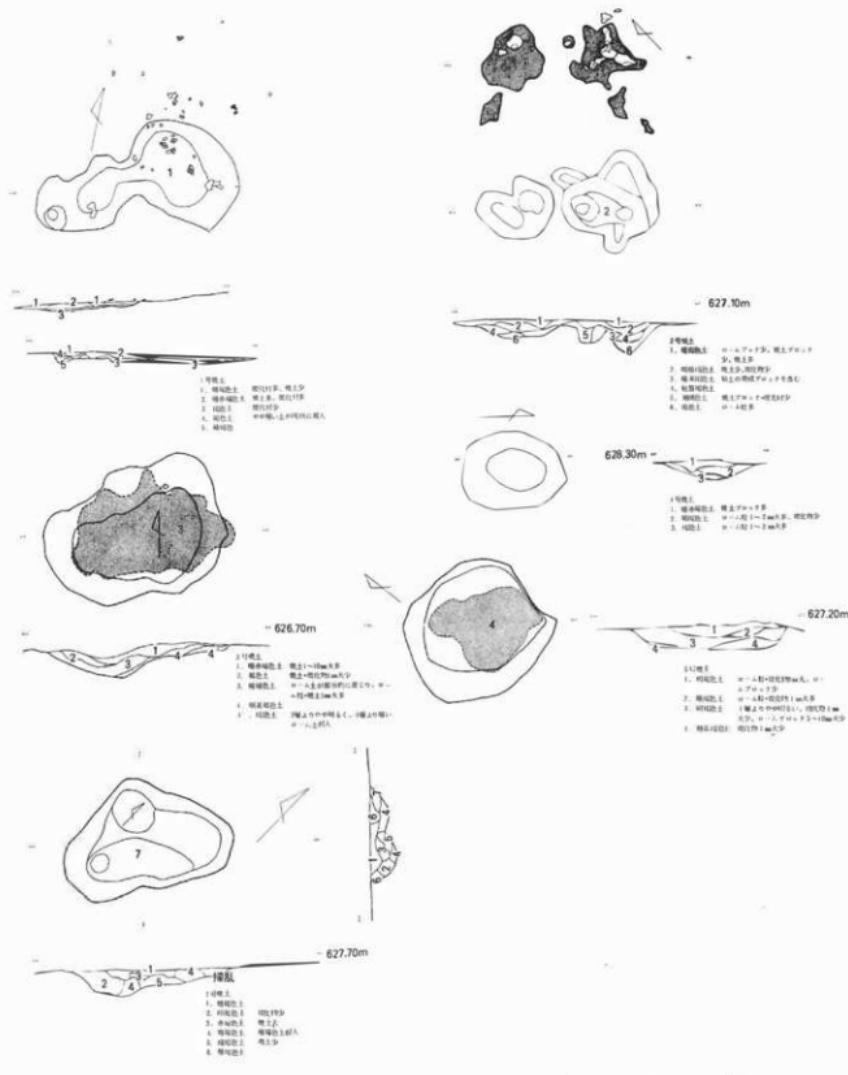
第9号焼土跡（第21図）

形態は、ほぼ梢円形を呈し240×152cm、深さは10cmを計測する。立ち上がりは、タライ状を呈する。焼土は斑状で、ブロック状に堆積する。

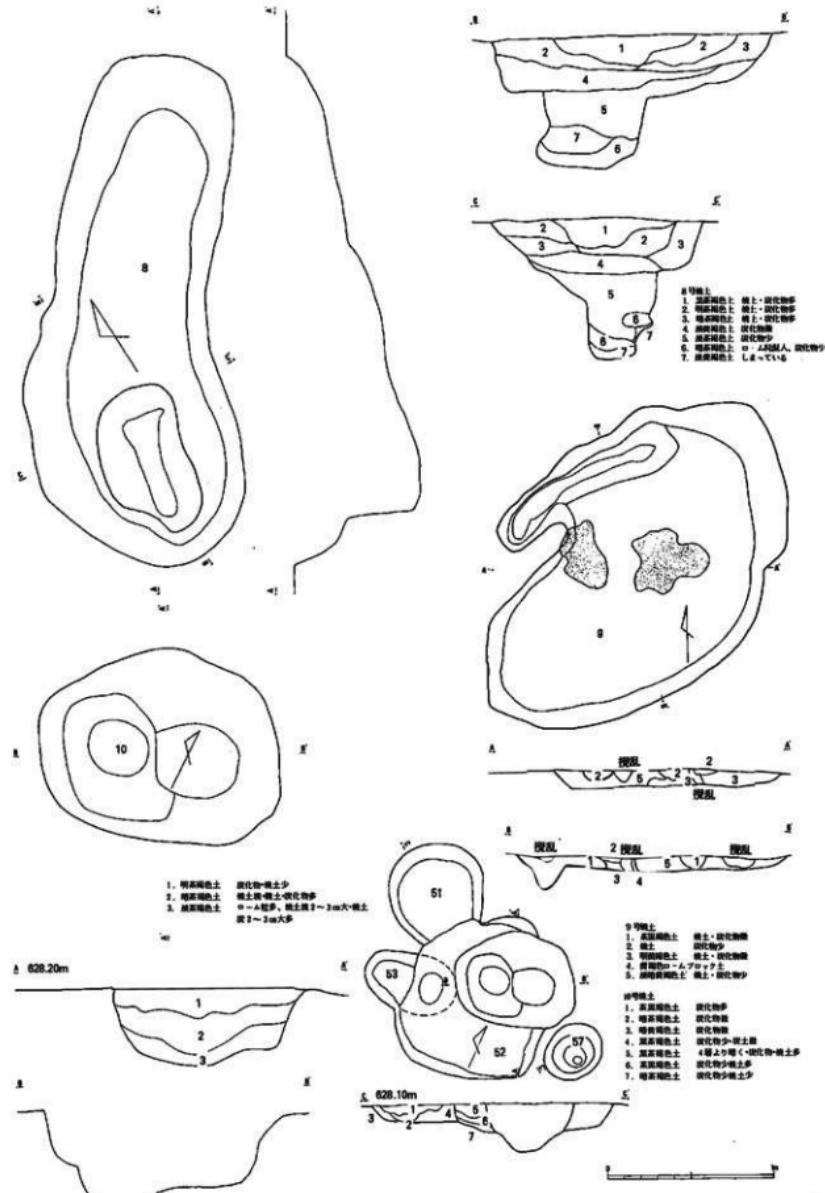
第10号焼土跡（第21図）

第51-52-53号土坑を破壊して、構築される。形態は、梢円形を呈し72×56cm、深さは30cmでは直に立ち上がる。焼土及び炭化物は、第2層中に多く認められる。3層では、2～3cmの焼土塊が存在している。また本焼土跡から縄文時代中期後半の土器片が、1点出土している。

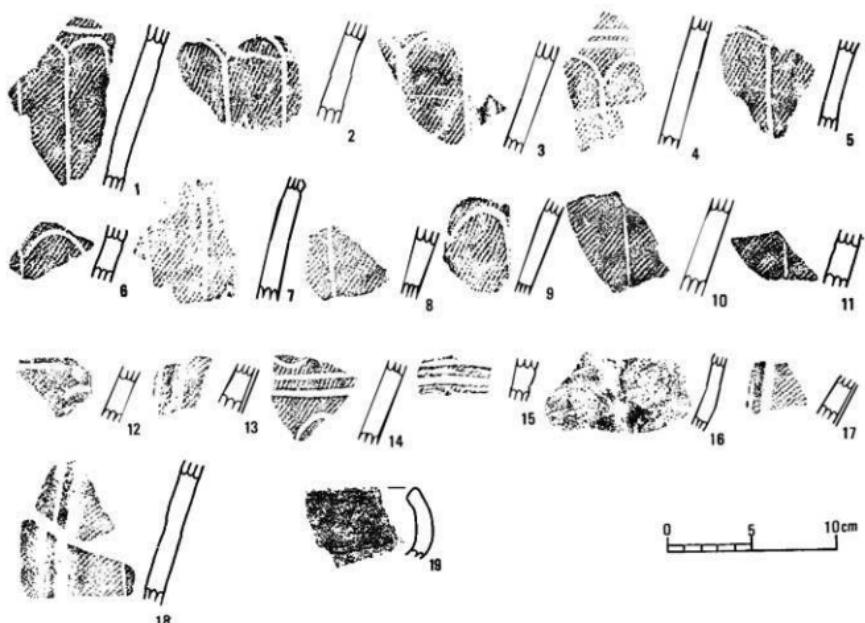
（山本）



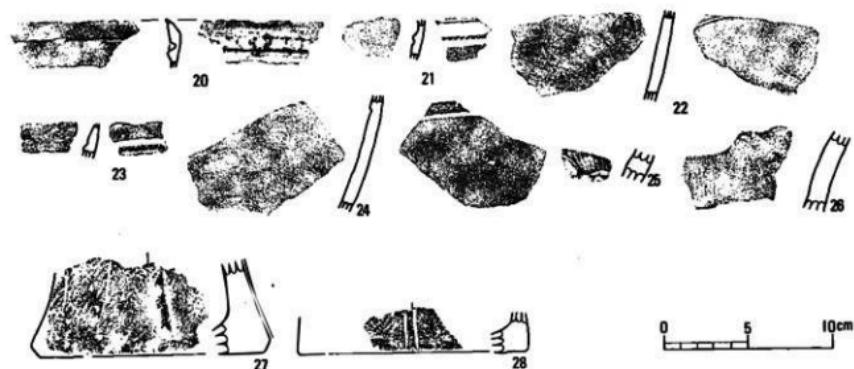
第20図 燃土跡(1)



第21図 燃土跡 (2)



第22図 第1・10号焼土跡出土土器



第23図 石集出土土器

第4節 土坑

今回の調査で確認した土坑は113基であるが、第10・33・39・40・52号土坑は欠番になっているので、実質は108基である。

分布の中心は、調査区北部から北西部にかけての住居跡がまとまっている地域と東部の第2号住居跡の周辺である。そこは、微高地の縁辺部と、そこを少し下ったところである。第2～5号住居跡の周辺には土坑は多いが、第1号住居跡の周辺にはあまり分布しない。また、調査区の南部から南西部にも土坑はほとんどない。

土坑の形態は不整形なものと合わせて楕円形をしたものが多い。土坑の半分以上が楕円形をしている。土坑の長軸：短軸比は1.5:1のものがほとんどで、それほど偏平な楕円形でなく、円形に近いものが多い。円形のものも約1/3ある。

土坑の大きさは、長軸45～222cm、短軸43～152cmの中にはほとんどの土坑が収まり、第8号(292cm×263cm)、第44号(270cm×165cm)、第93号(215cm×190cm)土坑など特に大型のものはわずかである。

土坑の深さは50cm以下のものがほとんどである。1m以上の深さをもつものは、第3号(147cm)、第12号(138cm)、第13号(140cm)土坑だけである。断面形態も、平坦面をもち直に近い立ち上がりをしているものが多い。その平坦面も、土坑の上場の形態と同じ場合が多い。中には、第14・17・37・57・81・92号土坑のように土坑底部に落ち込みを持つものもある。

用途不明な土坑が多い中、第22・23・34・37号土坑および第25・27号土坑は、第1・2号掘立柱遺構とそれぞれ考えられる。

各土坑の個別なデータは第1表を参照されたい。

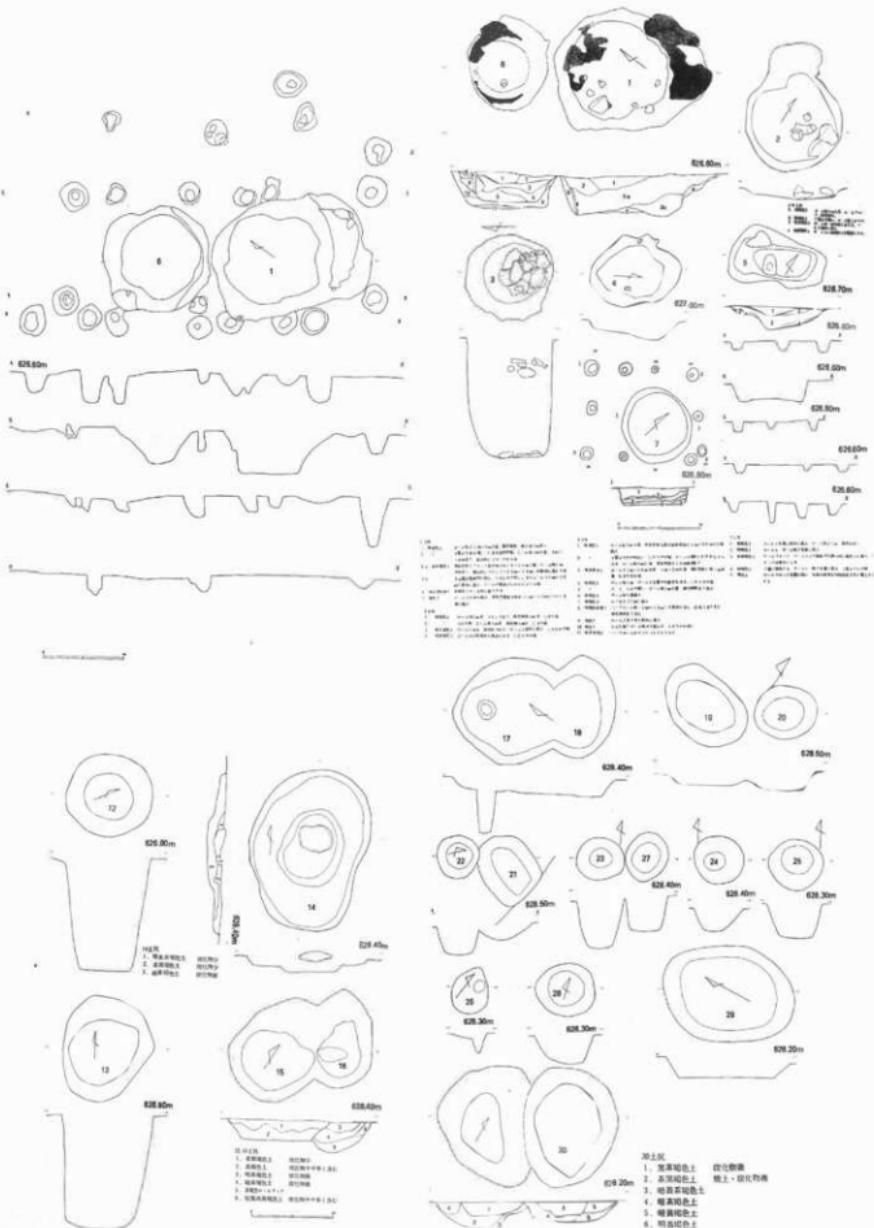
土坑出土土器(第28・29図)

3～10は第8号土坑から出土している。3は口縁部破片であり、口縁部下に沈線を施し、口唇部と沈線によってできた凸帯に刻み目を施している。5～7・10は縄文の地文の上に沈線を施されている。10は底部で、底径15.5cmを計る。以上は中期初頭の五領ヶ台式に比定する。

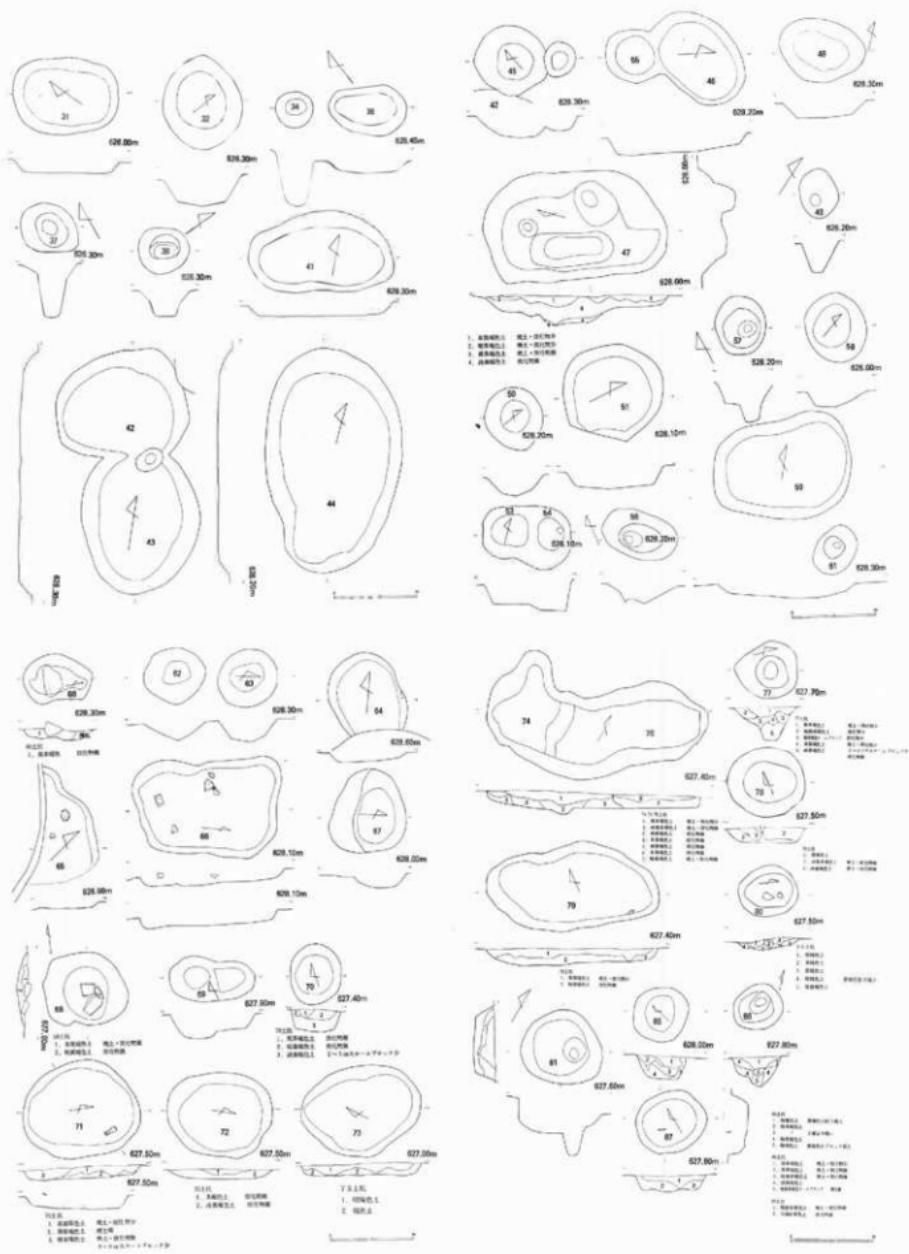
11は第9号、12は第23号、13は第26号、14は第30号、15は第32号、16・17は第35号、18は第41号、19は第47号、20は第50号、21・22は第51号、23・24は第57号、25は第70号、26は第82号、27は第83号、28・29は第84号、30は第91号土坑からそれぞれ出土している。11は胴部破片で沈線が一部施されている。12・15・19・28は縄文が施されている。16は口縁部破片、17は胴部破片である。18・24・27・29・30は縄文の地文の上に沈線を施されている。13・14は横位の、20・23は縱位の平行沈線が施されている。21は押し引き状の半截竹管文の下に沈線が施されている。22は沈線と沈線の間に連続爪形文が施されている。25は沈線が4条施されているが、上の2条は弧を描いている。26は沈線による半円弧文の下に縱位の2条の沈線が施されている。27は底部で、底径は10.7cmである。以上の土器は中期初頭の五領ヶ台式に属する。

第94号土坑からは2・31～33が出土している。2・31・32は縱位に沈線を施したもので、32は縱位に沈線が施されている底部である。33は口縁部が内済する深鉢形土器である。底部は欠損している。残存高は29.5cm。頭部に2条の粘土紐を貼付け、そこから粘土紐貼付によるJ字状の懸垂文が2本、V字状貼付文から下がる懸垂文が2本施される。粘土紐には半截竹管で押し引きされる。懸垂文の間は縱位の平行沈線文である。施文順序は、粘土紐貼付け→粘土紐上に半截竹管による押し引き→縱位沈線である。これらは普利I式に比定される。

34は第95号、35は第96号、1・36・38～41は第102号、42は第107号、37・43・44は第108号、45は第113号土坑出土である。34は沈線がV字状に施されている。35・38は縄文地文の胴部破片である。36は口縁部破片で、1条の沈線が施されている。37は横位の沈線下に斜位の沈線が施されている。39は斜位の沈線が互い違いに施されている。40・41は縄文の地文の上から沈線が施されている。42は大型の無文粗製深鉢である。43は口縁部に小さな山形突起をもち、縄文の地文の上に、口縁部下に3条の平行沈線とドーナツ状貼付文、胴部にドーナツ状貼付文下から伸びる2条の沈線とその両脇に縱位の連続弧状沈線が施されている。残存高は23.1cmである。44は口唇部に刻み目をもち、頭部の1条の隆帯からY字状貼付文が垂れる。その下の横位の沈線で区画されたところには刺突

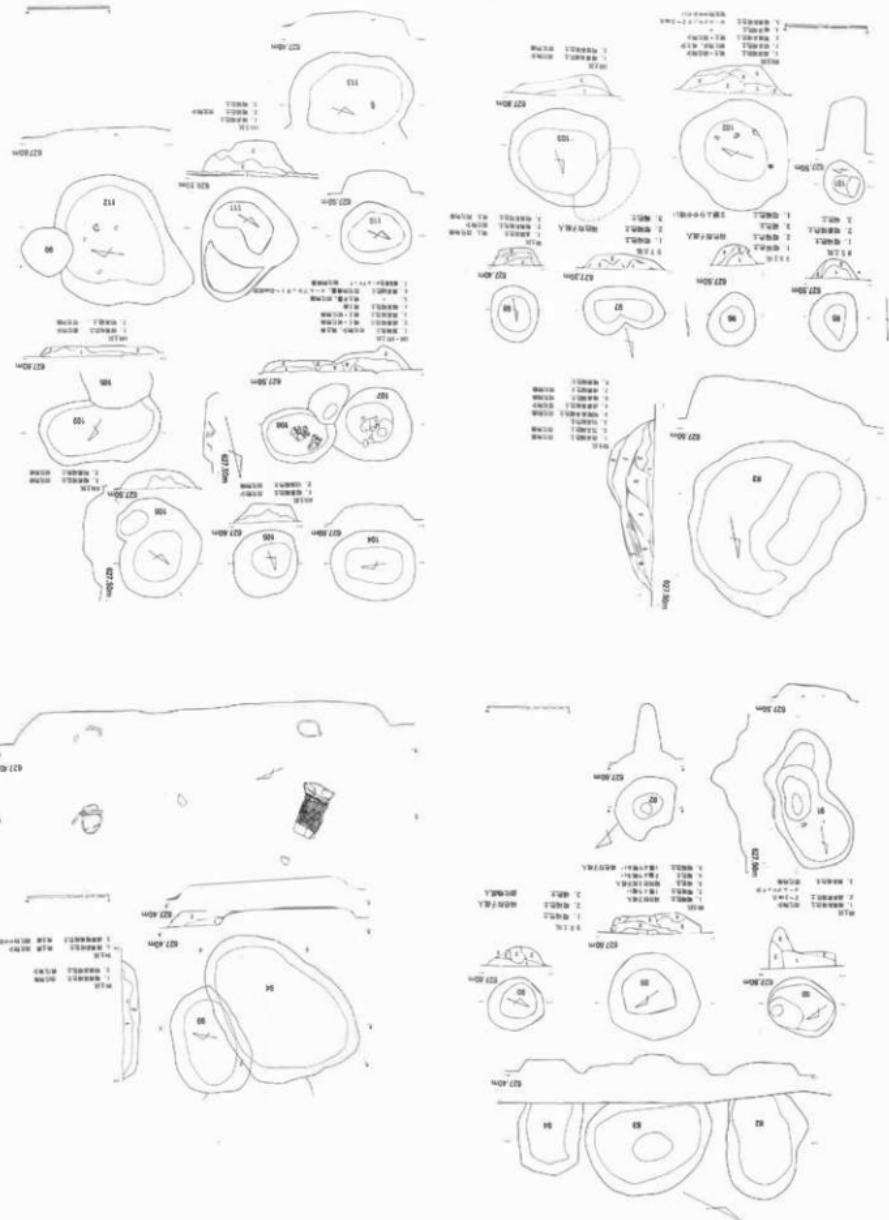


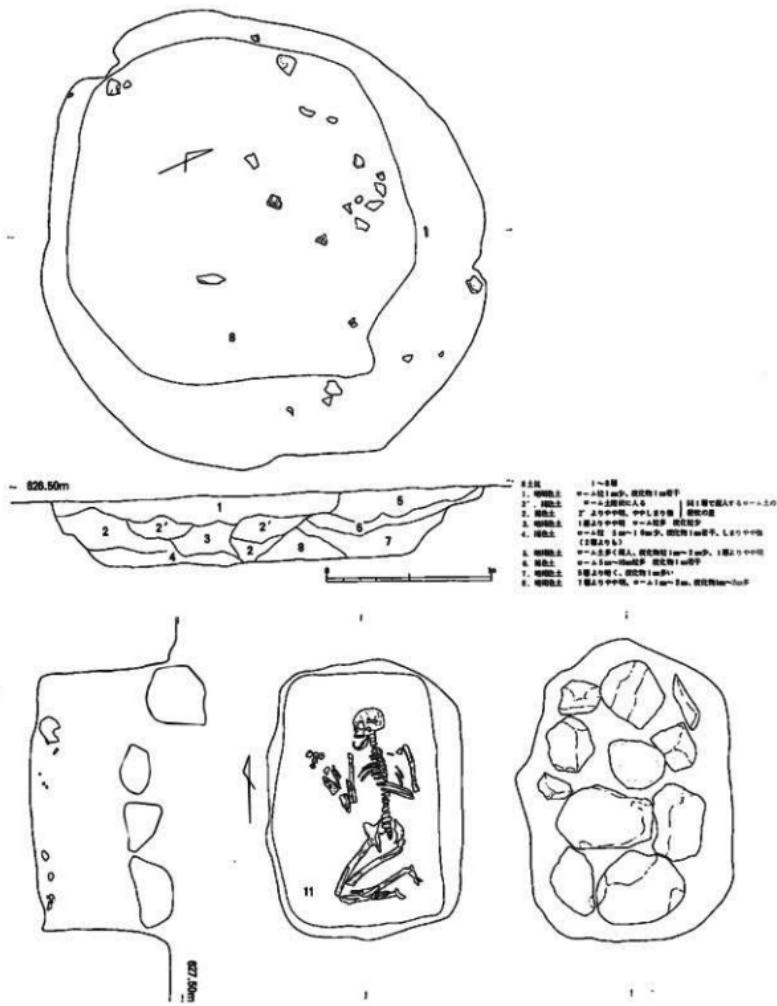
第24図 土坑(1)



第25図 土坑(2)

第26圖 土坑(3)





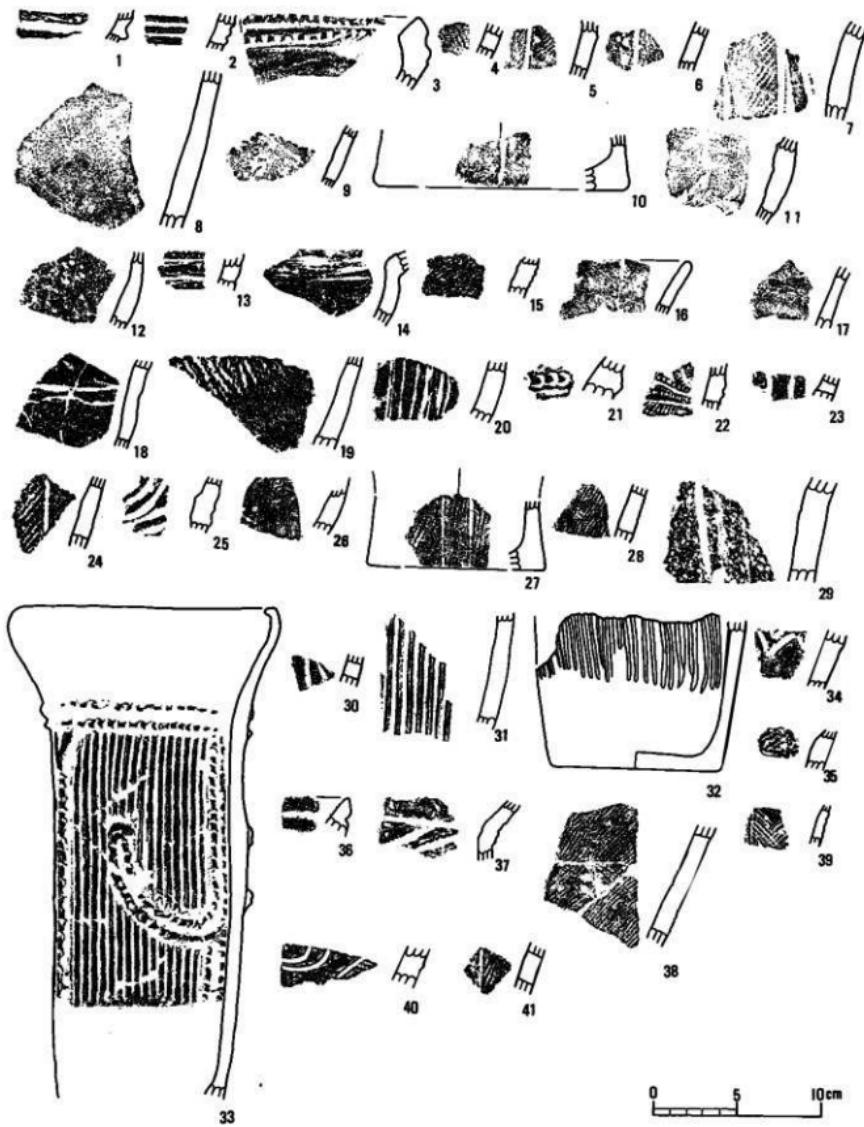
第27図 土坑(4)

文・沈線文が施され、胸部には半円弧文が施文される。地文は縄文である。45は底部である。以上の土器は五領ヶ台式に比定される。

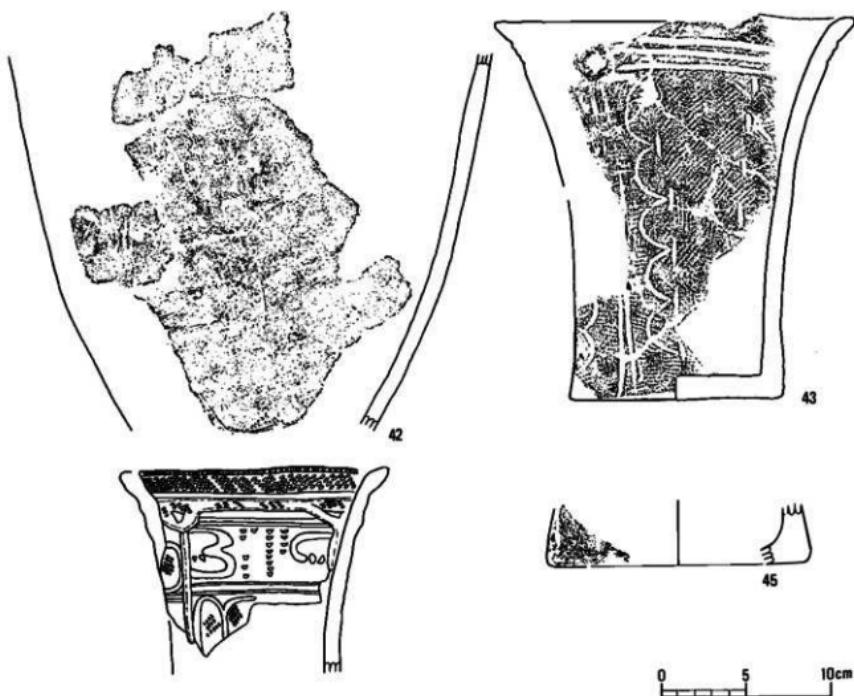
土坑出土石器（第30～32図）

石鎚1点（5.6%）、打製石斧5点（27.7%）、横刃型石器2点（11.1%）、スクレイパー1点（5.6%）、凹石3点（16.6%）、石皿3点（16.6%）、小剥離のある剥片1点（5.6%）、剥片1点（5.6%）が各土坑から出土している。出土位置は第1表を参照されたい。

石鎚（第30図1）



第28圖 土坑出土土器 (1)



第29図 土坑出土土器 (2)

石器の未製品である。基部に細かい調整が施され無茎凹基となっている。側辺部が一部欠けている。黒曜石製である。

打製石斧 (第31図 3・5~8)

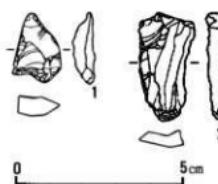
3・5・6・8は短冊型であり、3・6は基部が、5・8は刃部が欠損している。7は擬形の完形品である。基部は側辺が平行に伸び、途中で幅広になり、刃部が円く作り出している。反りが少しみられる。3がホルンフェルス、5・6・8が砂岩、7が安山岩である。

横刃形石器 (第31図 4・9)

形態は打製石斧と似ているが、厚さが薄く、断面が三角形になっているものを横刃形石器として取り上げた。4は長辺部を調整して刃部を作り出している。9は刃部は剥離した時のままで、調整は施されていない。4は頁岩製、9は凝灰岩製である。

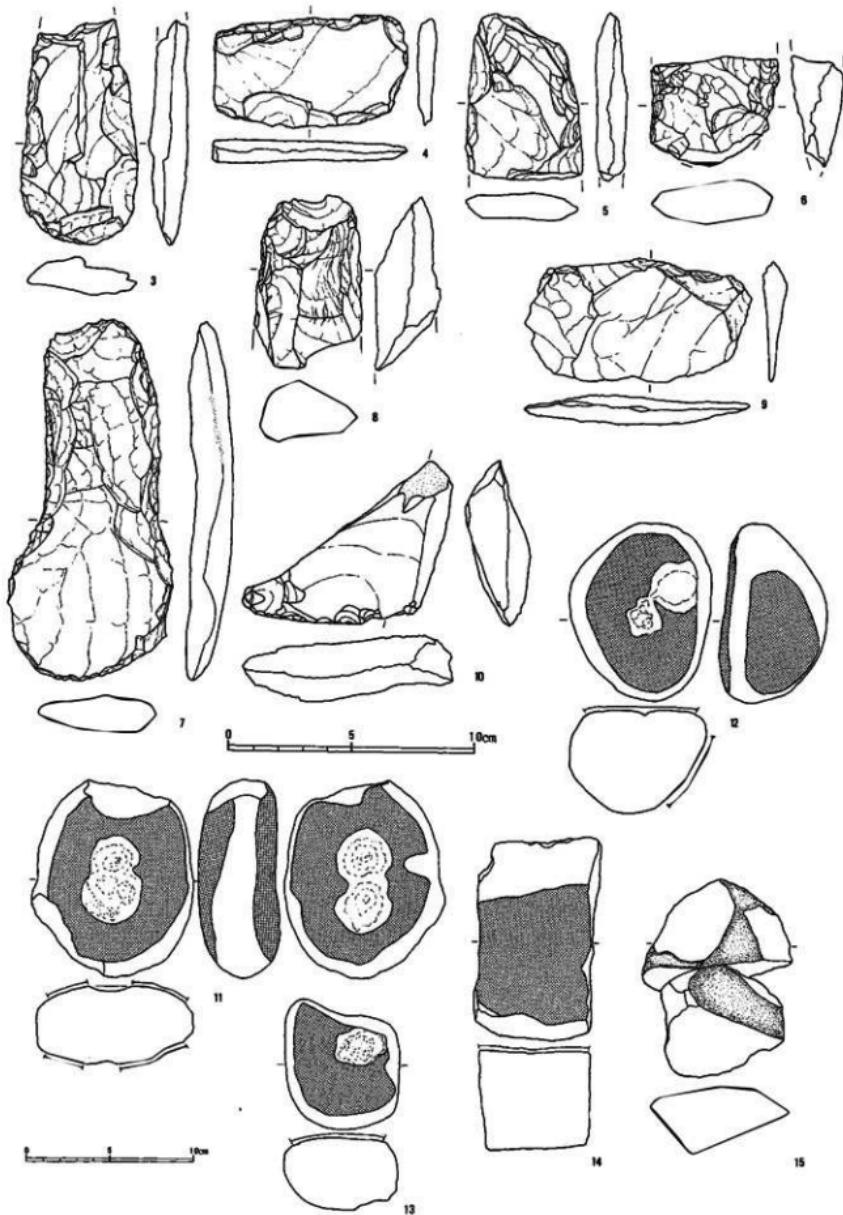
スクレイパー (第31図10)

形は不定形だが、一側辺に刃部が作り出されているので、スクレイパーとした。三角形の一辺に調整を施し刃部としている。他の二辺は欠損部であり、全体の形態は分からない。石材は頁岩である。

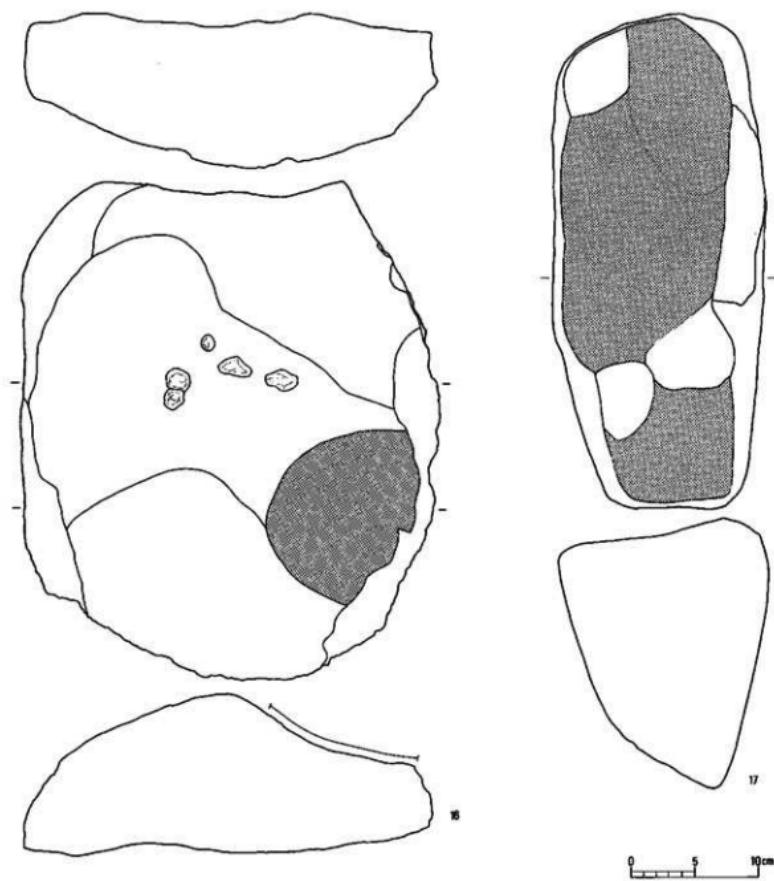


第30図 土坑出土石器

凹石 (第31図11~13)



第31図 土坑出土石器 (2)



第32図 土坑出土石器(4)

凹みをもつ石を凹石としたが、ここで取り上げるものはどれも磨面ももっている。11は表に2つ、裏に2つ凹をもちその両面とも磨面である。一部が欠けている。12は表に2つ凹みがあり、その面と右側面が磨面である。13は表に1つ凹みをもち、その面が磨面である。加熱を受けており、そのせいであろうか欠損している。11・12・13とも安山岩である。

石皿（第31・32図14・16・17）

14は作業面が平坦な石皿である。欠損しており、全体の大きさは分からぬ。16は大型の石の端に凹んだ作業面を作り出したものである。一部欠けていて全体の形は分からぬ。中央に小さな凹みが5つある。17は平らな作業面の石皿である。石材は14が砂岩、16・17が安山岩である。

小剥離のある剥片（第30図2）

黒曜石の剥片で、側辺部に細かな剥離跡がみられる。

剥片（第31図15）

15は砂岩の剥片で、被熱されて幾片かに分割しているが、特に二次加工の痕はみられない。

（松村）

日影田遺構一覧表 1993年

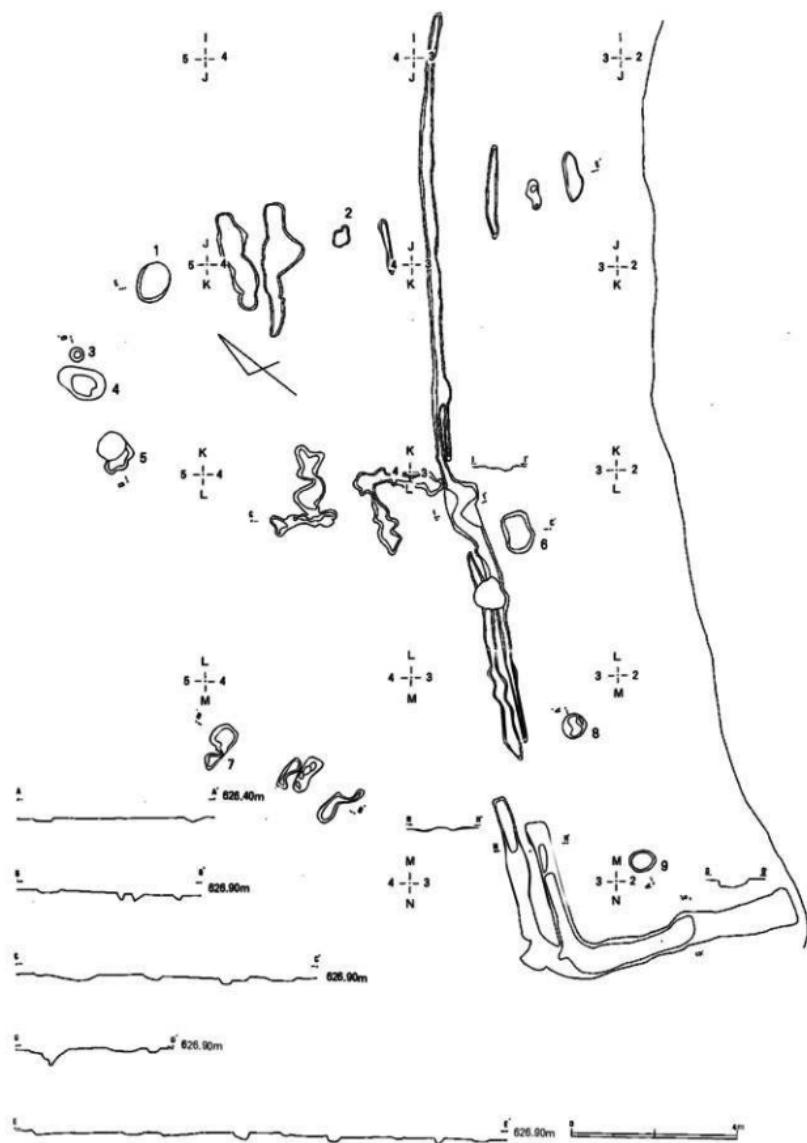
土坑	長	短	深さ	形態	坑底	立ち上がり	所見
1	190	150	45	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	南北はゆるく 北西は直に近い	白色粘土が東壁と北壁側に認められ點られたような状態で検出される。6土の南東にある。
2	155	117	14	不整楕円形	平坦で円形	皿状	縫が坑底に存在する
3	112	110	147	円形	平坦で円形	直に近い	縫が土坑上面より25cm下と坑底に認められる。また縫は南壁より集中する。かなり深い土坑である
4	110	85	22	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	皿状	
5	115	60	28	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	ゆるく立ち上がる	坑底には落ち込みが認められる
6	115	96	44	円形	平坦で円形	直に近い	1 土坑の北西にある。1土坑と同様白色粘土が北壁と南壁に認められる
7	92	83	20	円形	平坦で円形	直に近い	時期は不明であるが、周辺は本土坑に伴うと思われるビットが10本確認される
8	292	263	40	円形	ほぼ平坦で楕円形	直に近い	土層状態より2基存在していた可能性がある
11	166	116	86	長方形	平坦で長方形	直である	発見された人骨は、頭を北に向け両腕は折りたたんで胸の位置におさまっている。両足は曲げられている。人骨は正面を西に向いている。胸から約20cm離れた所に縫管が置かれ、雁首は南に向いている。鏡は胸から約30cm離れたところにある。確認面には11ヶの大形の縫が置かれる
12	108	100	138	円形	平坦で円形	直に近い	
13	129	106	140	不整楕円形	平坦ではなく円形	直に近い	
14	197	142	中央16 12	楕円形	平坦で中央に浅い落ち込み あり	直に近い	縫が土坑中央部確認面で認められる
15	135	103	25	楕円形	ほぼ平坦で円形	すり鉢状を呈する	本土坑は16を切って構築される
16	120	確定 80	34 43	楕円形	ほぼ中央部に落ち込みあり。 全体的に平坦で楕円形	すり鉢状を呈する	15に切られる
17	推定 155	131	23	楕円形	ほぼ平坦で楕円形 北壁よりに落ち込みあり	皿状	18と重複関係にあるが、新旧は不明。落ち込みは23×21の楕円形で深さは55cmである
18	127	確定 88	24	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	17と重複
19	115	78	12	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
20	77	67	25	楕円形	平坦で楕円形	東は直に近く、西 は緩やか	
21	不明	68	21	楕円形	平坦で楕円形	すり鉢状	
22	53	51	33	円形	平坦で円形	直に近い	1号掘立柱建物の1柱である
23	58	52	57	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	1号掘立柱建物の1柱である
24	63	59	27	円形	平坦で円形	すり鉢状	2号掘立柱建物の1柱である
25	68	62	41	円形	平坦で円形	直に近い	2号掘立柱建物の1柱である
26	58	45	24	卵形	ほとんどない	ゆるやか	機乱されている可能性あり
27	61	50	43	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	
28	71	65	33	円形	平坦で円形	直に近い	
29	164	120	23	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
30	右 143 左 140	116 107 107	29 35 35	楕円形	平坦でどちらで楕円形を呈する	すり鉢状	確認時においては1基と考えられたが結果としては3基であった
31	128	92	15	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
32	113	95	35	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	やや直に近い	
34	45	43	66	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	1号掘立柱建物の1柱である
36	93	58	14	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
37	75	60	65	楕円形	平坦で楕円形	直に近く上位ではロート状にひらく	1号掘立柱建物の1柱である
38	61	54	31	楕円形	平坦で楕円形	直に近く上位ではロート状にひらく	
41	172	93	16	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
42	158	確定 130	24	楕円形	平坦で楕円形	皿状	42と43は重複する（新旧は不明）

土坑	長	短	深さ	形態	坑底	立ち上がり	所見
43	推定 175	143	16	楕円形	平坦で楕円形	皿状	42と重複(新旧は不明)
44	270	165	20	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
45	87	84	28	円形	ほぼ平坦で円形	すり鉢状	
46	125	86	20	楕円形	平坦で楕円形	皿状	55と重複(新旧は不明)
47	222	130	28	隅丸長方形	ほぼ平坦で坑底に3ヶの落ち込みを有する	直に近い	
48	104	75	20	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
49	60	46	35	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	
50	76	70	24	円形	坑底は丸味をおびほぼ円形	すり鉢状	
51	125	116	23	円形	平坦で円形	クライ状	
53	-	64	23	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	54と重複
54	74	-	-	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	
55	71	64	22	円形	平坦で円形	直に近い	46と重複
56	91	55	19	楕円形	凹凸があり楕円形	すり鉢状	
57	71	60	26	楕円形	坑底東よりに落ち込みがある	直に近い	
58	23	20	20				
58	83	71	19	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	すり鉢状	
59	165	117	15	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
60	83	55	12	不整楕円形	ほぼ平坦で不整楕円形	皿状	土坑上面ほぼ中央に縁が存在する
61	61	46		楕円形			
62	75	67	20	不整楕円形	坑底中央部がやや尖る	すり鉢状	
63	73	67	27	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	やや直に近い	
64	-	85	10	楕円形	平坦で楕円形	皿状	堅穴状造構に切られる
65	-	-	7	不明	平坦である	皿状	堅穴状造構に切られる
66	170	90	18	円形	平坦ではほぼ円形	直に近い	西・南壁寄りで縁が確認される 縁は土坑上面に存在する
66	143	100					
67	98	91	15	卵形	ほぼ平坦で円形	すり鉢状	
68	105	85	15	円形	平坦で円形	皿状	土坑のほぼ中央に縁が3ヶ認められ確認面に存在する
69		53	28		左) 平坦で円形 右) 平坦で三角形	左) すり鉢状 右) 皿状	
70	74	60	22	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	
70	23	20	20				
71	141	122	17	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	
72	126	102	12	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
73	147	111	16	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
74			16	不明			74は75に切られる
75			25	不明			75は76に切られる
76		95	15	楕円形		南北壁は暖かく 東は直に近い	
77	75	70	42	円形	平坦で円形	北は直に近い 南はゆるやか	
78	93	83	20	円形	平坦で円形	直に近い	
79	208	108	16	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	皿状	
80	74	64	14	楕円形	平坦で楕円形	皿状	土器片は土坑中央より東側に存在する
81	100	92	42	円形	北東壁寄りに落ち込みあり 平坦で円形	ほぼ直に近い	土層状態は自然堆積を呈する
82		86	16	楕円形	平坦で楕円形	皿状	
83	154	117	22	楕円形	平坦で楕円形	皿状	坑底ほぼ中央に落ち込みあり
85	66	64	30	円形	平坦で楕円形	直に近い	
86	61	52	40	円形	ほぼ平坦で楕円形 (北側に落ち込みあり)	直に近い	落ち込みは楕円形で坑底も楕円形段を有する土坑である

日影田造構一覧表

土坑	長	短	深さ	形態	坑底	立ち上がり	所見
87	84	75	24	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	ほぼ直に近い	
88	83	67	22	楕円形	ほぼ平坦で楕円形 北側に落ち込みあり	直に近い	坑底北側の落ち込みは楕円形を呈し、坑底は円形 深さは30cmを計測する（坑底から上部の確認面から52cm）
89	110	—	30	円形	ほぼ平坦で楕円形	ゆるく立ち上がる	自然堆積を呈する
90	70	62	25	円形	平坦で円形	すり鉢状	
91	150	83	17	不整楕円形	南に落ち込みあり 平坦で不整楕円形	ほぼ直に近い	落ち込み部は確認面から22cmである
92	83 37	64 29	11 58	楕円形	ほぼ平坦で楕円形 平坦で円形	皿状 直に近い	非常に深い（柱穴か） 58cmは浅い土坑の坑底からの深さ
93	215	190	52	不整楕円形	段を有し、楕円形	西は直に近い 東はゆるい	
94	211	152	19	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	皿状	99を切る
95	71	57	19	楕円形	平坦で楕円形	すり鉢状	
96	67	57	28	楕円形		すり鉢状	
97	100 (44) (76)	22	楕円形	平坦で楕円形	皿状		
98	70	58	26	円形	平坦で円形	直に近い	
99	130	90	22	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	94土坑に切られる
101	52	47	70	円形	ほぼ平坦で楕円形	直に近い	
102	134	130	37	円形	平坦で楕円形	すり鉢状	
103	133	122	13~25	円形	平坦で円形	東 ゆるやか 西 直に近い	坑底は東から西へ傾斜する 北は擾乱を受ける
104	103	85	24	楕円形	平坦で楕円形	すり鉢状	
105	90	80	27	円形	平坦で円形	ほぼ直に近い	
106	107	86	27	楕円形	平坦で楕円形	ゆるやか	南壁には小さな落ち込みが存在
107	102	90	26	円形	ほぼ平坦で円形を呈する 北側に落ち込みあり	すり鉢状	107は108Aに切られる 落ち込みは楕円形を呈し、坑底は円形 坑底からの深さ 9 cm
108	88	66	16	楕円形	平坦で楕円形	やや直に近い	108は108Aを切る 土坑中央部のほぼ直床直で出土し土器の中に凹みが認められる。 また北壁より厚い個体の大形の土器が出 土するが場合分けられない。 108Aで楕円形坑底は狭く楕円形長軸55、 短41、深さ26、ゆるやかに立ち上がる
109	151	75	13	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	ゆるやか	105に切られる
110	86	75	26	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	ほぼ直に近い	
111	140	114 東12 西29	だるま形	ほぼ平坦で不整楕円形 東側で段を有する	ほぼ直に近い	中央部が凹む	
112	186	152	8	不整楕円形	平坦で不整楕円形	皿状	土坑の南東側は擾乱される
113	153	110 確定	26	楕円形	平坦で楕円形	皿状	94に切られる

第5節 ピット群



第33図 第1号ピット群・第1号溝・第1号斎状遺構

第1号ビット群（第33図）

本ビット群は、第1号溝を挟んで存在し、J-4(2)、K-5(1.3.4.5)、L-3(6)、M-2.3.4(9.8.7) グリッドに位置しており、配列の規則性は認められない。

第2号ビット群（第34図）

本ビット群は、G-3.4(3.2.1)、H-2.3(4.5)、I-3.4(6.7.8) グリッドに位置しており、不規則な配列である。

第3号ビット群（第34図）

本ビット群は、B-4(1)、C-4.5(2.3.4.5.6) グリッドに位置し、形態及び規模・配列は不規則である。

第4号ビット群（第35図）

本ビット群は、E-5.6.7(1.2.5.3.4.9.10)、F-5.6(6.7.8.12)、G-5.6.7.8(13.14.16.15.17.18.19.20.21.27.29.28.31.32.37.38)、H-6.7.8(22.23.24.25.26.30.33.34.35)、I-7(36) グリッドに位置し、規則性は認められない。

第5号ビット群（第37図）

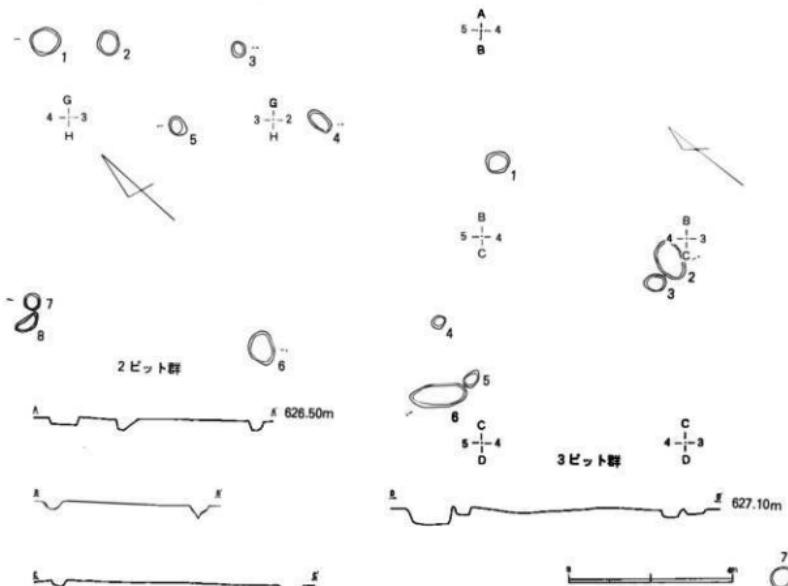
本ビット群は、I-13(1)、J-11.12.13(8.9.10.4.5.6.7.2.3)、K-12(11.12.13.14.15) グリッドに位置する。

第6号ビット群（第36図）

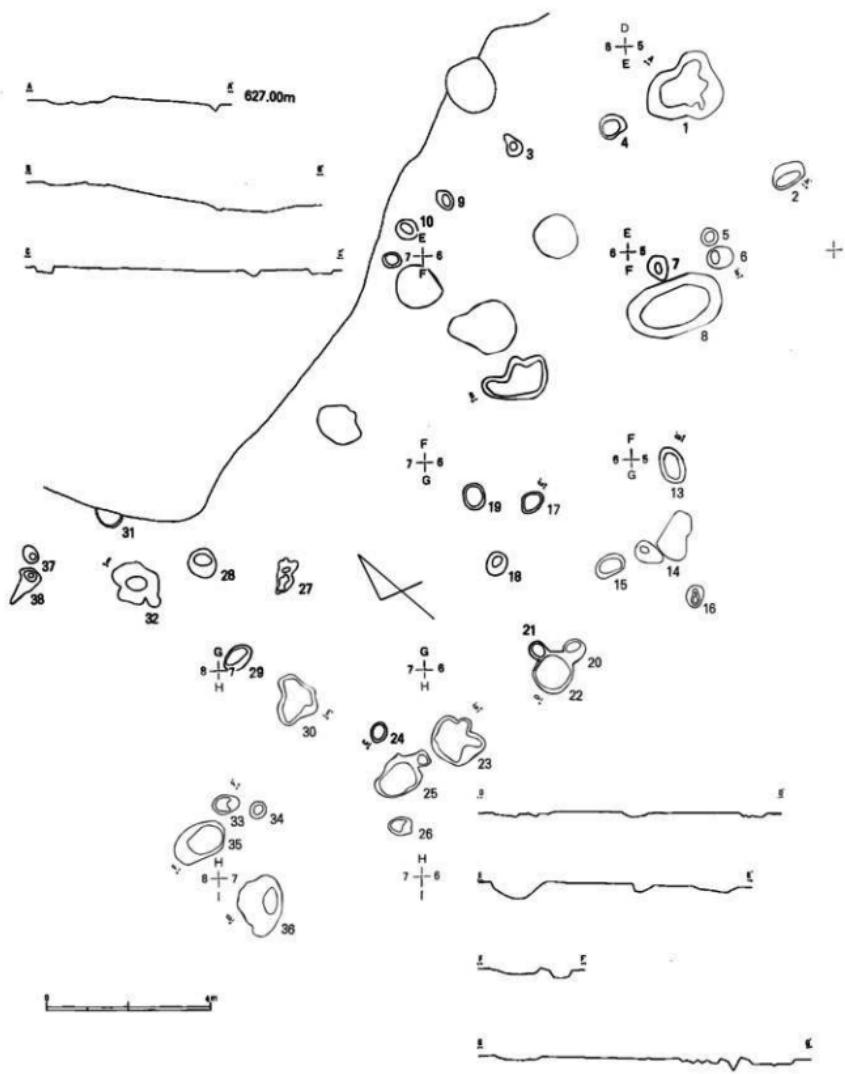
本ビット群は、B-9.10.11.12(11.8.9.10.7.1.12.3.4.5.6)、C-9(12)、D-10.11.12(18.14.15.16.13)、E-9.10(19.17)、F-10(20.21.22.23) グリッドに位置し、その配列に規則性は認められない。

第7号ビット群（第37図）

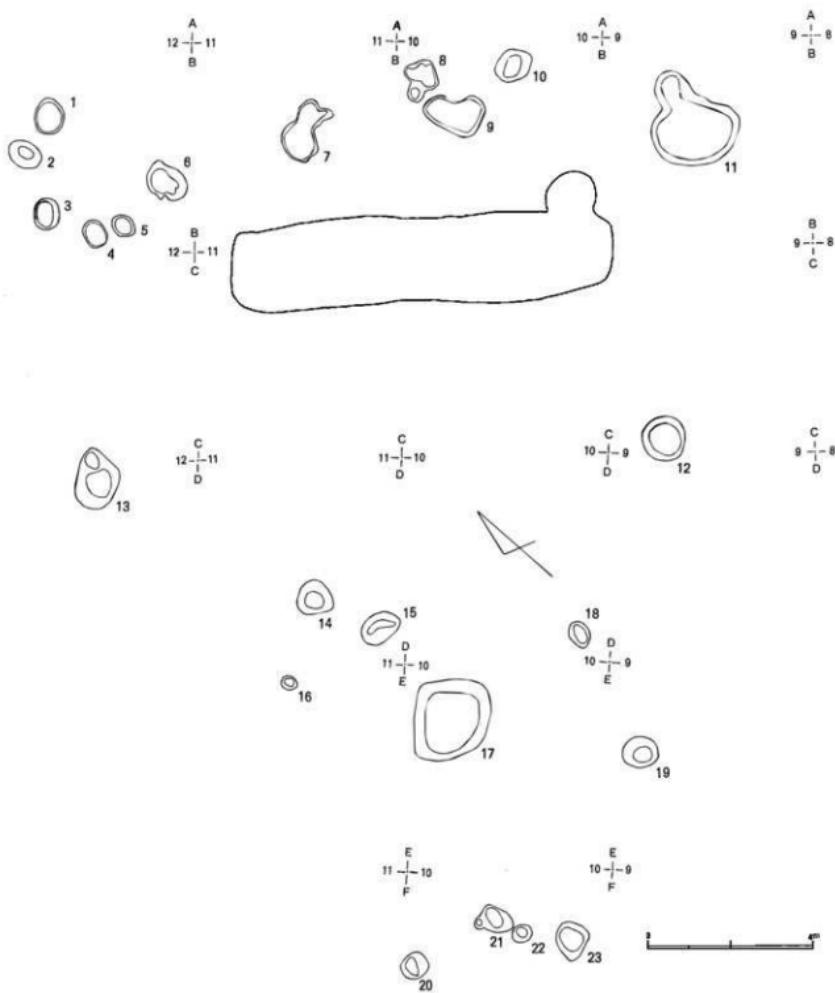
本ビット群は、I-6.7(1)、J-6.7(3.4.5.6.7.8.9.2)、K-6(10.11.12.13.14)、L-6.7(15.16.17.18.19)、M-7(20.21) グリッドに位置し、配列の規則性は認められない。



第34図 第2・3号ビット群



第35図 第4号ピット群



第36図 第6号ピット群

第8号ピット群（第38図）

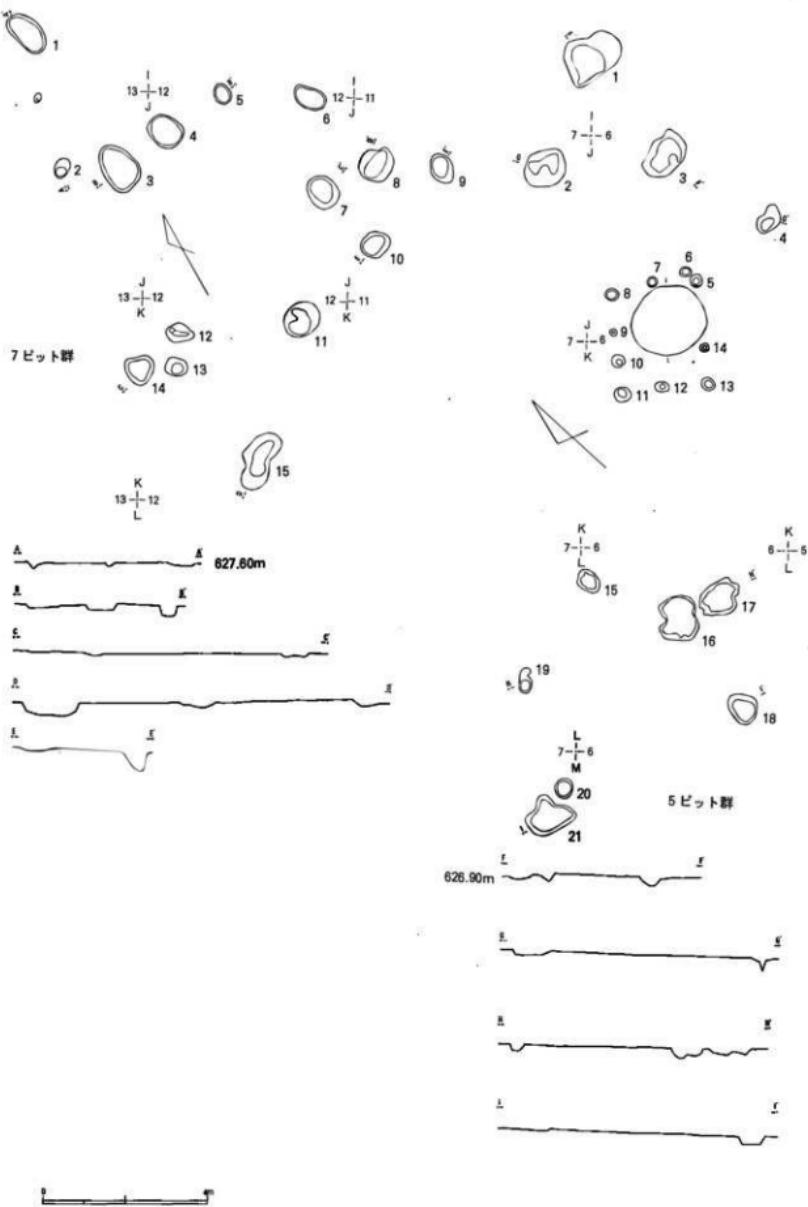
本ピット群は、L-18(17)、M-18.19(14.16.13.15)、N-15.18(1.10.11)、O-15.17.18(2.3.4.5.6.7.8.9.12)グリッドに位置し、配列の規則性は認められない。

第9号ピット群（第39図）

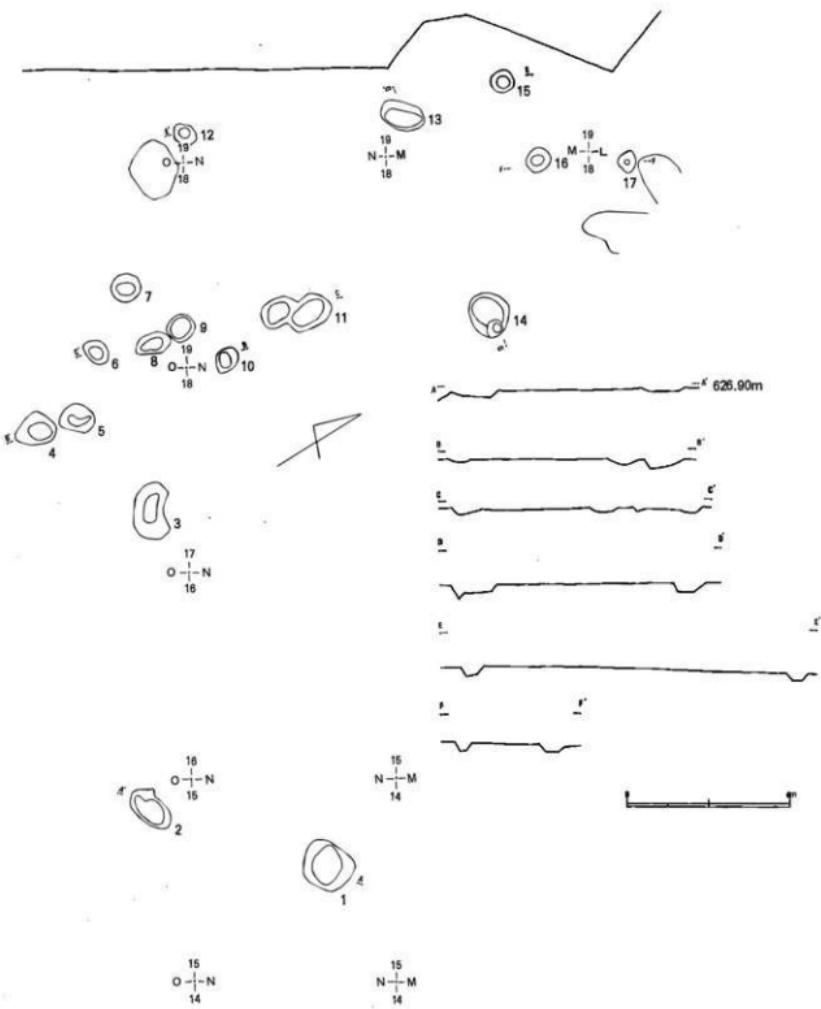
本ピット群は、B-13.15(13.1.2.3.4.5.6)、C-13.14.15(12.14.11.7.8.9.10)、D-14.15(16.17.15)、E-13.14(22.27.18.19.20.21.23.24.26)、F-14(25.28.29)グリッドに位置し、不規則な配列である。

第10号ピット群（第40図）

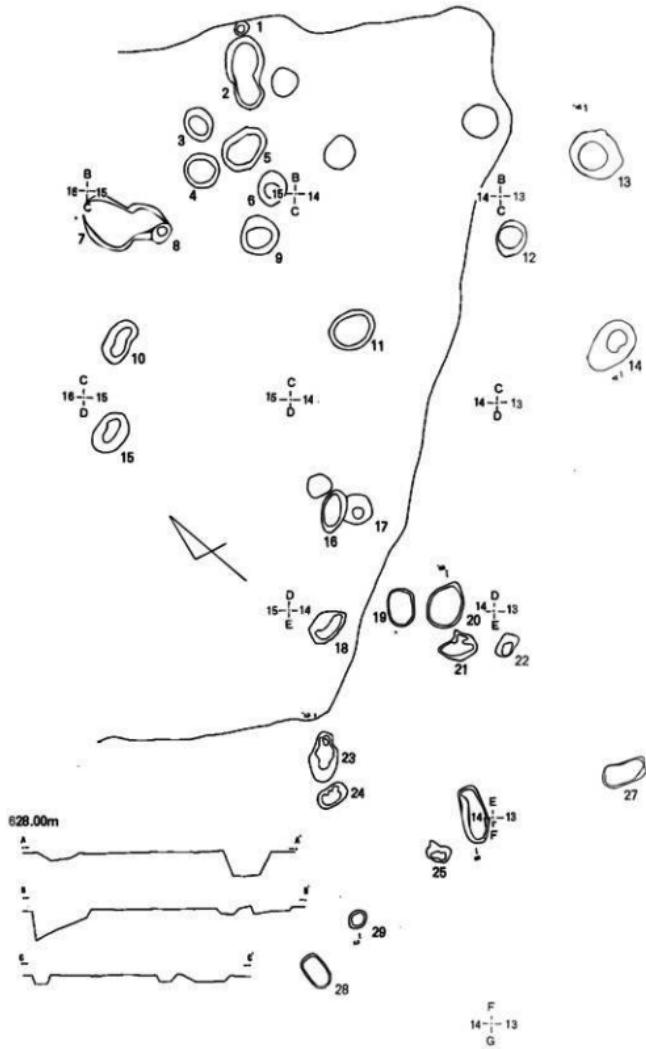
本ピット群は、I-14(1.2.3)、J-14(4)、K-14(5.6.7)グリッドに位置する。



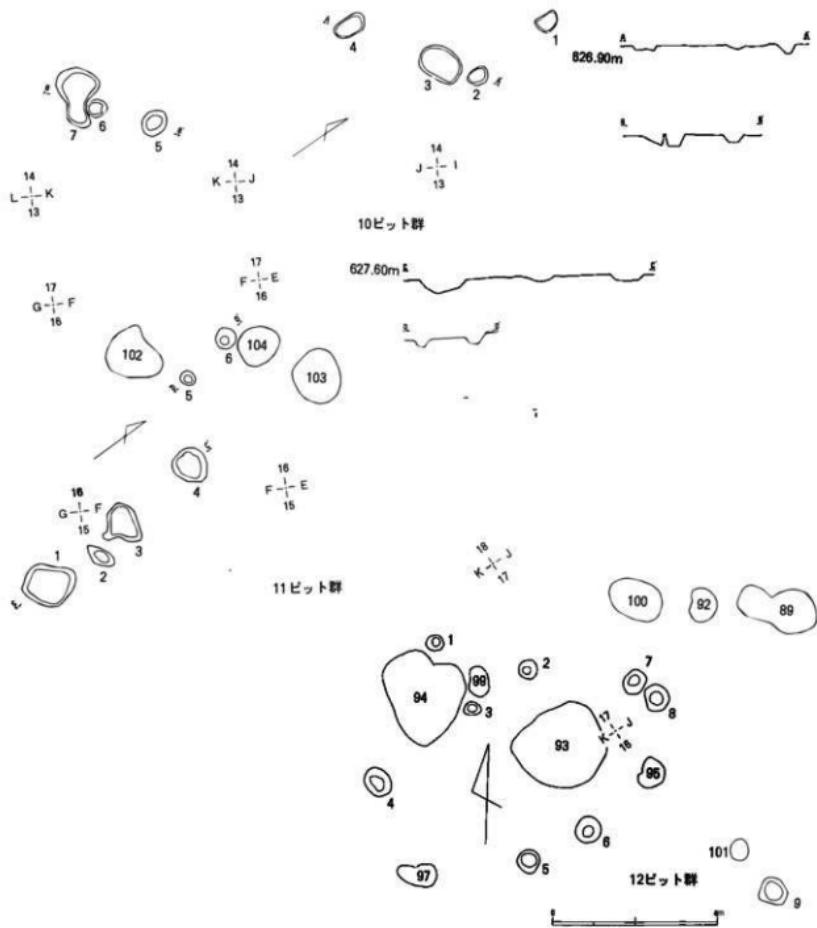
第37図 第5・7号ピット群



第38図 第8号ビット群



第39図 第9号ピット群



第40図 第10・11・12号ピット群

第11号ピット群（第40図）

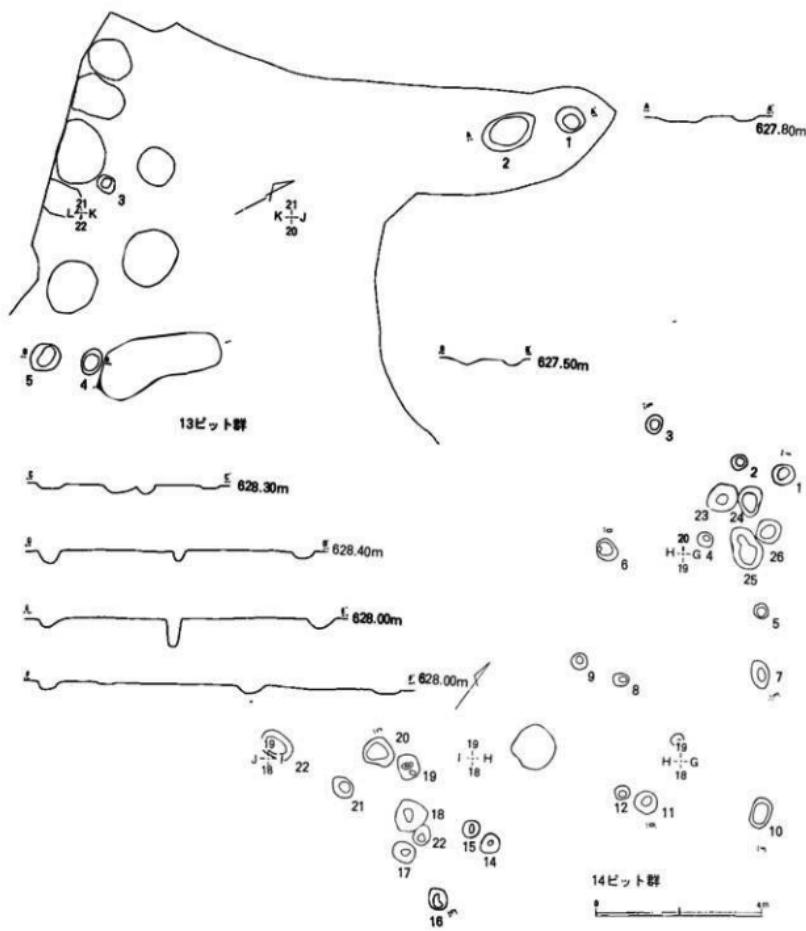
本ピット群は、F-15.16 (2.3.4.5.6)、G-15 (1) グリッドに位置し、規則的な配列は認められない。

第12号ピット群（第40図）

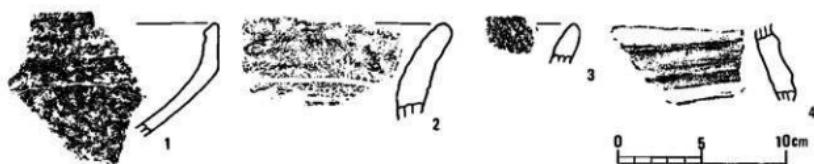
本ピット群は、J-16.17 (9.7.8)、K-16.17 (5.6.1.2.3.4) グリッドに位置し、配列に規則性は認められない。

第13号ピット群（第41図）

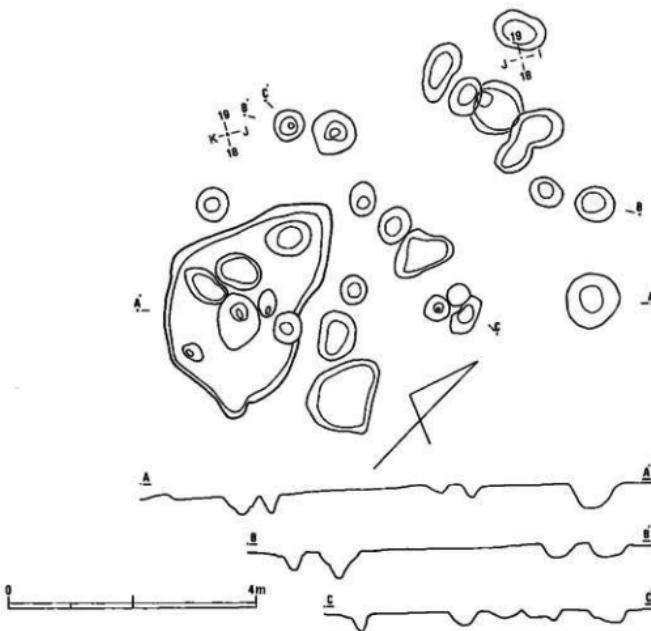
本ピット群は、I-21 (1.2)、K-20.21 (4.3)、L-20 (5) グリッドに位置し、配列の規則性は認められない。



第41図 第13・14号ピット群



第42図 第14号ピット群出土土器



第43図 第15号ピット群

第14号ピット群（第41・42図）

本ピット群は、G-18.19.20 (10.5.7.1.2.4.23.24.25.26)、H-18.19.20 (11.12.14.8.9.3.6)、I-18.19 (15.16.17.18.19.21.23.20.22) グリッドに位置し、配列に規則性は認められない。

第15号ピット群（第43図）

本ピット群は、I-18 (6.7)、J-18 (1.2.3.4.5.8.9.10.11.12.13.14.15.17.18.19.20)、K-18 (16.21.22.23.24.25.26) グリッドに位置し、その配列に規則性は認められない。

以上のように本ピット群は、住居跡のようにまとまりをもって存在しておらず、不規則な配列で確認された。またピット群の中においても、焼土跡の存在は認められなかった。深さ及び規模においてもまばらで浅いものが多い。第4号ピット群は、東西方向に広がりをもってピットが存在しているが、まとまりは認められない。遺跡が立地している所が山林ということもあり、樹木等の攪乱によって形成された幾つかのピットも存在しているものと思われる。特に不整形を呈したピットが、これに該当するのではないかと考えられる。 (山本)

第6節 集石遺構

集石遺構（第44・23図）

本遺構は、調査区の西側のL-9グリッドの第1号焼土跡の上部において発見されたものである。規模は長軸5.10m、短軸1.10mの範囲で礫と遺物が分布している。形態は、西侧の部分で梢円状に礫が分布していることが窺え、東側では遺物が疎らに分布している様子が分かる。時期的には縄文時代後期後半の加曾利B I式期に属するものと考えられる。

遺物 第23図の19~27が該当する。19~23は深鉢形土器である。19は口縁部でやや内湾する。内面に段が付き、その上方には刺突文が連続している。20は口辺部で、外面は無文で、内面には平行沈線が入り、その沈線と沈線の間はやや隆起し、その部分には刻み目が施されている。21は胴上部で、外面は無文である。内面には沈線が施されている。22~23は胴上部で、外面は無文である。内面には平行沈線が入っている。これらのものは遺構に伴うもので、加曾利B I式期のものである。

24~27はやはり深鉢形土器であるが、時期が異なるため、本遺構に伴うものではなく、第1号焼土跡に伴うものと考えられる。24・25は胴部破片で、25は縄文地に沈線が施されている。26は無文である。27・28は底部破片で、縄文地に沈線文および隆起線文を施している。これらは中期初頭の五領ヶ台II式に該当するものである。

(野代)

第7節 挖立柱建物跡

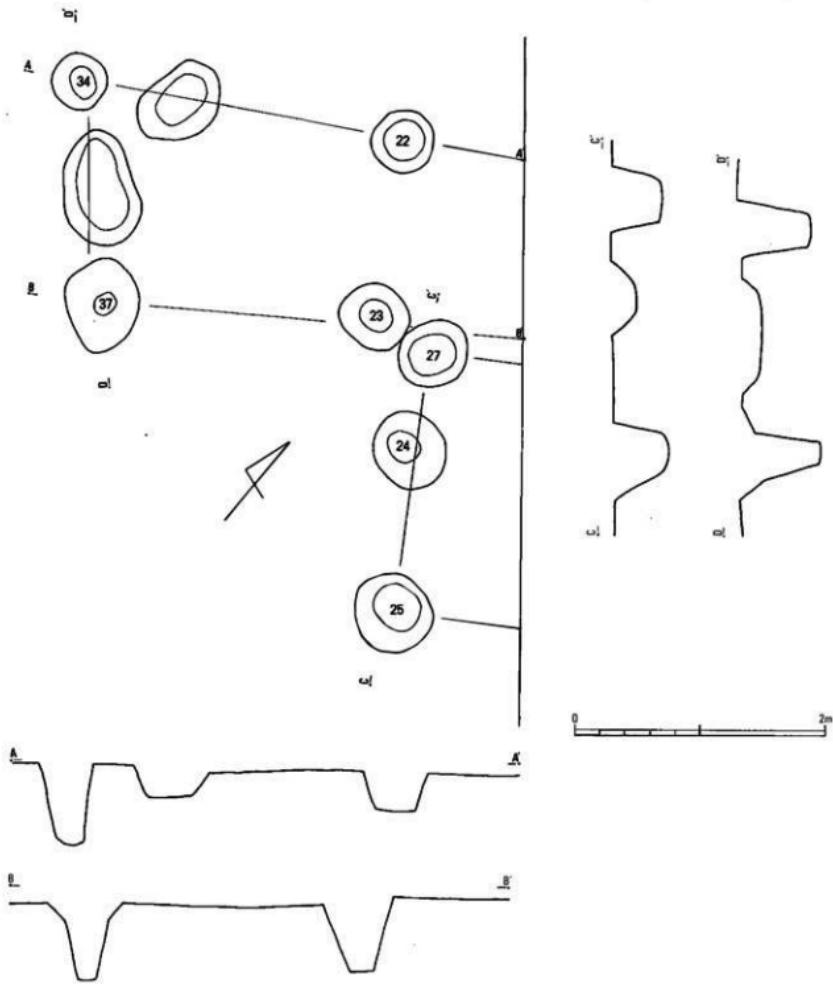
精査中に土坑として調査を行ったため、それぞれの柱に番号が付されている。建物跡は22・34・37・23を第1号掘立柱建物跡とし、24・25が第2号掘立柱建物跡とした。また1・2号内において、焼土跡は発見されなかった。

第1号掘立柱建物跡（第45図）

確認された柱は4本で、長軸は北東から南西方向に向かう。柱穴中央間34と22の幅は2.65m、37と23では2.18mをそれぞれ計測する。また短軸では、34と37の幅は1.77m、22と23では1.45mを測り、東側がやや狭くなっ



第44図 集石遺構 (K-8・9グリッド)



第45図 第1・2掘立柱遺構

表3 掘立柱建物跡計測表 (cm)

番号	22	23	24	25	27	34	37
深さ	33	57	27	41	43	66	65

ている。それぞれの柱穴の覆土は、黒色を帯びてることから平安時代以降と考えられ、建物内からは遺物の出土は発見されなかった。

第2号掘立柱建物跡（第45図）

確認された柱は2本で、25と27である。25と27の柱穴の間隔は、2.10mを計測し第1号掘立柱建物跡の23と37の間隔とはほぼ同一の規模を有していることから、4本柱の掘立の可能性が考えられ、長軸を25と27にとり、短軸は東側の調査区外に存在するものと思われる。また遺物の出土は、認められない。

（山本）

第8節 溝

第1号溝 (第33図)

位置 調査区南端の第1号ピット群の間に位置する。

形態・規模 調査区最南端から北西方向に6m伸び、そこで北東方向に直角に曲がり、途中で切れたり2条になつたりして、ゆるやかに曲がりながら約18m伸びている。幅30~80cm、深さ平均30cmである。出土遺物は無く、時期は不明である。

第2号溝 (第46図)

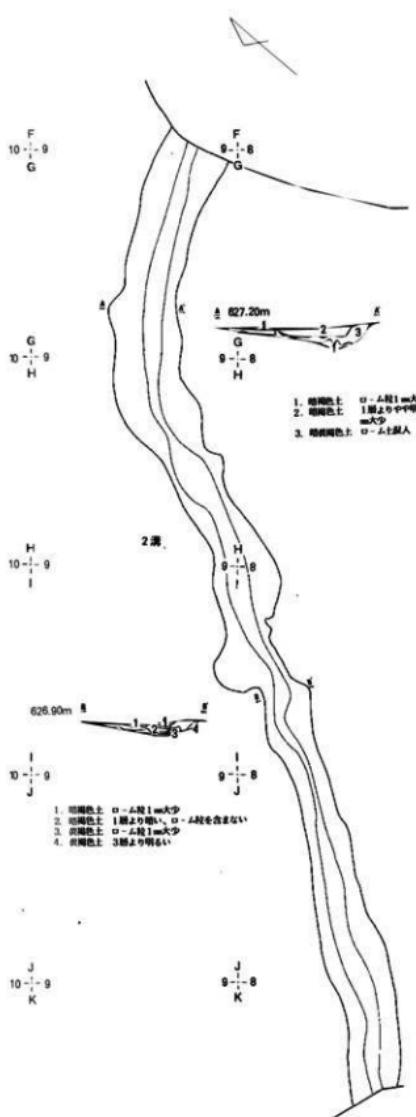
位置 調査区中央部南寄りの、第1~3号竪穴状造構のすぐ南側に位置する。

形態・規模 残存する長さ23.2m、平均幅1.2m、平均深さ0.5mである。鳥状の未調査区から北東に伸び第2号竪穴状造構を切る所から東に曲がっていく。出土遺物は無く、時期は不明である。

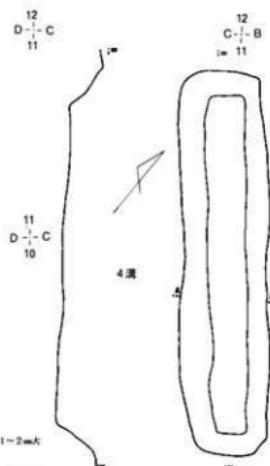
第3号溝 (第48図)

位置 調査区西側のゆるやかな傾斜面に位置する。

形態・規模 北西調査区壁から南西調査区壁へとU字状に伸びている。残存する長さ約40m、平均幅1.2m、平均深さ0.3mで、比較的浅い溝である。



第46図 第2・4号溝



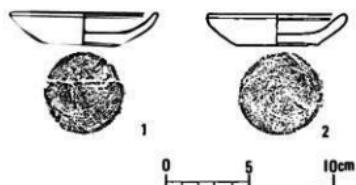
1. 喀斯特土 □ - ム粒1~2mm以下
2. 喀斯特土 □ - 1mmより多い、□ - ム粒1~2mm
3. 喀斯特土 □ - ム粒1mm以下
4. 喀斯特土 □ - 3mmより多い、□ - ム粒1~5mm
5. 喀斯特土 □ - 1mmより多い、□ - ム粒1mm以下
6. 喀斯特土 □ - ム粒を基盤とし、□ - ム粒1~5mm
7. 喀斯特土 □ - ム粒を基盤とし、□ - ム粒1~2mm
8. 喀斯特土 □ - ム粒を基盤とし、□ - ム粒1mm以下
9. 喀斯特土 □ - 3mmより多い、□ - ム粒を基盤とし、□ - ム粒2~3mm以下、□ - ム粒2~3mm以上



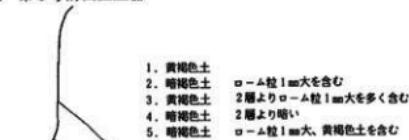
遺物（第47図） 室町時代のかわらけが2点出土している。1は口径8.50cm、底径4.95cm、器高1.83cmで、体部下半は直線的に開き、上半でゆるやかに内湾する。口縁部はやや尖り気味である。2は口径8.89cm、底径4.70cm、器高1.70cmで、体部は直線的に開き、口縁部は丸い。1・2ともロクロ成形で底部に糸切り痕があり、色調は明黄褐色である。

第4号溝（第46図）

位置 調査区中央部北東寄りに位置する。
形態・規模 長さ9.4m、幅2.2m、深さ0.95mの直線的な溝である。底部幅は0.9mであり、断面はV字形である。（村松）



第47図 第3号溝出土土器



第48図 第3号溝

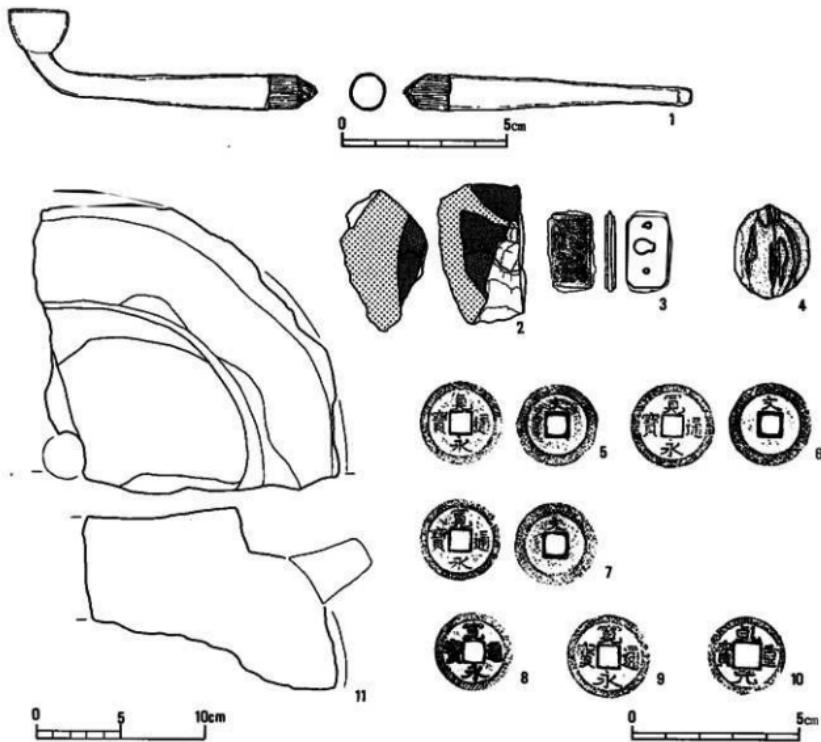
第9節 墓坑（第11号土坑）（第27・49図）

位置 本遺構は、遺跡調査区内の中央やや北側に存在していて、南方方向に緩やかに傾斜していく直前の尾根上の平らな部分にある。I-14グリッドに位置する。

形態・規模 平面形態は約165cm×115cm大の長方形をなし、断面形態はほぼ均整な箱型をしていた。遺構確認面からの深さは約90cmを測った。長軸がほぼ南北方向を指し示していた。遺構確認面の高さにおいて数個の巨礫のまとまりを確認し、掘り進めた結果墓坑と確認できたもので、直径約30cm～50cmほどの礫群を被葬者を埋葬した直後に墓坑上部に置いたものと思われる。合計11個のそれらの礫を確認した。石材は、花崗岩・砂岩と思われ、近くにある河原の石を利用したらしい。置かれた礫の中に一個体の茶臼破片があった。

第47図の11に示す。茶臼破片は下臼でかなり風化が激しく、墓坑に設置されたときには、既に使用されていない状況であったと思われる。よって、その茶臼の形態からの制作年代も確定できず、埋葬の年代をそれから想定することは不可能であった。

副葬品には六道銭としての寛永通宝5枚、乾元重宝1枚、煙管・胡桃の実・チャート製の火打ち石が被葬者の骨と同じレベルで出土した（第47図）。それらは、一緒にまとめて埋められたものらしく、入れ物の布袋の繊維も若干残っていた。それに付属する金具も検出できた。その金具は煙草入れの止め具とも思われる。これらの出土した副葬品は入れ物の布袋以外はすべて1～10によって図示した。1の煙管は金具の部分のみが残り、間のテ



第49図 第11号土坑出土遺物

ウの部分はほとんどが腐食していて、それぞれ雁首部と吸口部の付根にのみ残存していた。ラウは竹製であった。2は火打ち石として用いられたと思われるチャートである。火打ち金は確認できなかった。このチャートは表面を観察すると銳利な硬質なもので、何度も強く打ち付けられた痕跡があった。2の斜線の部分が打ち付けられて剥離している部分で、ドットの部分が銳利な硬質なもので打ち付けられた擦痕を示す部分である。3は副葬品を入れていた布袋か煙草入れの止め金具かと思われる。片側表面には、植物の花模様が線刻されていた。間に綿製の布をはさみ、花模様が線刻されているほうから、中央に鍵穴状に穴が開けられているほうに打ち付けられて2箇所で接合されている。銅あるいは真鍮製である。4は胡桃である。確認されたのは、これ1個体のみであった。六道鏡としての寛永通宝は2枚が古寛永で、3枚が新寛永であった。古寛永は8と9で、新寛永は5・6および7である。残りのもう1枚の軋元重宝は初鋳元年2年（西暦759年）である。

被葬者については、詳細は附編の「出土人骨について」（聖マリアンナ医科大学森本岩太郎先生）の記述に詳しく記されているが、出土状況は頭を北に向いた仰臥掘位の状態で出土した。両膝が右方向に倒れ、両膝とも膝から下の腓骨の部分が大腿骨と鋭角的に交わって出土した。埋葬形態は膝を立てた状態での寝葬であったと思われる。木棺を使用したかどうかは、不明である。副葬品の中の煙管の形態、六道鏡として使用された寛永通宝の初鋳年などから、近世前期後半代の墓坑と思われる。

（沢登）

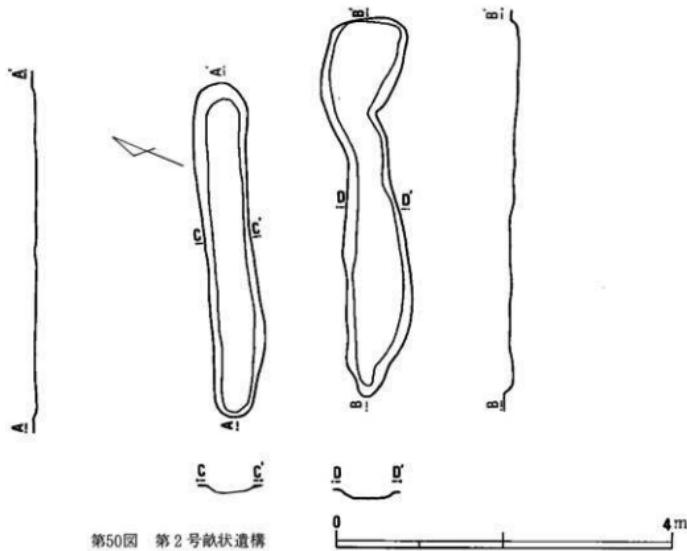
第10節 畝状遺構

第1号畝状遺構（第32図）

位置 本遺構は、遺跡調査区内の最南西端から中央寄りのI～J～3～5グリットを中心に広がっている。

形態・規模 幅約平均20cmほどで遺構確認面からの深さは最大でも10cm程度であった。ほぼ第1号溝と平行している。

畝の間隔も約40cmぐらいであり、何本も畝状になっている。植林された赤松の切り株より畝や溝が下になっているので、植林される以前かはそれと同時代のものと考えられる。畝の中は腐食した木の灰状のものが検出されており、なんらかの耕作が短期間ではあるが実施された可能性はある。遺構近くの人々に聞いて赤松が植林される以前はどうであったか聞いたが、70才くらいになるかたでもすでに植林されていたということで、以前のこ



第50図 第2号畝状遺構

とは分からぬ。

(沢登)

第2号竪状遺構（第50図）

位置 本遺構は、調査区の北側、E・F-16・17グリッドに存在する。

形態・規模 幅約55cm～90cmほどで、遺構確認面からの深さは10cm弱である。ほぼ東西方向に平行して並んでいる。覆土中には炭化物が混入していた。(野代)

第11節 遺物集中区

I-8グリッド遺物集中区（第51・52図）

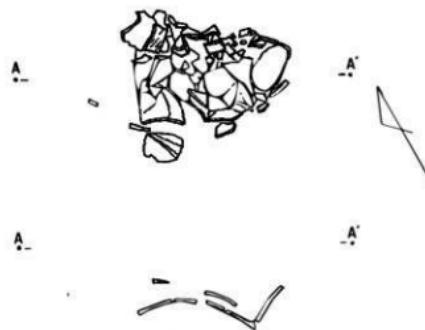
本遺物集中区は、I-8グリッドにおいて発見されたもので、深鉢形土器が単独で85×45cmの範囲に、横倒しの潰れた状態で検出された。落ち込み等の遺構と考えられるものは、伴っていなかった。

遺物 第52図の1がそれである。部分的に欠落しているが、ほぼ完形個体の深鉢形土器である。底部がやや広がり、胴部にかけてややすぼりつつも、口縁部にかけてラッパ状に外反している。口縁部には不規則な2単位の突起があり、折り返し状の肥厚した口縁となっている。口縁部と胴下部においては、地文に縄文が施されている。胴部においては、やや太めの平行、波状、弧状といった沈線文と、太めの隆帯文によって文様構成されており、この隆帯によって四単位に区切られていることが分かる。色調は黄褐色から赤褐色を呈し、器面は粗れている。器高36cm、底径18cm、口径27cmを測る。五領ヶ台II式に位置付けられる。

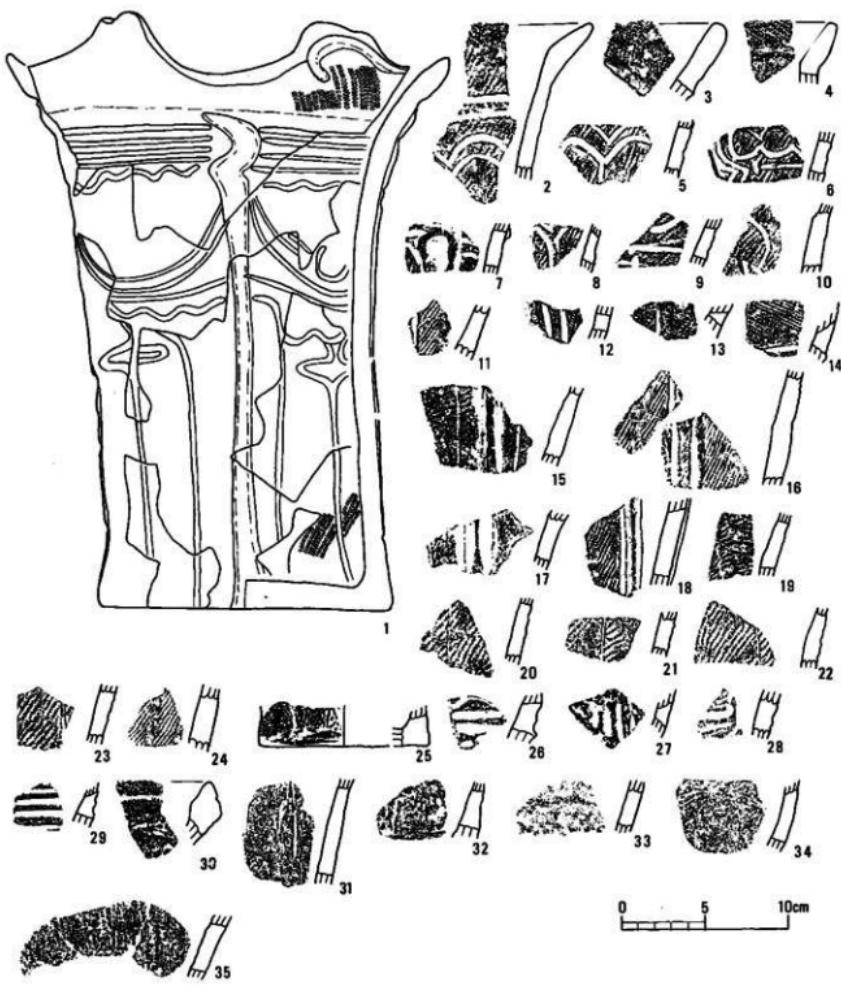
I-15・16グリッド遺物集中区（第50図）

本遺物集中区は、I-15・16グリッドにおいて発見されたものである。落ち込み等の遺構と考えられるものは、伴っていなかった。

遺物 第50図の2～35がそれで、全て深鉢形土器の破片である。2～4は口縁部の破片で、やや肥厚しており、逆「く」の字に外反している。5～17は胴上部の破片であり、細い縄文地に「Y」の字状の沈線文、平行沈線文「円」状の浮線文が施されている。18は胴下部の破片であり、細い縄文地に沈線文と半隆起線文が施されている。19は縄文地に継ぎに「S」字状に結節縄文が施されている。20～23は縄文地に、細沈線が継ぎに施されている。24は縄文のみである。25は底部で、縄文地に沈線が施されている。26～29は太めの沈線が施されている。30は口縁部で、沈線文が施されている。31～35は無文である。これらの土器の胎土には、白色鉱物が共通して含まれている。これらの土器は五領ヶ台II式に位置付けられるものである。(野代)

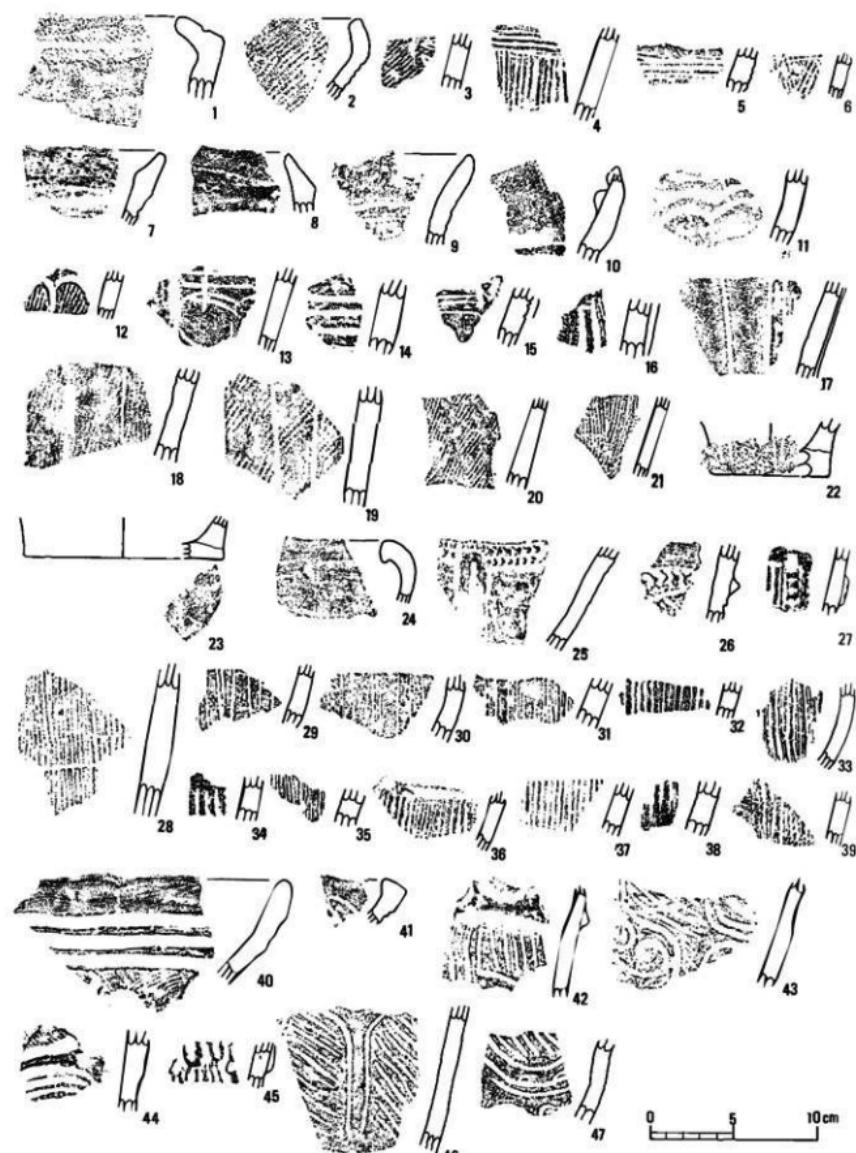


第51図 I-8グリッド遺物集中区土器出土状況



第52図 遺物集中区出土土器

第12節 試掘調査・包含層出土遺物

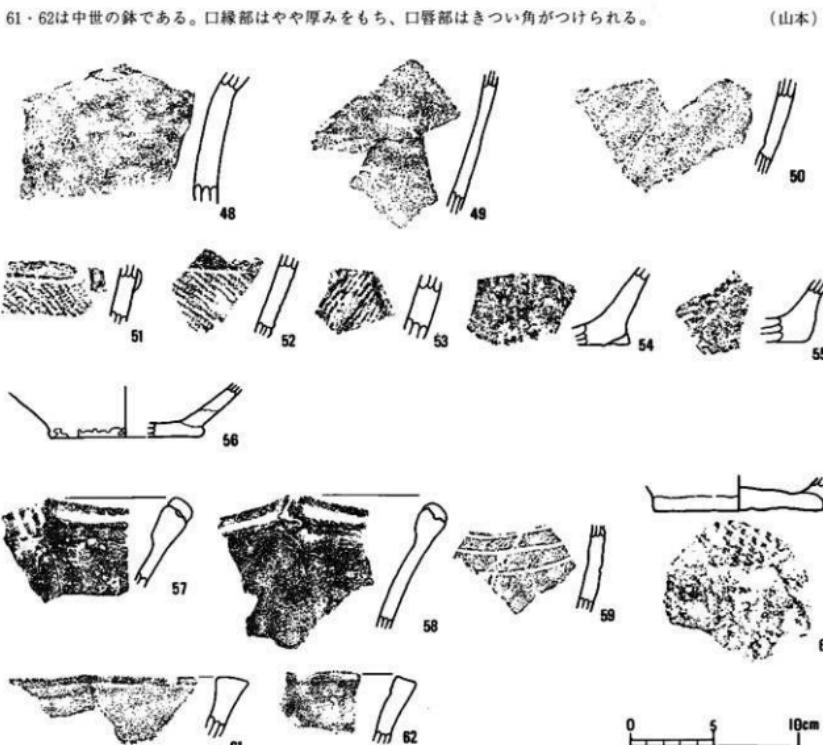


第53図 試掘出土土器 (1)

第53・54図は試掘調査出土遺物で、1・2は口縁部の破片である。「く」の字状に折れ曲がった口縁部に、縄文が施される。3は胴部の破片で、器面に縄文が施される。以上は縄文時代前期後半の諸磽式である。4・5・6は胴部の破片で、器面全体に平行沈線が施される。これらは、諸磽c式である。

7～10までは口縁部の破片で、7の内面は「く」の字状に外反する。8は「く」の字状に内傾するものである。9・10は、外反するものである。11・12・13は胴部の破片で、半円状沈線文が横位に連続するものである。これらは縄文を地文とする。14～19は沈線文を主体とするもので、16～19・22は縄文を地文として、縦位に沈線文が施される。14・15は横位へ平行沈線文が施される。20・21は、縄文を地文とするものである。23は底部の破片で、底部には木葉痕が認められる。7～23までは、五箇ヶ台Ⅱ式に属する。24～39は爪形文と平行沈線文を主体とするものである。40～47は綾杉状沈線文を主体とするもので、40は口縁部と胴部を3条の沈線によって区画され、その下部に蛇行沈線文が垂下され、その脇に綾杉文が施される。以上は曾利Ⅲ式に属するものと思われる。48～50は胴部の破片で無文である。51～53は器面に縄文が施される。54～56は底部の破片である。以上中期後半のものと思われる。

57・58は口縁部の波頂部に小突起がつけられ、その直下には粘土紐による貼付が施される。口唇部には、横向向へやや太めの1条の沈線が施される。また口縁部は、朝顔型に開く。以上は縄文時代後期の堀之内2式期に属するものと思われる。59は、胴上半部に3条の平行沈線文が施される。60は、底部に網代痕が認められる。以上は、縄文時代後期の加曾利B式である。



第54図 試掘出土土器(2)

遺物（第55～71図）

ここではグリッド出土の遺物を対象に紹介する。時期的には縄文時代前期から後期、平安時代、そして中・近世の遺物が含まれる。

包含層出土土器（第55～62図）

第55図の1～7は縄文時代前期に位置付けられるものである。1は口縁部破片で、縄文を施している。2は縄文地に沈線を施している。3は縄文地に沈線文と粘土紐による単純な浮線文が施されている。1～3については諸磯b式である。4は貼付文に結節浮線文が発達するもので、諸磯C式である。5～7は太めの粘土紐の貼付による押圧隆帯文が施されているもので、前期末葉の十三菩提式併行の肩平V類、室ノ木II群D類、晴ヶ峰式に該当するものである。

第55～60図の8～255は縄文時代中期に位置付けられるものである。この中でも、8～202は中期初頭段階に位置づけられるもので、まずこの段階のものを中心に紹介する。8～40は平縁で肥厚するタイプの口縁部破片で、25・26は内湾するキャリバー形土器、その他のものは外反する円筒形土器である。これらのものは縄文地に沈線による、平行および半円弧文が施されている。40は粘土紐の貼付によって「Y」字状文が施される。41～108はやや太めの沈線によって文様が施された胴部破片。109～134はやや細い沈線によって文様が施された胴部破片である。134～159は縄文地に沈線文ならびに隆帯文を施すもので、135～139は同一個体と考えられる。160～169は無文地に半隆起線文ならびに、隆帯文を施す胴部破片である。170・172・173は主頭状突起を有するタイプのもので、171は第52図に掲載したものと同様なものである。これらのものは口縁部が肥厚するタイプのものに付随するもので、土器の表面には縄文が施されている。174～183は縄文のみを施したものであるが、183はさらに縦位に結節縄文が施されている。184～190は無文地に沈線文が施されており、184については口唇部にヘラ状工具による刺突文が施されている。191～202は底部破片で、191～200は縄文地に平行沈線等が施されている。201・202は無文地に隆帯文が施されている。ここに示した土器は五領ヶ台II式であり、器形は円筒形の物が多く、全て縄文系に位置付けられると言った特徴を持っている。本遺跡において沈線文系土器の伴出関係が認められなかつたことは、興味深い事実である。

（野代）

203は連続角押文が施され、その下部には横位へ連続する山形沈線文が施文される。204はバネル文を施す。把手である。わずかに縄文が施された痕が認められる。210は頸部に粘土紐が横位に貼付され、下部には縦位への平行沈線文が施される。211～233は縦位への平行沈線文が施されるものである。234～242は、粘土紐が貼付されるもので、235～239・241・242は、押し引きによる半截竹管文が施される。

246～255は、底部の破片である。250～254までは、底部に木葉痕が認められる。

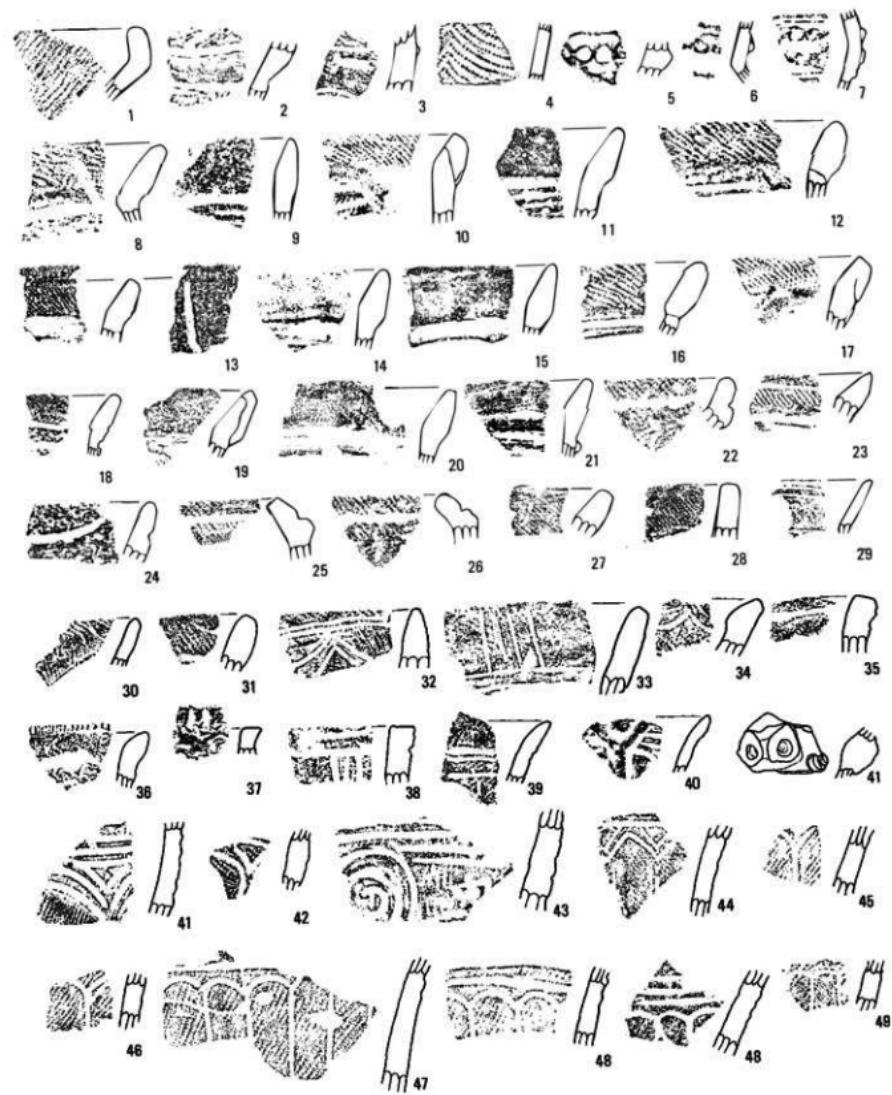
以上203は、縄文時代中期前半のものと思われる。204・205は、藤内式と思われる。206～255までは、縄文時代中期後半に属するものと思われる。

（山本）

256～260・264・265は堀ノ内式に比定される。いずれも破片資料のため器形及び、細分型式の判別は難しい。256～260は口縁部に沈線が巡るものである。264は胴部破片で、8の字状の突起が施される。265は注口土器の注口部の破片である。266～277は加曾利B1式に比定される。このうち266・267・272は精製深鉢の破片で、外面には横走する沈線や、沈線間に縄文を施し縄文帯を表出するものがある。縄文はいずれもL Rの単節縄文である。内面には数条の沈線が巡るものがある。他は、外面に文様が認められず、内面に数条の沈線が巡るので、沈線間に刻みを施すものも認められる。これらの破片は精製の浅鉢・深鉢のいずれかであろうが、判断に苦しむものがある。261～263・278～293は無文の粗製深鉢形土器である。外面は籠状工具による器面の調整が顕著なもの（288）、擦痕が認められるもの（278・286）などがある。294～296は底部の破片で、底部外面に網代痕が認められる。これら粗製深鉢形土器や底部破片はその型式を決定するのは難しいが、伴出している堀ノ内から加曾利B1式の範疇で捉えておきたい。

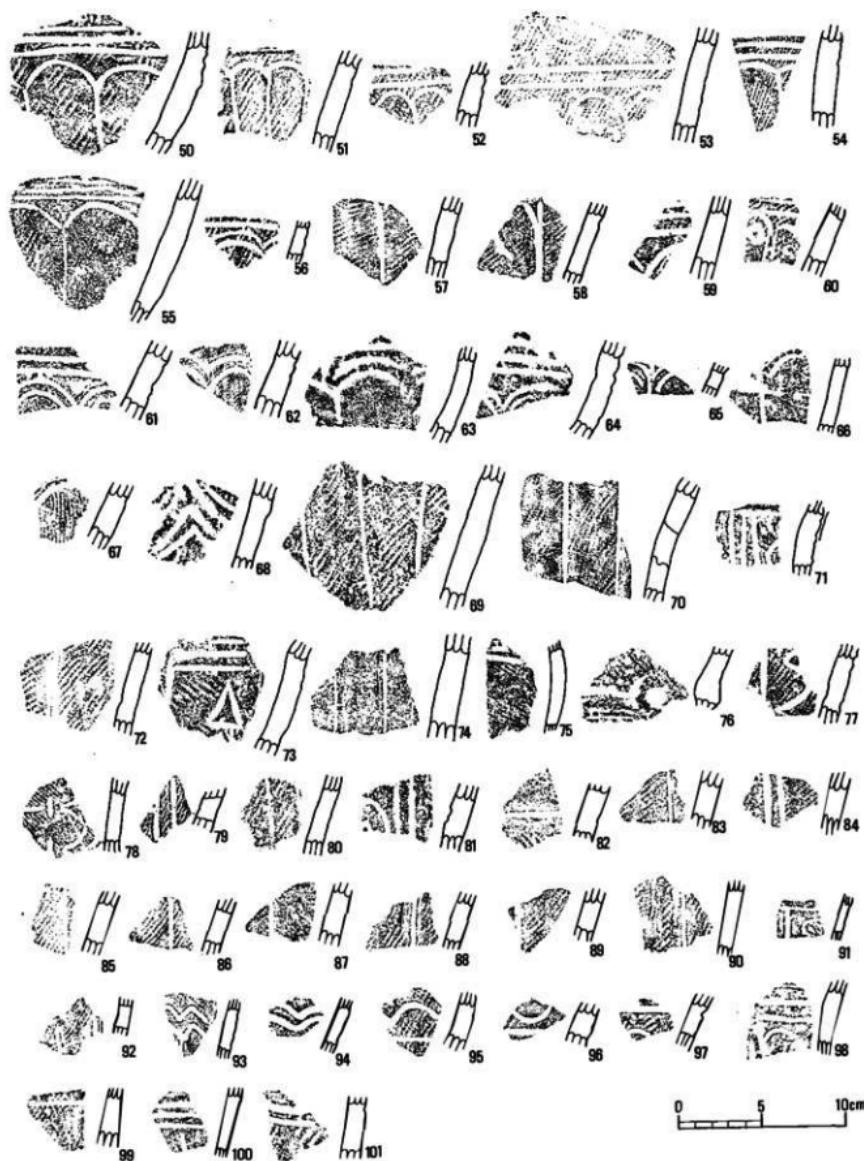
（三田村）

この他、縄文時代以降の遺物として平安時代から近世までのものがある（第62図）。297は平安時代の坏で、器面に墨書きが施されている。これは、甲斐型編年Ⅸ期に該当するものである。298～303は近世以降の遺物と考えら

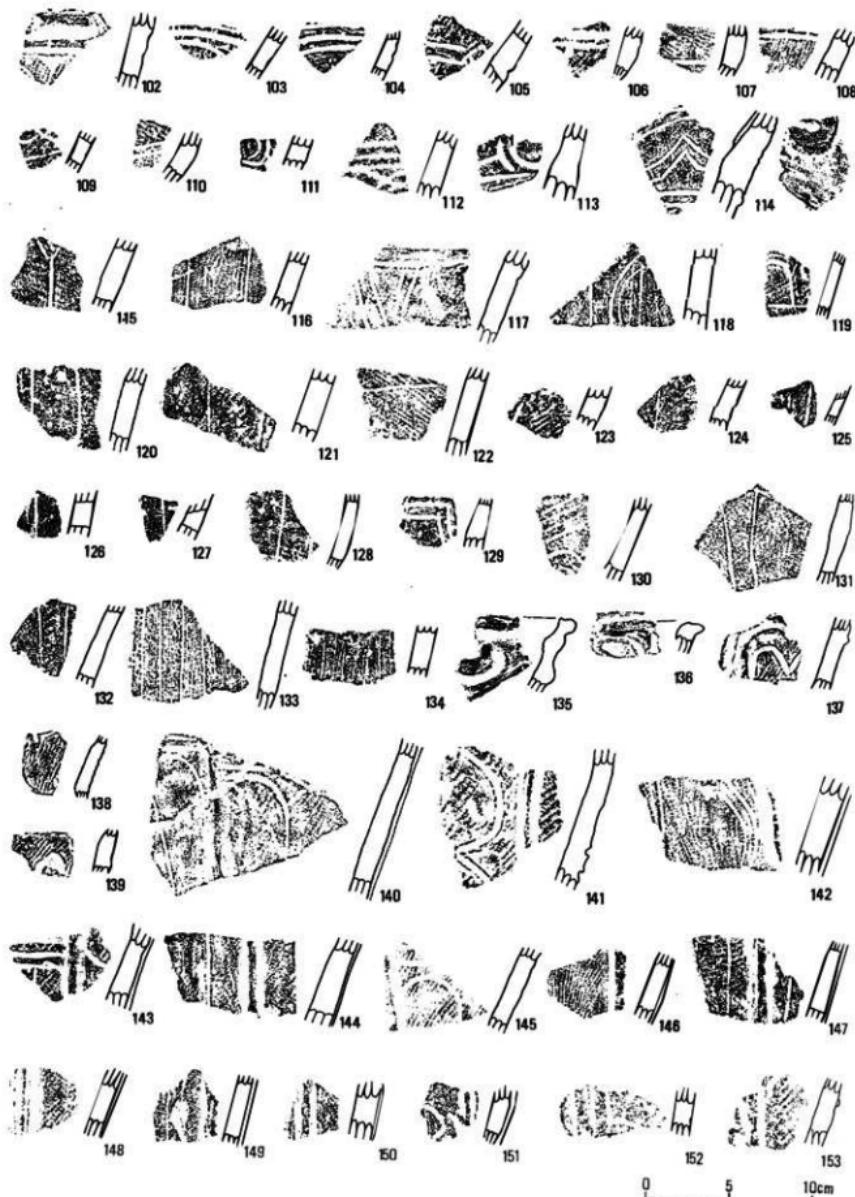


0 5 10cm

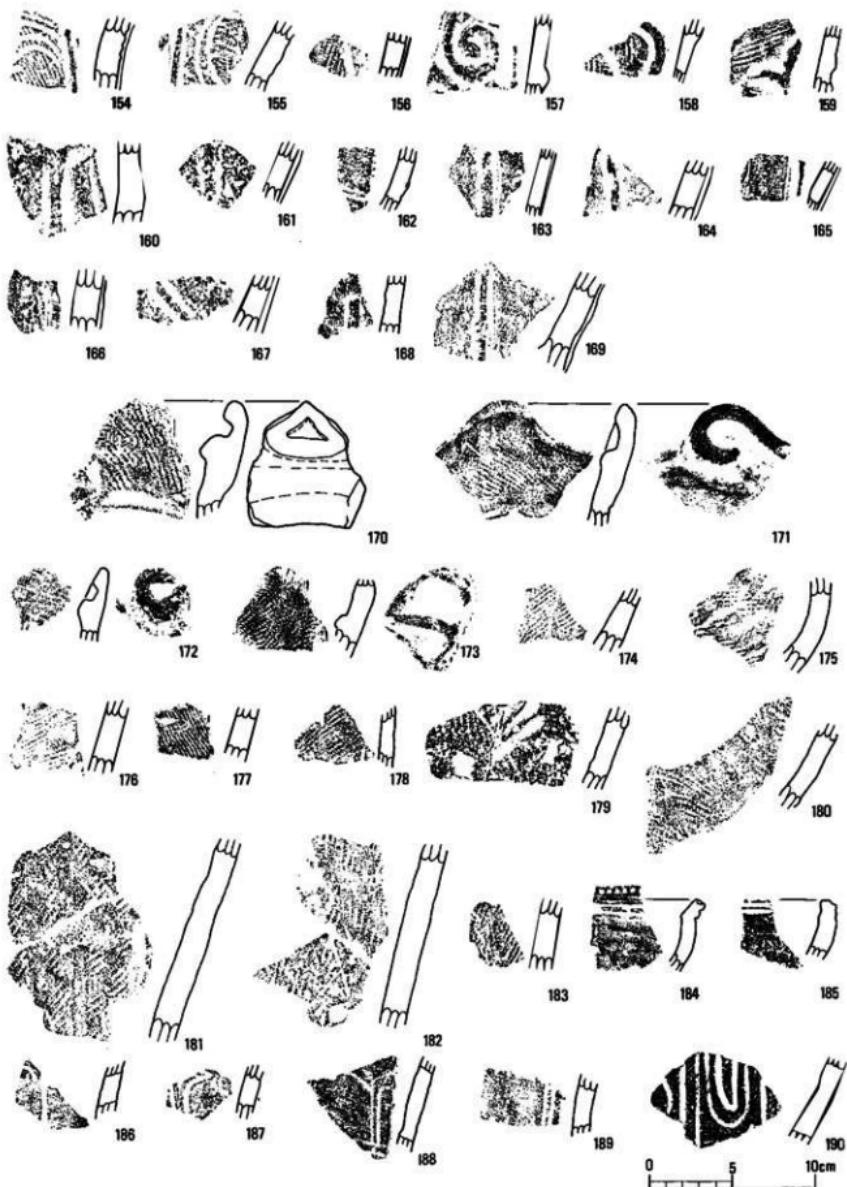
第55図 包含層出土土器(1)



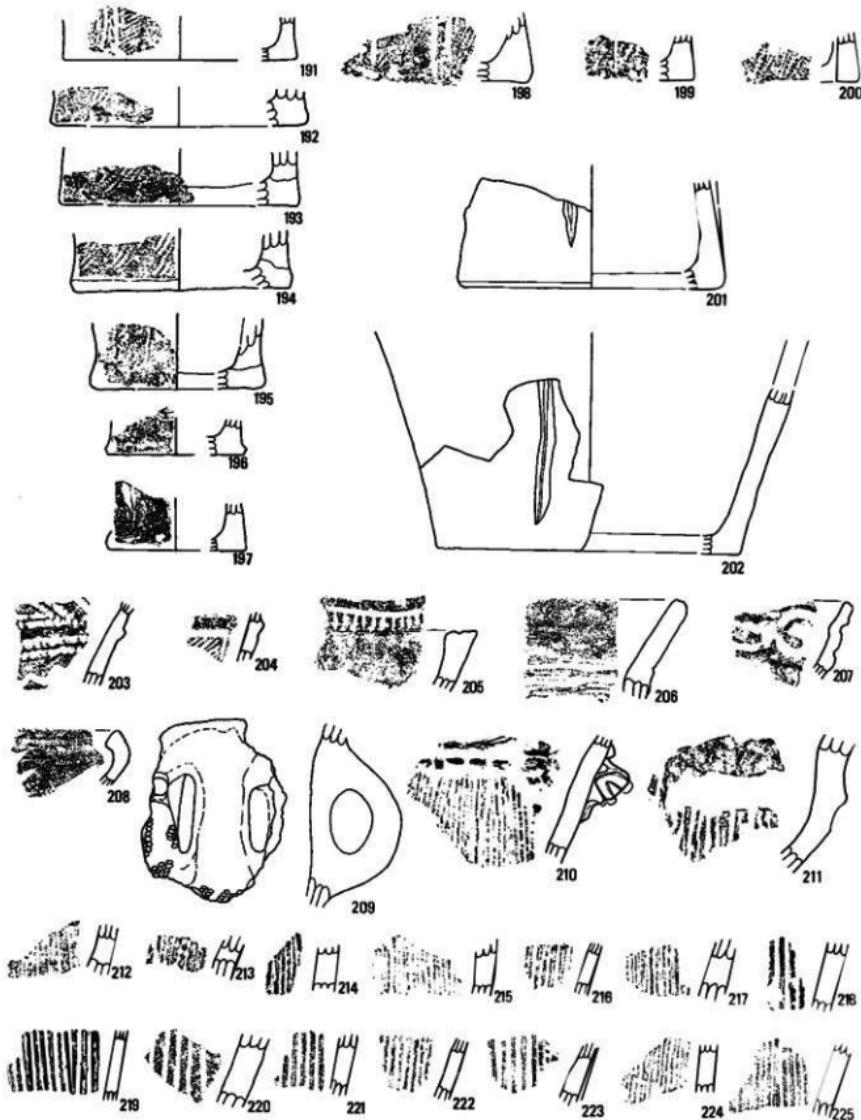
第56图 包含层出土土器 (2)



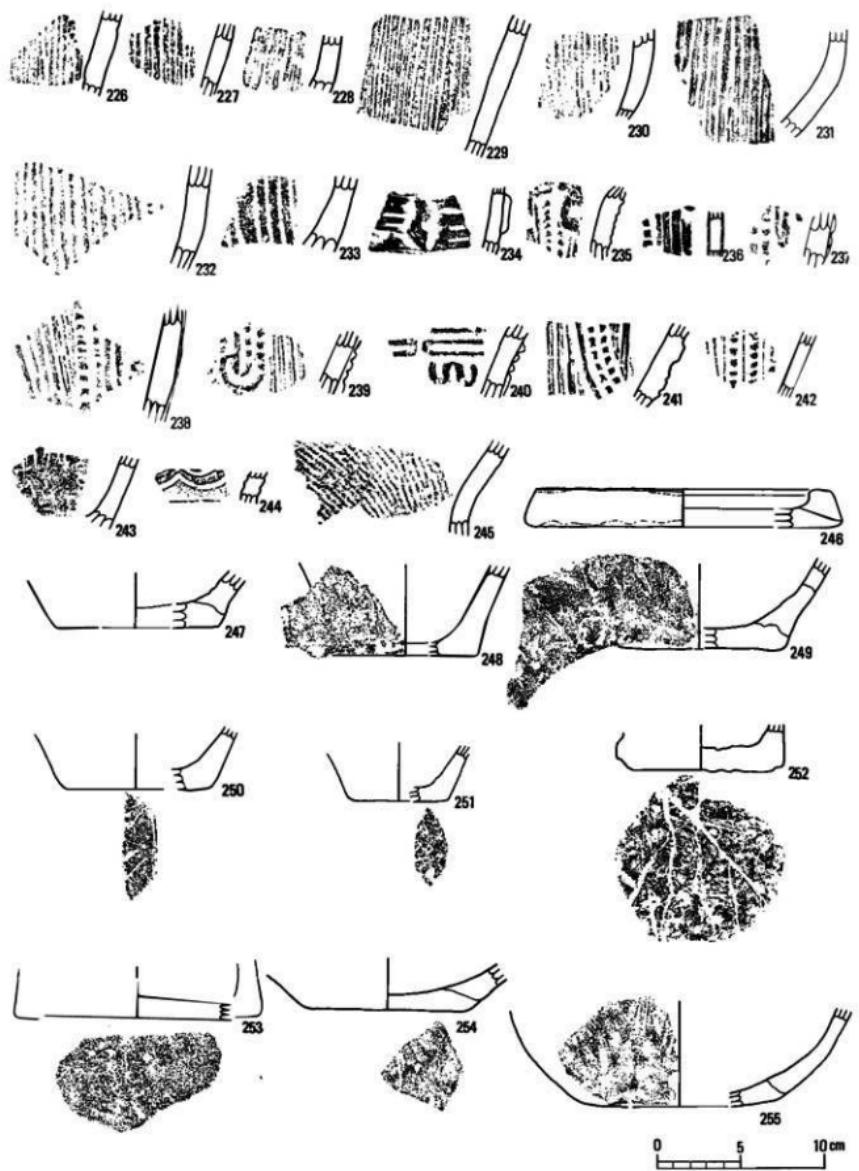
第57図 包含層出土土器 (3)



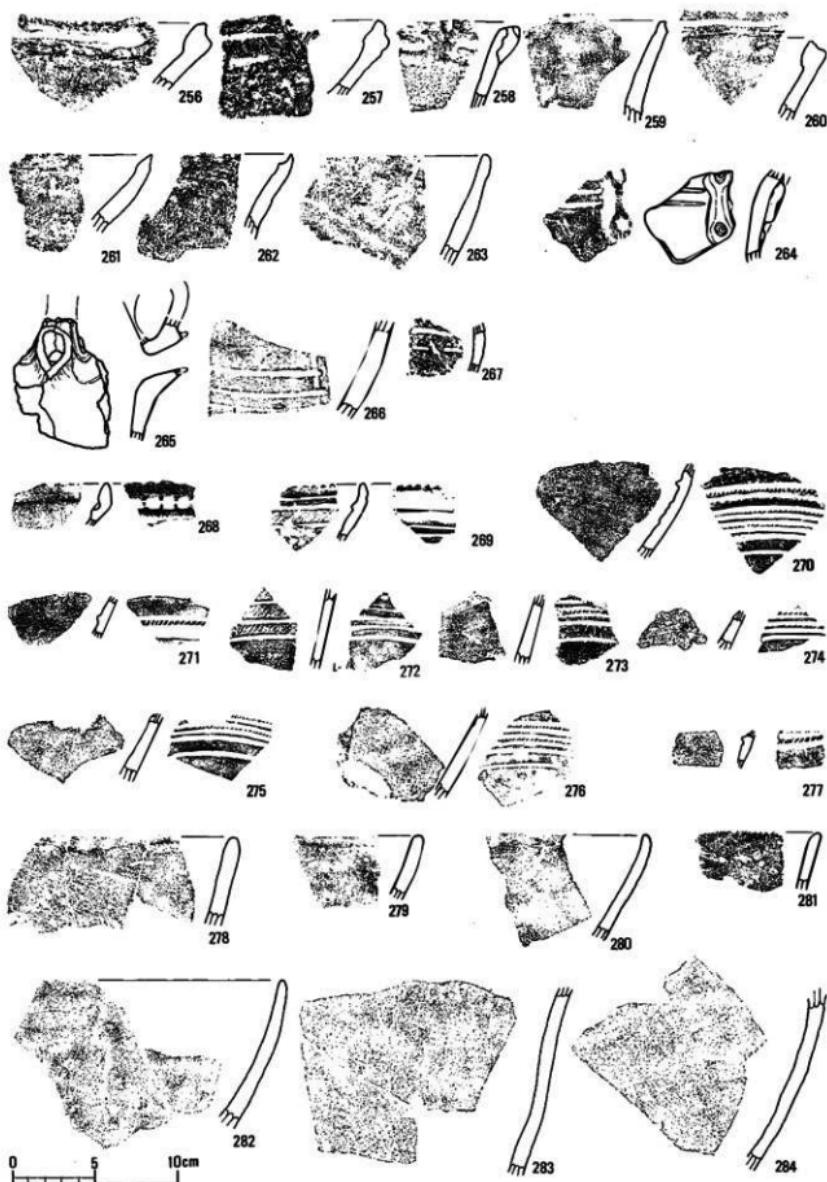
第58図 包含層出土土器 (4)



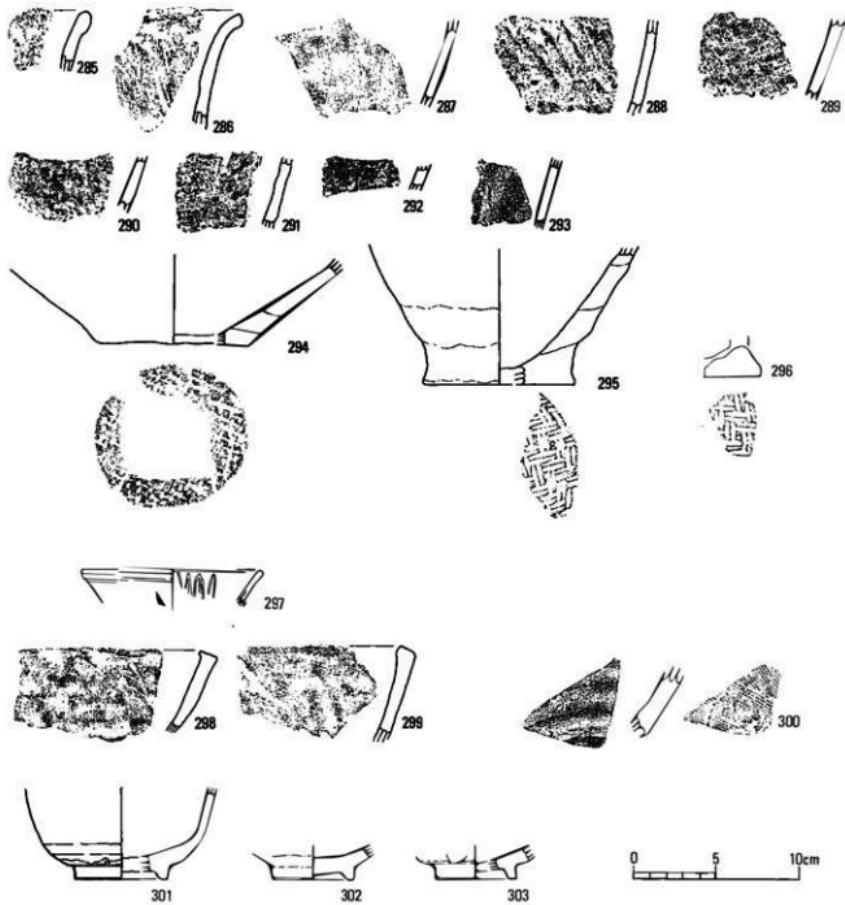
第59図 包含層出土土器 (5)



第60図 包含層出土土器 (6)



第61図 包含層出土土器 (7)



第62図 包含層出土土器 (8)

れるもので、298・299は鉢で、胎土は灰白色を呈している。303は摺鉢で、器面は赤橙色を呈している。301～303は碗で、器面に縁がかった釉が施されている。

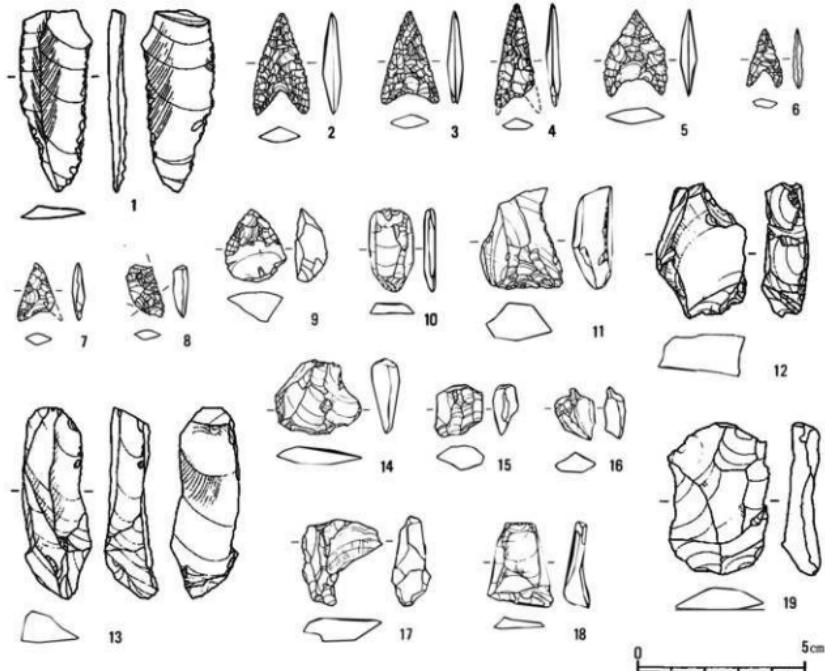
(野代)

出土石器（第63～68図）

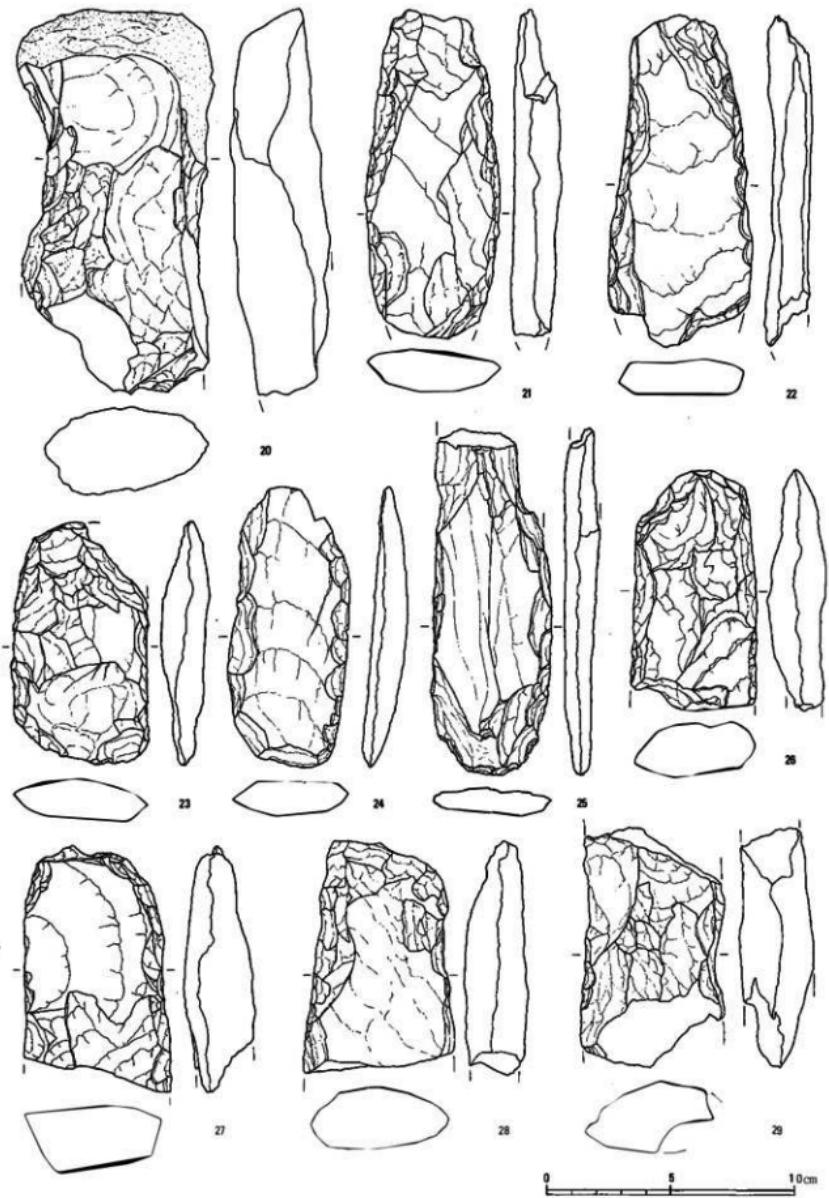
包含層から出土した石器は全部で79点である。その内訳は、石鎌8点（10.4%）、打製石斧31点（40.2%）、横刃形石器3点（3.9%）、石匙1点（1.3%）、磨製石斧3点（3.9%）、磨石2点（2.6%）、凹石5点（6.5%）、石皿1点（1.3%）、砥石2点（2.6%）、石核1点（1.3%）、小剥離のある剥片4点（5.2%）、二次加工のある剥片5点（6.5%）、剥片11点（14.3%）である。本遺跡から中期初頭から中葉にかけての土器が多数出土しているので、これらの石器の帰属時期は中期初頭から中葉にしてよいと思われる。打製石斧を主体とする組成は中部高地の中期における特徴であり、本遺跡においても同様の傾向がうかがえる。

石鎌（第63図2～9） 2～8は無茎凹基である。4・7は片脚が欠損しており、8は片脚の破片である。側刃部形態は、2～4・6～8は直線的であるのに対して、5は先端部は直線的であるが、中央から基部にかけて外側に膨らんでいる。9は先端部を加工しただけの未製品である。石材は2がチャート、3～9が黒曜石である。

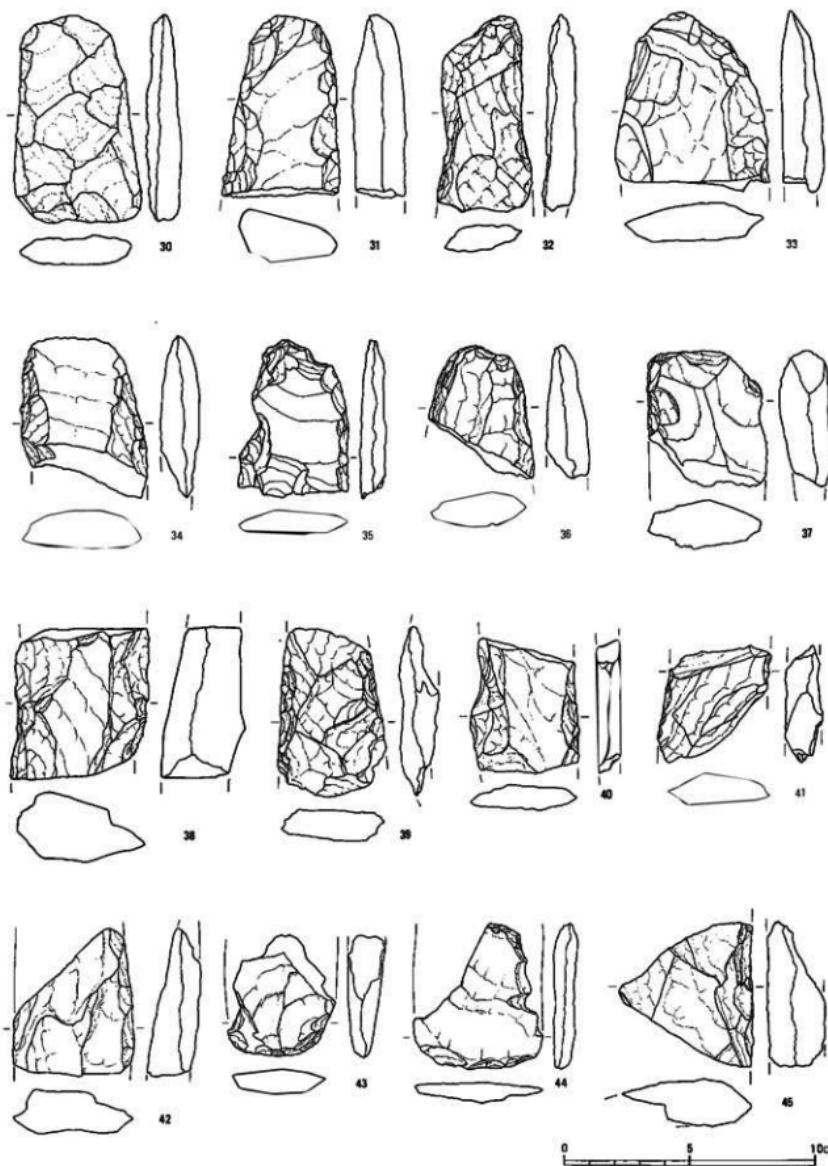
打製石斧（第64～66図20～50） 今回の調査で最も多く出土した石器が打製石斧である。包含層出土石器の内約40%を占めている。20～47は短冊形である。完形品は24・30の2つとごく僅かで、ほとんどが欠損品である。刃部を欠損しているものは、包含層出土の打製石斧31点「中23点」と、実に74.2%も占めており、刃部が残っているものは少ない。基部を欠損しているものは13点中31点で、41.9%を占める。48・49は撥形で、48はしゃもじのように胸部下半で幅広くなっている。49は基部から徐々に幅広くなっていく。50は分銅形で、胸部が括れており、厚みがある。刃部の一部が欠損している。



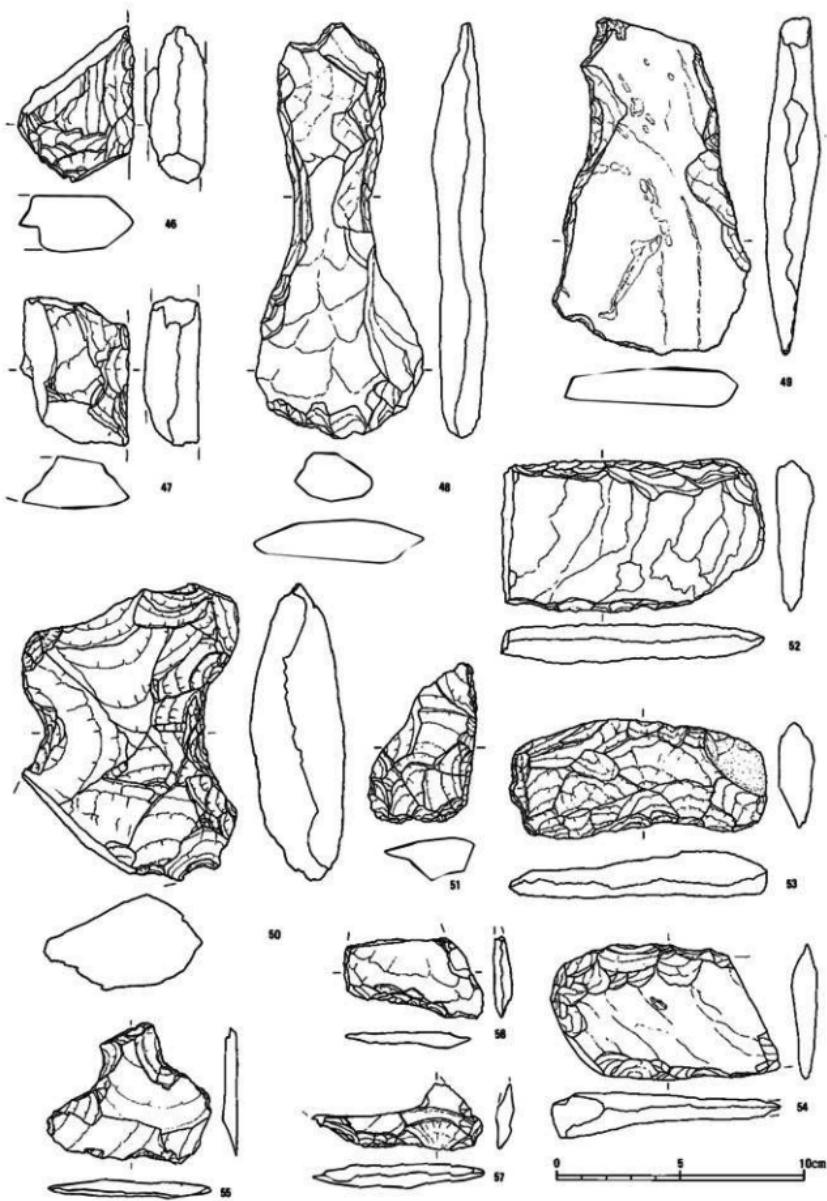
第63図 包含層出土石器 (1)



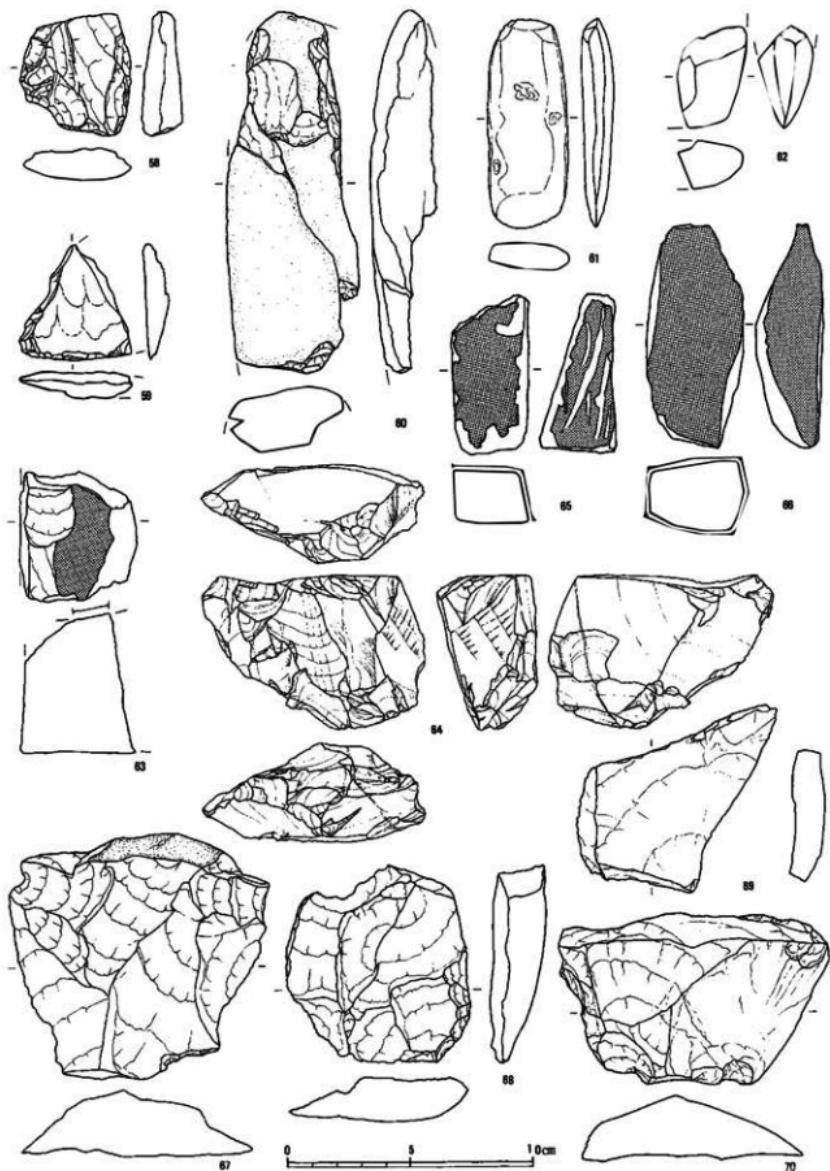
第64図 包含層出土石器 (2)



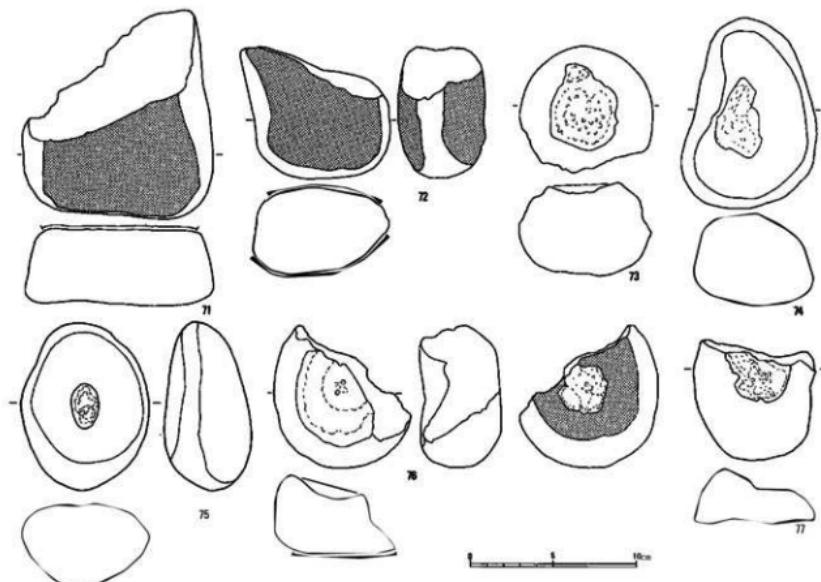
第65図 包含層出土石器 (3)



第66図 包含層出土石器(4)



第67図 包含層出土石器 (5)



第68図 包含層出土石器(6)

石材は、20・23・39・47・50が頁岩、21・22・24・26～28・32・33・35・40・42～44・46がホルンフェルス、25・36が粘板岩、29～31・37・38・41が砂岩、34・45・48・49が安山岩である。

横刃形石器（第66図52～54） 52は刃部が外溝し、厚みは均等である。53は刃部が内溝し、一侧辺部が厚くなっている。54は直線的な刃部であり、一侧辺部が厚くなっている。どれも刃部に調整を施してある。52・54はホルンフェルス、53は砂岩である。

石匙（第66図55） 作りが粗い石匙である。つまみ部を作り出すところと、刃部の一部に調整を施しているだけで、あまり加工の痕がみられない。石材は頁岩である。

磨製石斧（第67図60～62） 60は刃部・柄部裏半分が欠損し、基部が打ち欠かれている。表面は磨かれているがうねりがあり、さほどきれいな仕上がりではない。61は定角形の磨製石斧である。円刃で、中央部やや上寄りに打ち欠き痕がある。62は刃部破片である。60は蛇紋岩、61・62は砂岩片岩である。

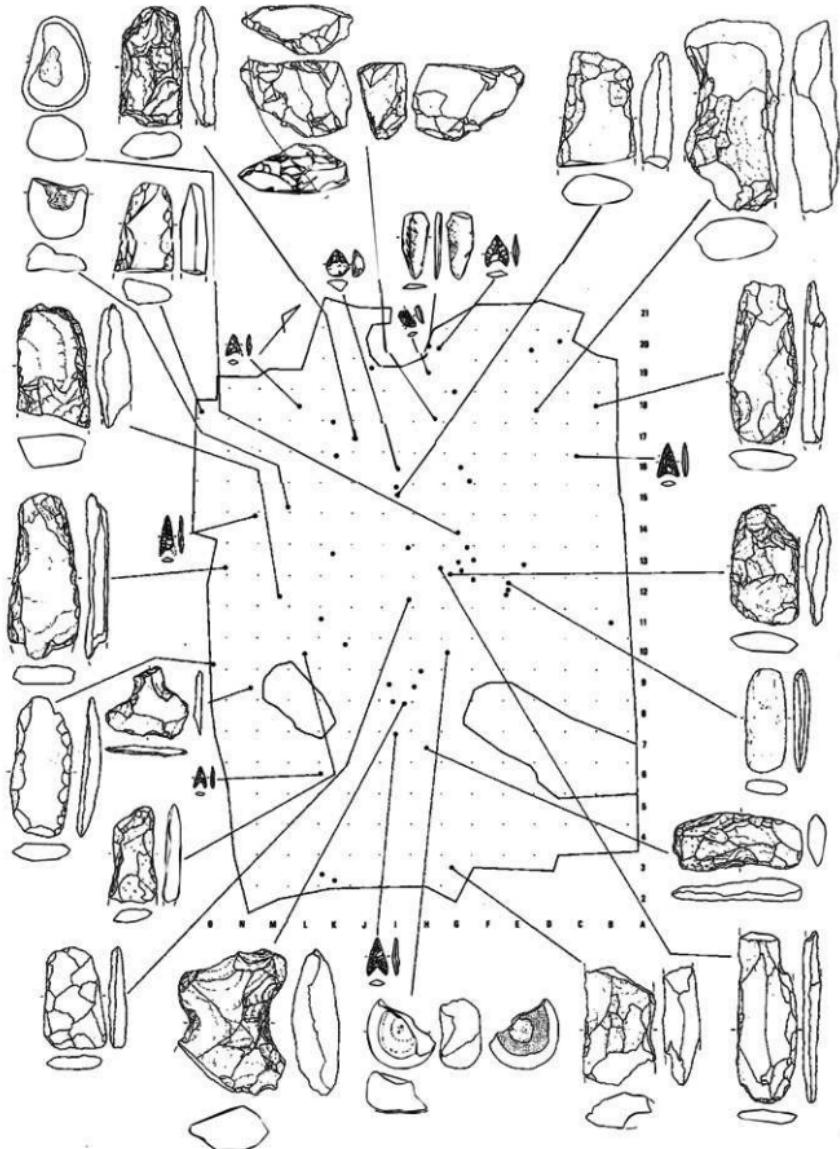
磨石（第68図71・72） 71は磨面1面、72は磨面2面をもつ磨石である。72は加熱を受けている。石材は71・72とも安山岩である。

凹石（第68図73～77） 73・74・75・77は凹みを1つもつ。76は表面に深い凹みと裏面に浅い凹みをもち、裏面は磨面になっている。74・75・77は加熱を受けており、その影響であろうか、73・77は欠損している。石材は、73～77いずれも安山岩である。

石皿（第67図63） 63は石皿の破片である。凹みのある石皿ではないが、作業面は磨痕がある。安山岩製である。あとは砥石（第67図65・66）、石核（第67図64）、小剥離のある剥片（第63図1・10～12）、二次加工のある剥片（第66図51・56～59）、剥片（第63図13～19・67～70）などが出土している。

第61図1の小剥離のある剥片は、縱長剥片の石刀と思われる。剥片背面の剥離面は2面で、剥片側縁部には調整の痕はみられず、刃こぼれと思われる小剥離が両側縁部に確認できる。黒曜石製である。本遺跡における唯一の旧石器時代の遺物であろう。

(村松)



第69圖 石器分布圖

出土金属製品

煙管（第70図1・2） 1は煙管の首部である。長さ11.3cm、先端部径1.16cm、口つけ部径0.73cmであり、口つけ部からゆるやかに太くなっていく。2は煙管の胴部であろう。残存長は1.49cmで、少しつぶれている。

鉛玉（第70図3） 3は鉄砲に使用する鉛玉である。径1.19cm、重量6.0gで、一部空洞があった所に欠損箇所がある。

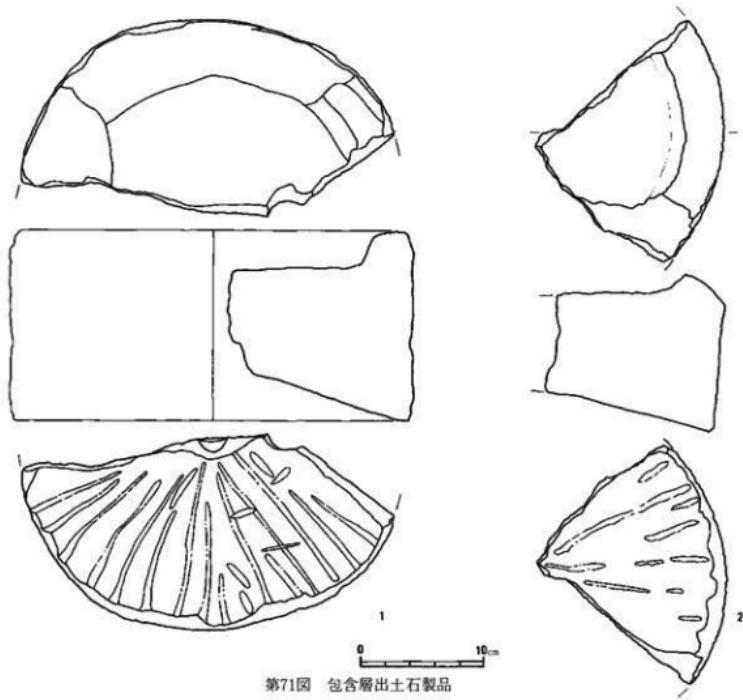
出土石製品

石臼（第71図1・2） 1・2とも石臼の中の上臼である。1は約1/2残存しており、下面には放射状の溝が施されている。下面中央には軸棒を受ける穴があり、その直径は約5.6cmである。上面の凸部の断面形態は台形状になっている。2は約1/6残っており、1と同様に下面には放射状の溝が施されている。溝は1と比べると摩滅が激しい。石臼中央部は残っていない。上面の凸部の断面形態は三角形状になっている。石材は1・2とも安山岩である。

（村松）



第70図 包含層出土金属製品



第71図 包含層出土石製品

第Ⅳ章 考察

第1節 繩文時代の遺構・遺物について

遺物分布と遺構の在り方

各時期の出土遺物は、調査区全体に分散しているわけではなく、ある一定の空間において、集中することがわかった。本遺跡の場合、時期的な遺構・遺物の広がりとして、中期初頭段階と中葉段階にピークに達している。初頭段階では、調査区北から東側縁辺部にかけての暖傾斜地帯に多く分布する。一方中葉段階では、調査区中央付近の地形が高まりを見せる部分のみに集中している。遺物の分布についても、その広がりはその遺構の分布と合致する。このように、北から北西側にかけての傾斜地が初頭段階、中央付近の平坦部が中葉段階といったよう、時期別に主として営まれた空間が異なっていたことが理解できるのである。

遺物の出土量では、このどちらの時期においても少ない。初頭段階では、広域に遺物の分布は認められるものの、土器は破片類が主体である。石器類でも剥片・碎片が少ないので、別の地点で制作されたことが窺われる。また、製品の量が少ない上に、出土した石器の全体的な傾向として、欠損品の割合が高いことが指摘できる。このように生活空間のひろがりは理解されるものの、使用・廃棄が中心で、生活の営みは短期的なものと想定されるのである。このことは、住居跡の構造上の貧弱さからも理解できよう。中葉段階でも、第1号住居跡の周辺のみに同時期の遺物が集中し、遺物の量も決して多いものではないため、こちらも短期的で小規模な営みが窺える。

初頭段階について言えば、この時期に多く見られる在り方で、遺構を伴わずに遺物のみの出土を示すパターンではないにしても、貧弱な構造の堅穴住居跡と焼土跡を中心とするこのようなキャンプサイト的な在り方は、中部高地にみられるそれとは異なり、関東的な色彩が見て取れる集落形態を示しており、興味深いものである。

前期末葉から中期初頭の土器の編年的位置付けと問題点

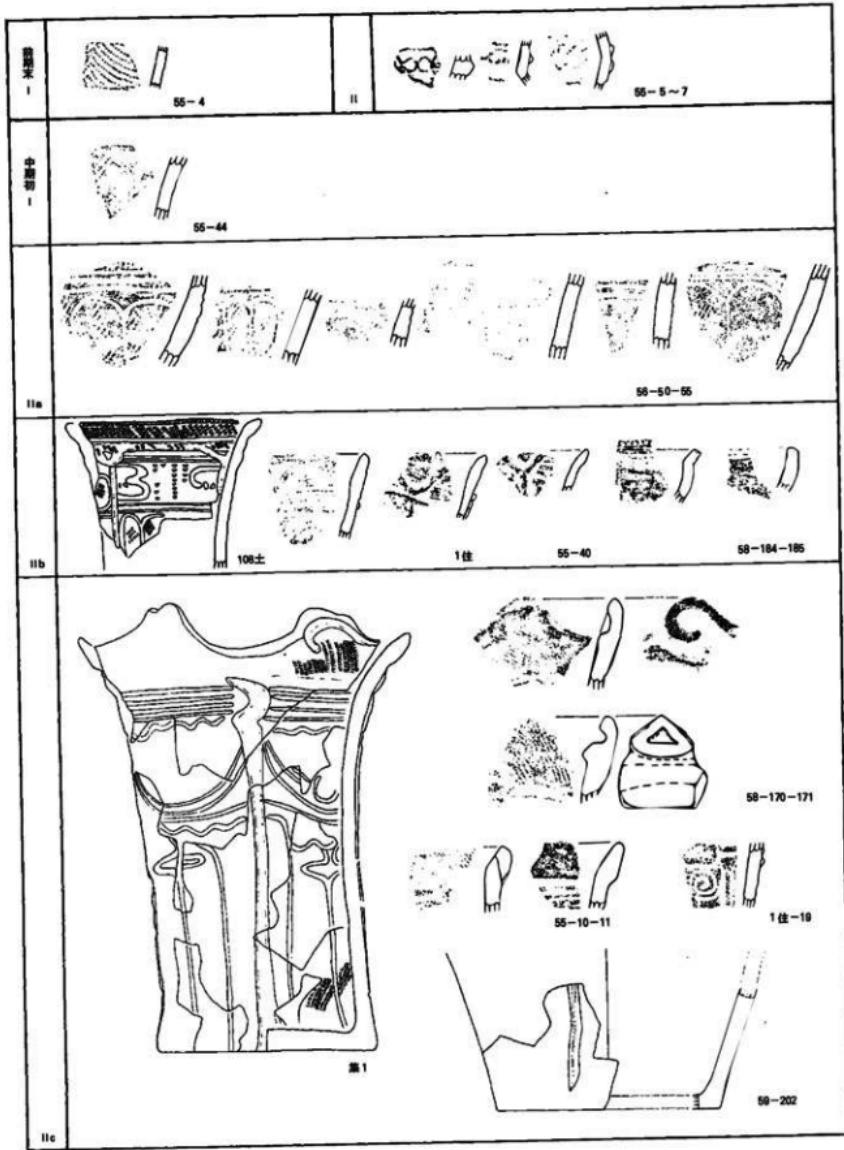
第72図のような変遷が日影田遺跡において認められる。まず前期末葉Ⅰ段階の諸磽c式に位置付けられる結節浮線文を施すものから、Ⅱ段階の浮線文を主とする十三昔提式に併行する一群で、押圧隆帯文を施すもの。中期初頭Ⅰ段階では胴上部に「Y」字状文を連続配置する五領ヶ台Ⅰ式、五領ヶ台Ⅱ式ではⅡa段階として「Y」字状文がつながって連続配置されるもの、つづいてⅡb段階として「Y」字状の貼付文を伴うものなどを中心としたもの、Ⅱc段階として口縁部が肥厚し、主頭状突起ないし「の」字状突起を有するものをまとめた。このよう短い期間であるにもかかわらず、ある程度継続性を持って生活が営まれてきたことが窺える。この時期では、このようにある程度の継続性が窺える例が割合多く認められており、日影田遺跡もこの典型的な例にあてはまるものである。

中期初頭段階の土器群では、遺物図版で示したように、出土した土器の大部分が遺構に伴わない包含層を主とするもので、伴出状況等が窺えない資料が中心で、いろいろな土器の混在が認められるはずであろう条件の中で、円筒型を主体とする繩文系の土器群のみしか発見されず、同時期とされ本来伴出関係にあるべく沈線文系の土器群との共伴関係が認められなかったことは、とても興味深い例を提供してくれたものと思う。こういった例は、周辺遺跡でも認められ、例えば長坂町の健康村遺跡⁽¹⁾では、沈線文系土器群のみの出土を示し、同町酒呑場遺跡⁽²⁾では、どちらの系統の土器群も出土しているにもかかわらず、それぞれの土器群が遺構内において共伴関係が認められないものである。他の例では、遺物が少量のみ出土する遺跡で、どちらか一方系統だけの出土例は知られていたものの、これだけ明確に分離されているのも珍しい例ではないかと思う。從来、同時に共伴関係にあるとされる二系統の土器群において、これだけ顕著に分離状況が認められるのも不思議な気がする。こういった状況が認められる背景には、時期差や地域性についてもっと考えていかなければ、納得できる回答が引き出せないように思われる。これらの問題点については、今後の重要な検討課題としたい。

(野代)

〔参考文献〕

- (1) 新宿区区民健康村遺跡調査団『健康村遺跡』(1994)
- (2) 山梨県埋蔵文化財センター『年報』(1995)



第72図 前期末葉から中期初頭土器変遷図

第2節 出土石器について

今回の調査で出土した石器は総点数119点である。その内訳は、石鎌11点(9.3%)、打製石斧42点(35.3%)、横刃形石器5点(4.2%)、石匙1点(0.8%)、スクレイパー1点(0.8%)、磨製石斧3点(2.5%)、磨石2点(1.7%)、凹石8点(6.7%)、石皿4点(3.4%)、台石1点(0.8%)、二次加工のある剥片9点(7.6%)、小剥離のある剥片5点(4.2%)、剥片22点(18.5%)、石核1点(0.8%)、砥石2点(1.7%)、石臼2点(1.7%)、である。遺跡から出土する土器は、単一土器型式のものではなく、複数の土器型式があるので、この石器群が全て同時期のものとはいえない。第61図の1の小剥離のある剥片は、旧石器時代の遺物である可能性があり、また、砥石・石臼は新しい時期のものと考えられる。

縄文時代の石器は、それらの石器を除いた114点である。その構成比率は第5表の通りである。本遺跡の主体は中期初頭から中葉にかけての土器群であるので、114点の石器もその時期のものと捉えていいであろう。

本遺跡の石器群は、縄文中期の遺跡によくみられる打製石斧が多く出土するという特徴がある。第5表では剥片も含めているので、割合が36.8%と少し低いが、剥片の点数を省いて考えると45.6%となり、一段と割合が高くなる。縄文時代中期の特に前半は、打製石斧が組成の上で圧倒的に優位に立ち、出土石器中の50~90%を占める場合が多い。

近接の遺跡をみると、時期は少しずれるが、長坂町頭無遺跡・柳坪遺跡なども同じ割合で打製石斧が出土している。しかし、頭無遺跡などでは磨石・凹石類が、50%近く出土するのに対して、本遺跡では8.8%しか出土していない。大集落というよりも小規模集落である本遺跡と同じような方城第1遺跡でも、やはり磨石・凹石類が約20%しか出土していない。時期のずれも考慮しなければならないが、大集落と小集落の違いの差によるものであろうか。資料が少ないので断定はできないが、集落間における分業が存在していた可能性がすでに指摘されており、今回の調査での結果は、この問題に対して有効な資料となり得るだろう。

また、漁撈に関する石器の石錐や祭祀用の石棒などが出土していない。中部高地では漁撈に関する石器が出土することは少なく、そして、小規模な集落では祭祀用の石器の出土は少ない傾向にある。本遺跡の石器群もそれにもれず、同様の傾向を見せている。配石などの祭祀遺構を伴わず、遺跡の性格がキャンプサイト的なものであるからなのであろう。

以上、ごく簡単に本遺跡の石器群の特徴を見てきたが、それから導き出される問題点は、すでに指摘されているものを追認するものであった。それらの問題に少しでも今回の調査結果を役立て、解明していかねばならない。

(村松)

〔参考文献〕

- 伊藤公明 「方城第1遺跡」 大泉村教育委員会(1988)
末木 健 「縄文時代集落の繼続性(Ⅱ) -縄文中期八ヶ岳山麓の石器組成より-」
〔『山梨県考古学学会誌』創刊号 山梨県考古学協会、1987〕
米田明訓 「柳坪遺跡」 山梨県教育委員会(1986)

表5 日影田遺跡の縄文時代石器組成

	石鎌	打斧	横刃	石匙	スク	磨斧	磨石	凹石	石皿	台石	二次加工	小剥離	剥片	石核
1 住	2 (9.1)	6 (27.3)									4 (18.1)		10 (45.5)	22 (100)
土 坑	1 (5.6)	5 (27.7)	2 (11.1)	·	1 (5.6)			3 (16.6)	3 (16.6)	1 (5.6)		1 (5.6)	1 (5.6)	18 (100)
包含層	8 (10.8)	31 (41.9)	3 (4.1)	1 (1.3)		3 (4.1)	2 (2.7)	5 (6.8)	1 (1.3)		5 (6.8)	3 (4.1)	11 (14.8)	1 (1.3)
合 計	11 (9.6)	42 (36.8)	5 (4.4)	1 (0.9)	1 (0.9)	3 (2.6)	2 (1.8)	8 (7.0)	4 (3.5)	1 (0.9)	9 (7.9)	4 (3.5)	22 (19.3)	1 (0.9)

上段：出土点数 下段：%数値

第3節 第1号住居跡の炉について

本住居跡で確認された炉の形態は、石囲炉と地床炉の両者を併用したものである。目黒吉明氏（1982年）は、集落と住居跡との関連を検討するために、屋内炉は重要な意味をもつと述べている。そして縄文時代の屋内炉は、時期的変遷・形態・機能を体系的に検討されていないことを指摘した。そこで目黒氏は、屋内炉をA型からI型に形態分類を行い、中期については、各地域で特色をもった発達を示し、住居内において重要な施設として定着し、住居を単位とする食生活が確立したことを述べるとともに、火に対する信仰との関連性をも指摘している。

しかし、今回調査を行った第1号住居跡の炉の形態は、氏の形態分類から外れるものとなつたが、あえて氏の分類に従うとすればE型とF型の間にもう1型式を追加し石組地床炉、或いは石囲複式炉と名を付さねばならぬであろう。そこで本文を進めて行く関係上、ここでは仮に「石囲複式炉」と名を付しておきたい。

石囲複式炉は、山梨県内では1974年に柳坪・頭無遺跡（末木 1975）の両遺跡の調査が行われた際確認されたもので、その時は石囲炉と地床炉の記載であった。柳坪遺跡はA・B地区からなり、A地区では縄文時代中期の住居跡が7軒発見され、そのうち1軒は曾利式期の住居に本炉の形態が認められる。またB地区では、縄文時代中期の住居跡が14軒確認され、そのうち本炉の形態をとる住居跡は7軒（第74図-1）で曾利式期にその存在が認められ、報告書のまとめにおいて、この炉の存在を意識して書かれている。また頭無遺跡では、縄文時代の住居跡16軒中4軒（第74図-2）で、曾利式期である。

1985年には、柳坪遺跡名で中央自動車道長坂インターチェンジの建設に伴う発掘調査（米田 1986）が行われている。この遺跡からは、縄文時代の住居跡が10軒発見され、そのうち本炉の形態を使用したのは曾利式期の1軒（第74図-3）のみである。報文中で特に注目されるのは、「……この石囲い炉とは別に、この時期、この地域の住居址に一般的に見られる地床炉が残されている。……」という記述である。

このように、約20年前から本炉の形態が知られているのであるが、その分布や形態等を論じたものはないようである。

そこで今回は、県内で発掘調査が行われた縄文時代中期の遺跡と、石囲複式炉の分布を取り上げ若干の考察を行ってみたい。そして、以下に遺跡名と住居軒数及び本炉を使用している軒数を取り上げて進めて行きたい。

大泉村の方城第1遺跡（伊藤 1988）については、縄文時代中期の住居跡7軒に対して確實に存在するものは、縄文時代中期後半の曾利式期1軒（擾乱を受けている住居があり不明であるが）であり（第74図-4）、また大和田遺跡・大和田第2遺跡（伊藤 1989）については、7軒中3軒（第74図-5）の曾利式期にその存在が認められる。姥神遺跡（柳原 1987）については、縄文時代中期後半の住居跡が12軒確認され、そのうち3軒（3軒中1軒は地床炉の位置に問題があるかもしれない）である。甲ヶ原遺跡（山本他 1989・1991）では、住居が約90軒が調査されているが、そのうち2軒が縄文時代中期後半の曾利式期にこの炉の形態が認められている。

小淵沢町に所在する中原遺跡（末木 1974）では、縄文時代中期の住居跡9軒中0軒、上平出遺跡では、縄文時代中期の居住跡2軒中0軒である。また沢の田遺跡（佐野 1984）では、縄文時代中期の住居跡が3軒調査されているが、本炉の形態をとる住居は0軒である。

白州町根古屋遺跡（平野 1985）では、縄文時代中期後半の住居跡が12軒調査がなされ、そのうち1軒（曾利式期）にその形態が認められる（第74図-6）。

高根町西原遺跡（雨宮 1987）においては、同時代の同期1軒（曾利式期）である（第74図-7）。

須玉町津金御所前遺跡（山路 1987）では、5軒中（半分未調査部分あり）2軒は井戸尻式期である。特に第5号住居跡（第74図-8）では、石囲炉の南にある地床炉の直上に顔面把手付深鉢が圧倒破壊して出土しており、極めて得意な例と言える。

以上が、北巨摩地域に所在している。

柳形町メ木遺跡（清水 1987）では、同時代同期4軒中1軒（藤内式期の土器が出土している）にその存在が認められる（第74図-9）。



第73図 遺跡分布図

1. 中原遺跡
2. 沢の田遺跡
3. 上平出遺跡
4. 柳坪遺跡
5. 大和田遺跡・方城第1遺跡
6. 姥神遺跡
7. 甲ヶ原遺跡
8. 西原遺跡
9. 頸無遺跡
10. 横古屋遺跡
11. 津金御所前遺跡
12. 宿尻遺跡
13. 板井遺跡
14. 金の尾遺跡
15. 曾根遺跡
16. メ木遺跡
17. 上野原遺跡
18. 上の平遺跡
19. 一の沢遺跡
20. 汗遺跡
21. 北堀遺跡
22. 釈迦堂遺跡
23. 安道寺遺跡
24. 重郎原遺跡
25. 白山遺跡
26. 川合遺跡
27. 大月遺跡
28. 中溝遺跡
29. 宮の前遺跡
30. 法能遺跡

敷島町金の尾遺跡（末木 1987）では、8軒中0軒である。

塙市重郎原遺跡（上野 1969）では、縄文時代中期中葉の住居跡が1軒調査されているが、本炉の形態は認められない。また、同市の安道寺遺跡（小林 1975）では、縄文時代中期の住居跡19軒中0軒である。

中道町上の平遺跡（中山 1987）では、縄文時代中期中葉から後半まで14軒の調査が行われたが、本炉の使用例は0軒である。また、一の沢遺跡（小林 1989）、上野原遺跡（中山 1987）では、住居跡の約半分が調査区外といった住居が多く、不明と言わざるを得ない。ただし、全掘したものに関しては、その存在を認めるることはできない。

一宮町釈迦堂遺跡（小野 1986・1987）では、塙越北B地区SB-05（第2図-11、曾利Ⅲ～Ⅳ）、S-Ⅲ区SB-42（重複の可能性がある）、SB-96、SB-98、SB-109（第2図-10）、S-Ⅳ区SB-32、SB-23の6軒が確認され、これらの住居は、縄文時代中期後半曾利式期に属するものである。

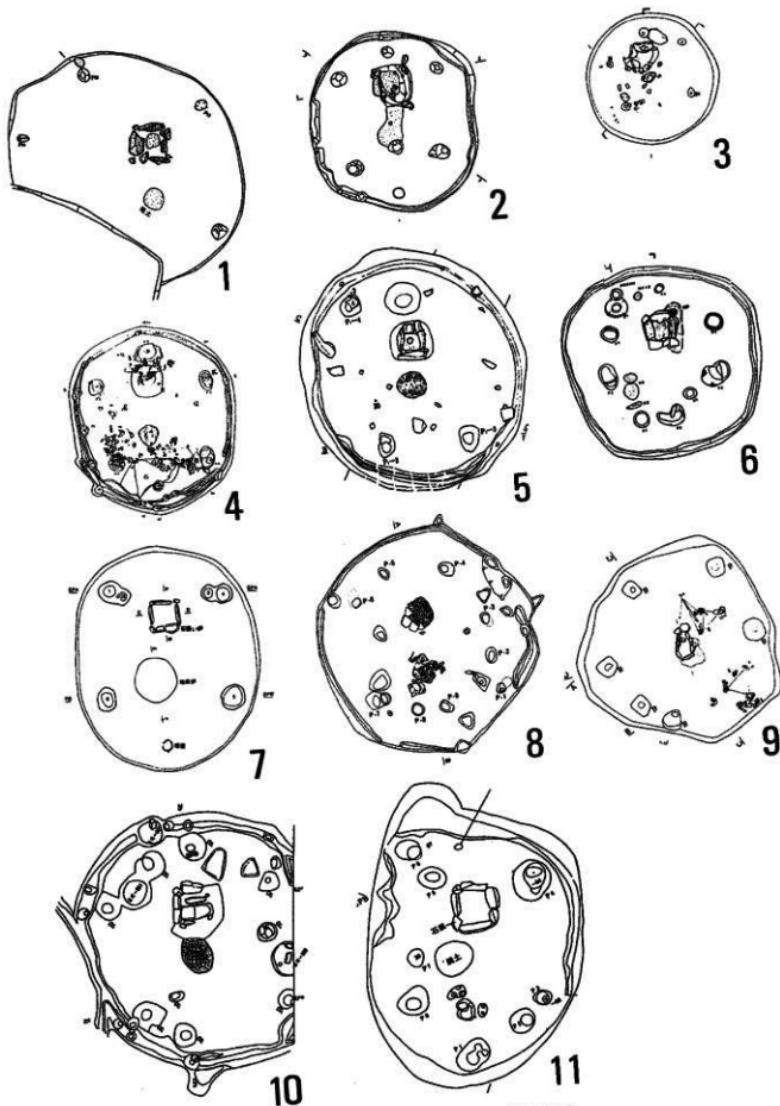
一宮町北堀遺跡（長沢 1985）では、縄文時代中期後半の住居跡が4軒調査されたが、本炉の形態を有するものは0軒である。境川村辻遺跡（森 1974）では、住居跡は確認されてはいない。

上野原町川合遺跡（田中 1989）では、同時代中期後半2軒中0軒である。

大月市の大月遺跡（田代 1974）では、確認されていない。宮谷白山遺跡（川崎他 1973）では、中期後半の住居跡1軒中0軒である。西桂町宮の前遺跡（奈良 1993年）では、縄文時代中期後半の住居跡5軒中0軒である。

都留市の中溝遺跡（仁科他 1974）では、縄文時代中期中葉の住居跡6軒中0軒である。同市法能の住吉遺跡（山本他 1972）では、縄文時代中期後半の住居跡2軒中0軒である。

まず第73図の分布状況から県内全体を見渡してみると、県内では広範囲にわたって縄文時代の遺跡が発掘調査されているのであるが、本炉の形態が確認されている遺跡は、主に県の北部でその集中を見る。特に八ヶ岳南麓では、確認されている密度が非常に高く、確かに「…………この地域の住居址に一般的に見られる…………」という指摘のとおりである。しかし、一遺跡の住居跡全体の軒数と、石圓複式炉を設置する住居跡との軒数を比較すると、あまりにもその差が開き過ぎており、必ずしも一地域（北巨摩地域）の住居跡に一般的に見られるとは言いたいように思われる。もし一般的に用いられたものとするならば、住居のほとんどのがこの形態の炉を設



第74図 石函模式炉の事例（縮尺不同）

置しなければならないであろう。

また本炉の形態を使用する住居跡の時期は、井戸尻式期から認められるが、そのほとんどは縄文時代中期後半の曾利式期のものであり、この時期に使用される石圓複式炉の形態の頻度は高いといえる。

しかし、設置される石圓複式炉の頻度が高いとはいえ、住居内に一般的に用いられた形態とはいがたく、むしろ、副次的なものとして地床炉が設置されたものと考えられよう。このよい例が、御所前遺跡の5号住居跡であり、先にも記したが顔面把手付深鉢は県内でも注目される土器である。このような土器が、住居の副次的な地床炉の直上から出土していることは、その炉がたんなる煮炊用とかに使用されていたとは考えがたく、また焼土も割合に厚く堆積していることからかなり頻繁に使用されていたことと思われる。

なおこのような例は稀であるのか、更に遺物出土状況を他の遺跡と検討して行かなければならないであろう。これについては今後の課題としたい。

本炉の形態を用いる积迦堂遺跡は、この遺跡から東にはその存在が認められず、県内では最東端に位置しているとともに、その周辺には該期の住居跡が確認されてはいるものの、「石圓複式炉」を使用した住居跡が現在では認められてはいない。どのようなルートを辿って本炉が伝達されてきたのかこれから問題となろう。积迦堂遺跡で特に注目されているのは、土偶の出土点数である。1116点と県内では勿論のこと、県外においてもこれだけの点数の出土は存在していない。

県外では、八ヶ岳山麓と同じにする長野県（小林 1988）、特に本県と接する場所については、本炉の形態を有する遺跡が点在しているが、分布状況等を把握していないのではっきりとしたことは言えないが、曾利式土器圏内でも極限られた地域に認められるものであろうか。この点については、さらに分布を広げて考えてみる必要性があり、今後の課題としたい。

また「石圓複式炉」を使用した住居跡の時期と、石圓炉のみの住居跡の時期に何らかの変化があるのかどうか、例えば同じ時期でも時間的な差なのか、或いは夏季・冬季に区分されるのか、それとも同じ時期に存在していて集落に存在している石圓複式炉を伴う住居の位置や、住居自体の用途、或いは使用方法の違いなのかについても検討していく必要性があろう。

（山本）

〔引用・参考文献〕

- 目黒吉明 「住居の炉」「縄文時代の研究」第8巻（1982）
末木 健 「柳坪遺跡」「頭無遺跡」「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一
北巨摩郡長坂・明野・蘿崎地内一」山梨県教育委員会 日本道路公団東京第二建設局（1975）
米田明訓 「柳坪遺跡」（山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第13集、山梨教育委員会、1986）
伊藤公明 「方城第1遺跡」大泉村埋蔵文化財調査報告書 6集、大泉村教育委員会、1988）
伊藤公明 「大和田遺跡 大和田第2遺跡」大泉村埋蔵文化財調査報告書 7集、大泉村教育委員会、1989）
樹原功一 「姥神遺跡」大泉村教育委員会（1987）
山本茂樹他 1989年より1994年現在まで調査され未報告である。
末木 健 「中原遺跡」「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」山梨県教育委員会（1974）
佐野勝広 「沢の田遺跡」小瀬沢教育委員会（1984）
平野 修 「根古屋遺跡」白州町教育委員会（1985）
雨宮正樹 「西原遺跡・当町遺跡」高根町教育委員会（1987）
山路恭之助 「津金御所前遺跡」須玉町教育委員会（1987）
清水 博 「メ木遺跡」櫛形町教育委員会（1987）
末木健他 「金の尾遺跡」（第25集、山梨県教育委員会、1987）
上野晴朗 「重郎原遺跡」山梨県教育委員会（1969）
小林広和他 「安道寺遺跡調査報告（概報）」山梨県教育委員会（1975）

- 中山誠二 「上の平遺跡 第4次・第5次発掘調査報告書」(山梨県埋蔵文化財センター
調査報告 第29集、山梨県教育委員会、1987)
- 小林広和他 「一の沢遺跡」(山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第42集、山梨県教育委員会、1989)
- 中山誠二 「上野原遺跡」(山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第19集、山梨県教育委員会、1987)
- 小野正文他 「糸貫堂遺跡Ⅰ」(山梨県埋蔵文化財センター 第20集、山梨県教育委員会、1986)
- 小野正文他 「糸貫堂遺跡Ⅱ」(山梨県埋蔵文化財センター 第21集、山梨県教育委員会、1987)
- 長沢宏昌 「北堀遺跡」(山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第7集、山梨県教育委員会、1985)
- 森 和敏他 「辻遺跡と薬在家遺跡」山梨県教育委員会 (1974)
- 田中悟道 「川合遺跡 関山遺跡」上野原町教育委員会 (1989)
- 田代 孝他 「大月遺跡 (I)」山梨県教育委員会 (1974)
- 川崎義雄 「宮谷遺跡発掘調査報告」大月市教育委員会 (1973)
- 奈良泰史 「宮の前遺跡発掘調査報告」西桂町教育委員会 (1993)
- 仁科義雄他 「中溝遺跡」都留市教育委員会 (1974)
- 山本寿々雄 「住吉遺跡」都留市教育委員会 (1972)
- 小林公明他 「唐渡宮」長野県富士見町教育委員会 (1988)

第V章　まとめ

調査区は9000m²とかなり広域にわたって実施されたが、確認された遺構の密度はさほど濃くはなかった。しかしながら発見された遺構の内容については広範囲にわたり、周辺地域にもたらす歴史的意義は大きいものと思われる。

発見された遺物については、縄文時代前期諸磯b式期から後期加曾利B1式期まで、平安時代から中・近世までである。遺構については、縄文時代中期初頭および中期後半の住居跡と土坑、縄文時代後期前半の土坑、平安時代と思われる掘立柱建物跡、中世の溝および斂状遺構、近世の墓穴等の調査を行った。

縄文時代中期初頭については集落の在り方、また中期後半では曾利期の集落の一形態、焼土跡ではC14年代測定によって縄文時代後期にあたる実年代の把握、平安時代では破片ではあるが墨書き土器の発見、出土したかわらけによって溝の構築時期が室町時代であることが明らかにされ、江戸時代の墓からは人骨と六道銭および煙管等の副葬品が出土し、一基ではあるがこの時期における埋葬の一形態が判明した。

日影田遺跡の立地は、南に緩く傾斜したわずかな起伏をもつ尾根上に立地していることから、東へ続く平坦地に集落が展開することが予想され、今後の調査によってさらに明らかにされるものと思われる。

末筆となりましたが、炎天下の中発掘調査に参加してくださった方々、そして本書を作成するにあたり整理にご協力してくださった方々には厚く御礼申し上げ、まとめとさせていただきます。 (山本)

附 編

炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

日影田遺跡は、北巨摩郡高根町地内に所在する縄文や平安あるいは中世などの遺構・遺物が検出される遺跡である。縄文時代中期と思われる炉跡からは炭化材が出土している。

ここでは、この炭化材の放射性炭素年代測定を行い、またその樹種について検討した。なお、放射性炭素年代測定は学習院大学理学部年代測定室の木越邦彦氏に測定していただいた。

2. 放射性炭素年代測定

試料は、8号焼土出土炭化材である。

なお、年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(One sigma)に相当する年代です。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、± 1% を付記してあります。

表1 出土炭化材の放射性炭素年代測定結果(炭化材の樹種)

試 料	樹 種	¹⁴ C 年代値 (1950年よりの年数)
7号焼土炭化材	コナラ節	
8号焼土炭化材	ケヤキ	2,950±80 (1,000 B.C.)

3. 炭化材の樹種

炭化材試料は、実体顕微鏡下で横断面について観察する。比較的硬質の部分を抽出し、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡(日本電子製JSM T-100型)で観察する。以下に、標本の記載と同定の根据を示す。なお、8号焼土から出土した炭化材は、複数個の炭化材からなるため確認を含め検討した。

コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科 図版2a~2c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる(接線断面)。

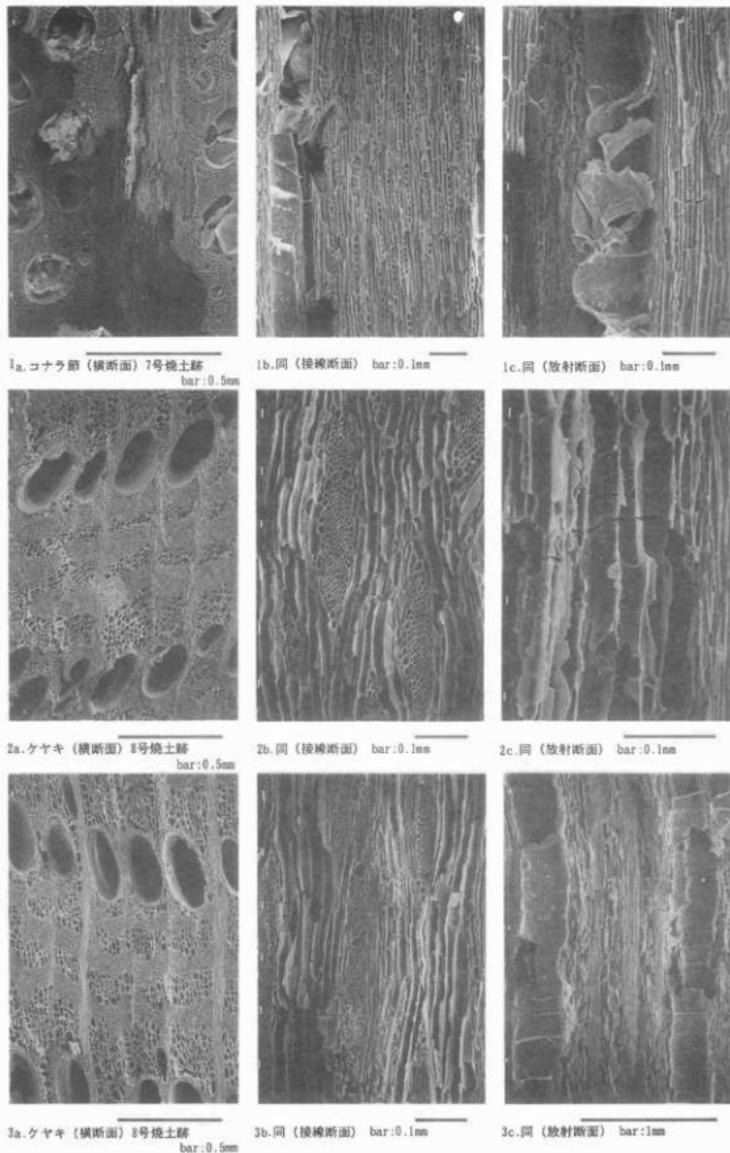
以上の形質から、ブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Q.serrata*)やミズナラ(*Q.mongolica* var.*grosseserrata*)、カシワ(*Q.dentata*)、ナラガシワ(*Q.alienae*)などがある。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科図版2a~2c, 3a~3c

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~50細胞高からなり、大型の結晶細胞も見られる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

図版 日影田遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



出土人骨について

森本 岩太郎（聖マリアンナ医科大学）

1. はじめに

平成5年（1993）6月、山梨県北巨摩郡高根町下黒沢字日影田所在の日影田遺跡近世遺構から17世紀～18世紀前半に属する古入骨1体が出土した。山梨県埋蔵文化財センターからの委嘱により、筆者がこの人骨を調べたので報告する。

2. 人骨の出土状態

日影田遺跡の近世遺構において発見された近世墓坑は1基（11号土坑）だけである。この11号土坑は、約165×115cm大の長方形を呈し、深さは約90cmである。墓坑の長軸方向は南北方向に向いている。土坑の上部には直径30～50cm大の礫が11個入れられている。墓坑底にある人骨の保存状態は良くない。人骨は、頭を北に向けた仰臥屈位をとり、顔は西に向いている。脊柱と肋骨が不完全ながら残っている。左右の上腕骨は体側に沿っている。左肘は直角に近い鋭角で曲がり、左手が胸の正中下部の前に位置する。しかし右肘は強く屈曲し、右手が右肩の外側付近にある。骨盤は正面をほぼ上に向けている。左右の下肢については、埋葬当初は左右の股関節を直角に近い鈍角に屈曲し、比較的強く曲げた膝を立てていたらしく、両足は骨盤に近いところに位置する。しかし埋葬後、土圧により両膝が右方に倒れた姿勢に変化したと思われる。これらの人骨の配列は解剖学的に自然である。

人骨の右側（墓坑の西壁寄り）には六道銭（5枚が寛永通宝、1枚が元重宝）、キセル、チャート、クルミが副葬され、これらを納めていた布袋とその付属金具（椎をあしらった模様あり）、布袋を入れたと思われる植物繊維で編まれた入れ物の断片が検出された。しかし、陶磁器、火打ち金は存在しない。棺桶の木片・釘なども認められなかった。副葬された古銭・キセルの所属年代は17～18世紀に相当する。

3. 人骨所見（写真1～3）

出土人骨は壮年期前半の女性1個体分であると思われる。頭蓋は左の側頭部が壊れて欠損している。顔面中央部も欠損するので、上・下頬部と脳頭蓋とが分離している。乳様突起と外後頭隆起が小さく、眉間から鼻根部・鼻背までのプロフィールがなだらかな曲線を描く。頭蓋冠の3主要縫合については、外板では骨結合化が始まらず、内板では冠状縫合が完全に開いており、矢状縫合とラムダ縫合が一部閉じて（骨結合化して）いる。頭蓋を可能な限り計測して、その主要頭蓋計測値を表1に示した。頭蓋最大幅は推定値であるが、頭蓋長幅示数は69.8を示して過長頭型の上限に属する。頭蓋高示数によれば、低頭型の上限に属する。顔面は保存が悪く壊れていますので、その特徴を把握しにくいが、眼窩幅が推定値ながら、眼窓は中眼窓型に属する。下顎枝の幅が比較的狭く、歯槽性突顎が強い。要するに、この頭蓋には中世日本人の頭型と顔貌の特徴が比較的濃く残っていると言える。頭蓋の形態小変異の存否については表2に示した。

歯および歯槽の状況を次に示す。

8 7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 ○○○×		○○ 3 4 5 6 7 8

ただし、アラビア数字は残存する永久歯、○印は歯槽開放、×印は欠損のため状況不明のことを、それぞれ表す。下顎の切歯を欠くので確かにことはいえないが、この女性の歯槽性突顎の強いことに関連して、歯の咬合様式は錐状咬合型というより、屋根咬合型と言ったほうが良いと思われる。歯の咬合度は、左上頬側切歯と左右の上顎犬歯がBroca 2度、その他の歯が同1度である。齶歯は見られない。

椎骨については、第1～3頸椎が比較的よく残存し、第4頸椎の残片もある。肋骨は殆どその形態を保っていない。

上肢骨については、左右の型甲棘の破片、右鎖骨の肩峰端、左上腕骨体、左の橈骨体・尺骨体、右の橈骨・尺

骨の上半部がある。左上腕骨体は埋葬後の変形により後弯するが、右上腕骨はほとんど形態を保っていない。

下肢骨については、骨盤および大腿骨の保存が悪く、殆ど残っていない。わずかに右の脛骨と腓骨体中央部だけが形態を保っている。右脛骨体の栄養孔部における横断示数は79.3を示し、正軽型に属する。

人骨に特記すべき外傷や病変は認められなかった。

4.まとめ

高根町日影田遺跡から北頭位仰臥屈位で出土した江戸時代人骨は壮年期前半の女性1個体分である。頭蓋は長頭型で、歯槽性突顎著しく、中世日本人の形質が濃く残っていた。

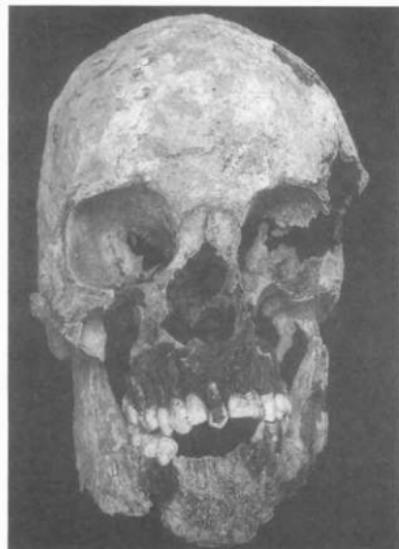


写真1 11号土壙出土女性人骨頭蓋の前面観



写真2 11号土壙出土女性人骨頭蓋の側面観

表1 頭蓋計測値および示数（番号はMartinによる）

	項目	数値 (mm)
1	頭蓋最大長	179
5	頭蓋基底長	96
8	頭蓋最大幅 (125)	
9	最小前頭幅	78
11	両耳幅	115
17	Basion-Bregma高	124
51	眼窩幅(左)	(40)
52	眼窩高(左)	32
8/1	頭蓋長幅示数	(69.8)
17/1	頭蓋長高示数	69.3
51/52	眼示数	(80.0)

表2 頭蓋形態小変異の存否

項目	右	左
内側口蓋管骨橋	(-)	(-)
舌下神経管二分	(-)	(-)
頬管欠如	(-)	X
鼓室骨裂孔	(-)	(-)
眼窩上縁孔	(-)	(-)
顎舌筋神経溝骨橋	(-)	(-)
前頭縫合	(-)	
二分頸骨・頸骨後裂	(-)	X
イシカ骨	(-)	
頭頂切痕骨	(-)	(-)

() 内は推定値

(-) は存在せず、X印は欠損のため状況不明



P O N M L K J I H G F E D C B A

図 版



調查区全景



調查風景



第1号住居跡 完掘状況



第1号住居跡 炉遺物出土状況



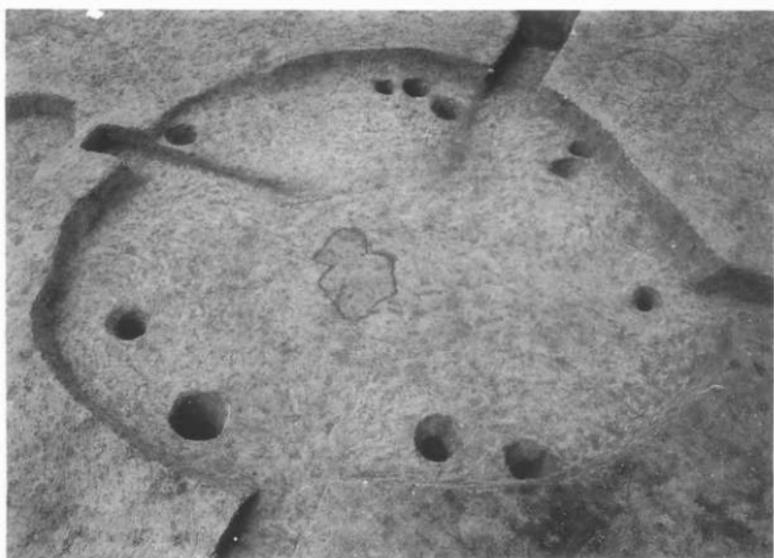
第1号住居跡 土器出土状況



第2号住居跡と土坑群完掘状況



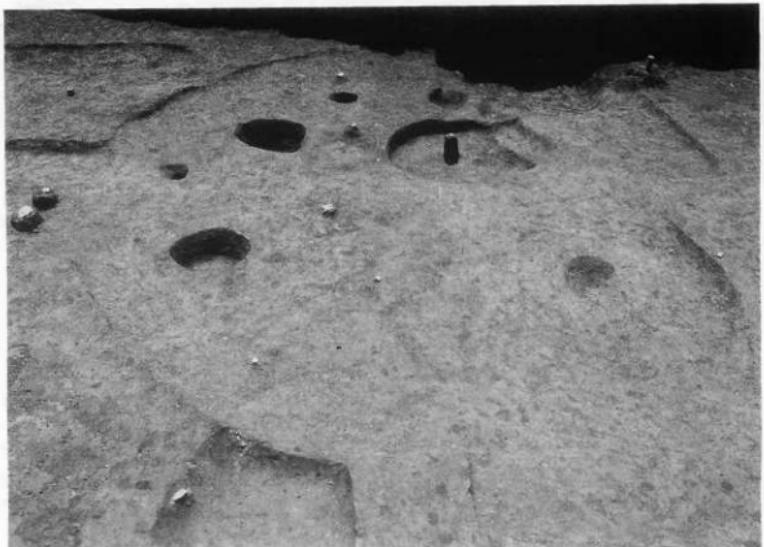
調査状況



第3号住居跡 完掘状況



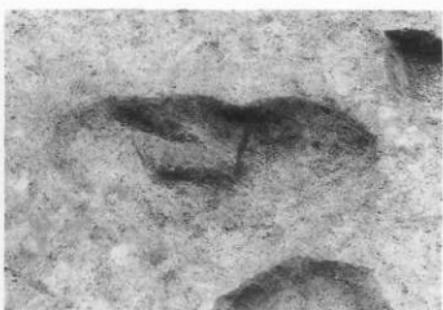
第4号住居跡 完掘状況



第4号竖穴状遗構 完掘状况



第2号烧土跡



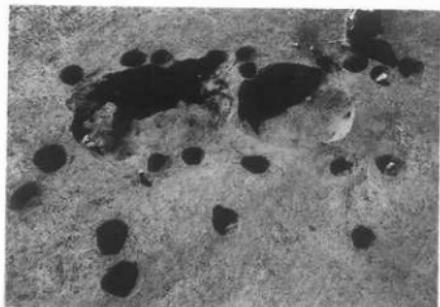
第7号烧土跡



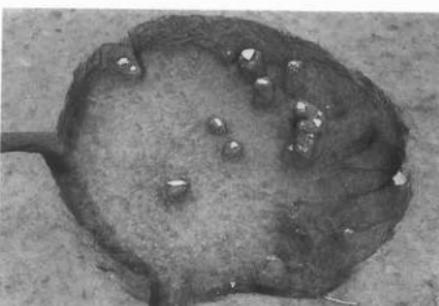
第8号烧土跡



第10号烧土跡



第1·6号土坑



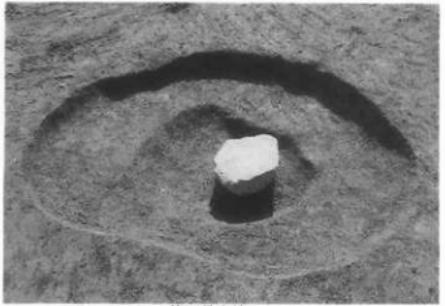
第8号土坑



第12号土坑



第11号土坑 确认状况



第14号土坑



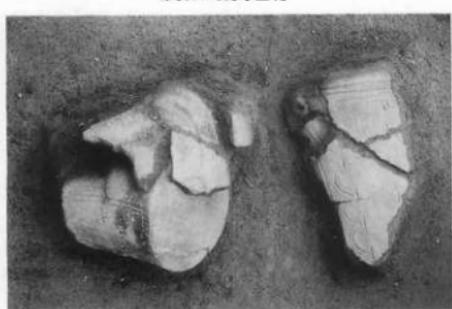
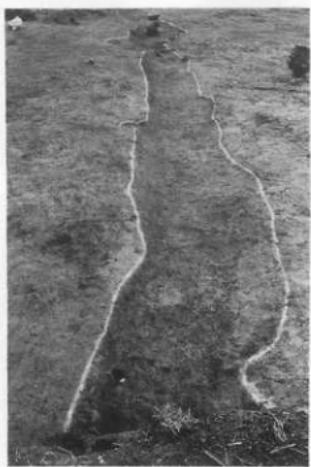
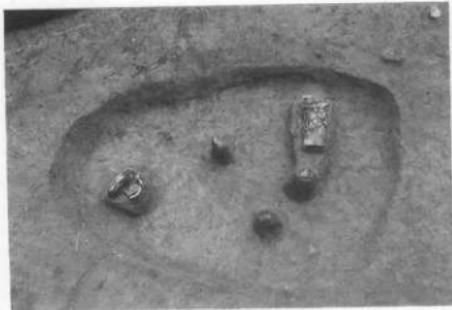
第11号土坑



调查区北侧部分 遗构完掘状况



第11号土坑 遗物出土状况





第4号溝



第1号溝・第1号竪状遺構



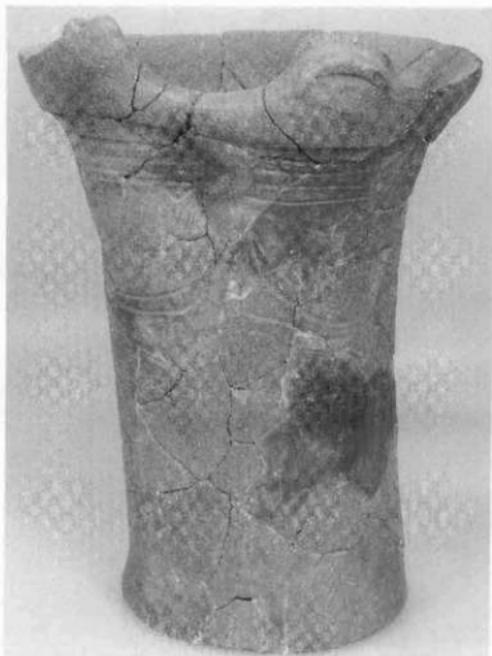
I-8 グリッド遺物集中区



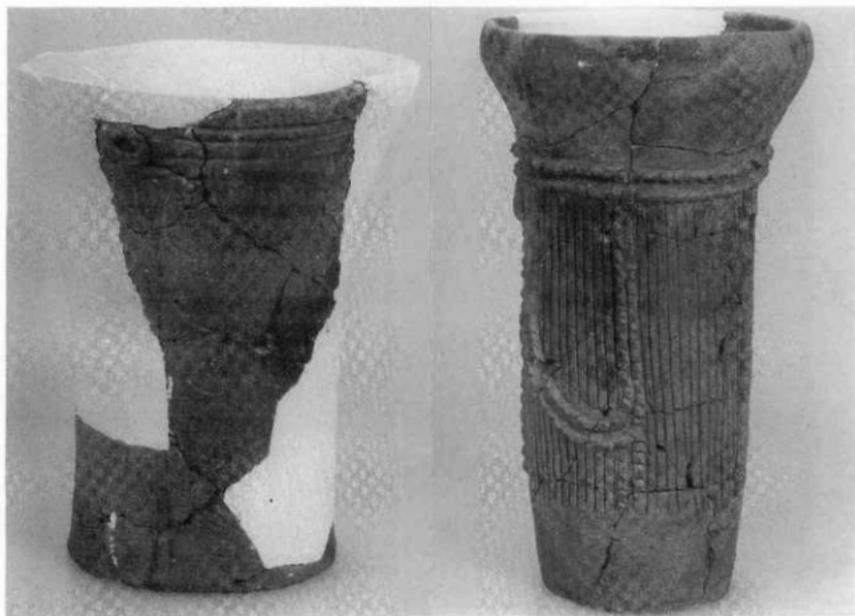
I-15・16グリッド遺物集中区



第2次調査区全景



I-8 グリッド遺物集中区
出土土器
(第52図・1)



第108号土坑出土土器 (第29図・43)

第97号土坑出土土器 (第28図・33)

報告書概要

フリガナ	ヒカゲダイセキ	
書名	日影田遺跡（第1・2次調査）	
副題	県営高根南団地建設事業に伴う発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第100集	
編著者名	山本茂樹・澤登正仁・野代幸和・三田村美彦・村松佳幸	
発行者	山梨県教育委員会 山梨県土木部	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3881	
印刷所	（株）峠南堂印刷所	
印刷日・発行日	1995年3月22日・1995年3月30日	
ヒカゲダイセキ	所在地	山梨県北巨摩郡高根町下黒沢2301 外
日影田遺跡	25000分の1 地図名・位置・標高	若神子 北緯35° 48' 6" 東経138° 24' 20" 標高640m
概要	主な時代	縄文時代中期・後期、中・近世
	主な遺構	縄文時代中期の住居跡5軒（五領ケ台II式期3軒・曾利I式期1軒・不明1軒）および土坑 113基・ピット群、平安時代以降の掘立柱建物跡・溝、近世の墓
	主な遺物	縄文時代前期・中期の土器・石器（打製石斧・石鎚・石匙）、中世の土師質土器
	特殊遺構	
調査期間	1993年4月22日～4月30日（試掘調査）・1993年6月21日～10月8日（第1次調査）	
	1994年4月27日～7月29日（第2次調査）	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第100集

印刷日 1995年3月22日

発行日 1995年3月31日

日影田遺跡

(第1・2次調査)

—県営高根南団地建設事業に伴う発掘調査報告書—

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社山陽印刷所
